

が何したらよからうか」と相談する。師傅某は大に驚いて「殿下何をメッソウな事を仰しやられます、この様な結構なる場所をお逃げにならうとは、臣は貴意の存する所を知るに苦しみませう」と云つて、切に極樂境逃走を思ひ止まされよと諫言する。この時に太子は憂愁に曇れる顔を侍臣の方へ向けて、己は今ではこの『不足のないの』を不足に思ふの『ぢや』と答へられた。この一語眞に味ふ可しであつて、人間と云ふものは不足のある時には不足のなからん事をのみ祈るけれども、一旦不足のない身分となると、サア今度はその不足のないと云ふのが不足となる。何もこれは不思議な事ではないんで、浮世を組織する根本の原理なのだから致方がない。人間生きてゐる間には不足のないと云ふ事はない。太子は人生を此の如くに感じて、極樂は決して極樂でないと思つて、辛うじて可憐なる妹と師傅某と共に險峻なる山路を踏破して、やつとの事、此の浮世の地獄へ出た。元より衣服も着のみ着の儘ではあるし、金とても澤山は持つてゐぬから何かと不自由を感ずる上

に、雨が降る、風が吹く、暴漢につけられると云ふ工合に旅路の辛苦は實に言ふ可らざるものがあつた。サアこうやつて戀ひ慕うた地獄へ出て艱難辛苦を積んで見ると始めて極樂の面白いことが知れて來た。ソコで又々極樂へ立戻ると云ふのがその小説の梗概であるが、いかにも此の人生の徑路が巧みに書いてある。困難辛苦をした上で初めて安樂境が戀しくなるのである。

鳥獸でも同じ事で、野山に居る時には風雪のために餌を求める事が出来ぬから、籠の中へ飼養してやれば喜んで居さうなものだが、やはり野山がよいと見えて、籠の口を開けるが早い、ハイ左様ならとも何とも云はずに飛んで往つて了ふ。動物園に居る獅子でも虎でもさうだ。人間でも貧乏世帯の娘などは、妾の生活などを羨んで、ドウかあんなに平素も絹物を着てゾベラ〜と暮して見たいものだなど、云ふつまらぬ考へを起す者がないでもない。而してこの女が妾を志願して首尾よく妾になつたとした處

自我の奥底
には奮闘向
上を喜ぶ心
あり

が、それで果して一生涯中幸福を感じるかと云ふと、決して左様なことはない。動物的な不自由な奴隷的な生活は人間に堪へられるものではない。苟も人が健康なる身體精神を有して居る以上は、決して眞情から左團扇の境遇を羨むものではない。一時の迷から左様もしたらなど、下らぬ考を持つことがあつても、忽の間に我と我を見違つたことを知るであらう。なぜ左團扇の生活で満足が出来ないか。其れは我々の生ひ立ちを進化の上から考へれば至極明瞭である。昔吾々の祖先は、櫛風沐雨で、家屋もなく、衣服もなく、田畑もなく、たゞモウ隣りの部落と狩場や漁場の競争掠奪をやつて来たもので、今でもその精神と云ふものは吾々の頭の中にチャンと浸み込んで居る。吾々の祖先は奮闘の上で生き延びて來られた者で、此の祖先の子孫たる吾々にも奮闘競争の精神は宿つて居る。人生は一面から見れば戰場である、それだから互に人に踏みつぶされまいと心掛ける必要がある。ウツカリして居ると強者のために壓倒されて、蹂躪されて、殺されて了ふ。

優勝劣敗は人生の常理だ。此れは甚だ無情のやうではあるが、よく考へれば眞に已むを得ない。優勝劣敗といふことなくば、此地球は忽ち人間を以て埋められて了ふに違ひない。マア諸君見給へ、あの春先きに池や沼の中などにゐる蛙の子はどうであらうか。コンニャクの中へゴマツプを入れ、たやうな蛙の子が澤山ゐるでせう。あれが皆んな生きてビョコンビョコン飛出されて御覧じろ。それこそ吾々の天地は丸で蛙の子で一杯になつて、居る所も何もなくなつて了ふに違ひない。ウソのやうな話であるが、米國などでは蝗が夕立雲の如くに、其れこそ數限りもなく押しかけて來た爲めにレールの上を列車が進行する事が出来ないの、已むなく停車して了つたと云ふ事がある。いくら諸君が萬物の靈長だと云つて威張つた處でコンナ強敵に出會うては到底かなはない。が、そこは巧く出來てゐるので、あの蛙の子でも蝗でも小兒に石を投げられて殺されたり、蛇に食はれ鳥につつかれ、天日に照りつけられ、或は其他様々の原因で殺されて了ふから、吾

々を害しない位の數で濟む事が出来るのだ。百萬匹の子の中で九十九萬九千九百九十六七と云ふものは死んで了ふのだ。人間でもさうで、澤山生れる子の中には必ず死ねべき運命に出合はねばならぬ道理である。誰れが殺されるか何の國民が亡びるか前以て分らぬが、必ず何れか殺され亡びなければならぬ。此事は近年國際間では劇しく行はれ、誰も見落すことの出来ぬ程著しくなつた。英國でも露國でも獨逸でも佛國でも『ヘイ御免なさい、御免なさい』とづんづん遠慮なしに人の國へ押し寄せ、出シヤバルやうになつた。誠に修羅場と云ふ有様だ。考へれば恐ろしいやうなものだが、實は吾等の祖先も皆んな此のやうな事をやつて來たのだ。アイヌやコロボツクルなどが今日漸次その數を減じて殆んど絶滅に瀕してゐると云ふものは、全く吾々の祖先が放逐して了つたからのことで、何れは劣等人種など、云ふものは終には實物を見る事は出来なくなつて、僅に博物館などに往つて、歴史的の昔の俤を偲ばねばならぬことになるであらう、つま

りミイラと化したるものを見るやうになるだらう。そうさせたも誰であるかと云ふと、みんな吾々の祖先と吾々の責任なので、お互に平和な顔をして居るけれども、その根本を押し下して見ると、人の肉を喰うて口を眞赤にして居る性質がある。それで男女ともに危険極まるもので、各々他人をつきのけて自分が前に出やうと云ふ傾を有つて生れて居る。併し此れを本として例の厭世觀を立ててはならぬ。ツマリこれあるがために人生の進歩發達は得られるので、左團扇主義は子孫斷滅である。此世の中では、『完全な人間の、み生きよ、病身で、ロクでなして、樂ばかりしたが、奴は早く死んで了へ！』と神や佛がチャンと定めてゐるので、別に致方はない。唯そんな人は氣の毒な者共だから花々しからぬ往生でも、往生際にだけは我も人も共に一遍の念佛は唱へてやりたい。併し、いかに氣の毒だとは云へ、苟も天地の大法である以上、其の大法に背く譯には往かぬ。例へん金城鐵壁を以て外を圍ひ、金銀財寶山の如く内に堆うしてゐる家庭でも、其の大法に背く上

は罰として内面から肺病やチブスの微菌が飛び込んで来るのを防ぐ譯には往かぬ。瀬のある水には汚ない藻や萍は出来ぬやうなもの、いつも使用する鑿や鉋には錆が出来ぬのと同じ事で、脈のある人間はラセラス太子の如く『不足なきを不足とす』として活動勤勞するのが當り前である。極樂に入つた限り『あゝ好い所だ』と手や足を伸ばしてゐるやうなものは、此世ではモウ脈はないといふものである。

然らば處世上何處へ眼を着けてゆけばよいかと云ふと、先づ第一に樂をした、樂のみがしたいといふ意氣地のない考をサラリと捨て、了つて、前章に説いたやうの働いて、銘々の人に良心が出来て、何人も善とか悪とかいふ事を判断する心が授けられてゐるから、先づ自分は何の仕事をして正いかといふとを考へ、次に正しいことの中で自分の好きなことは何かと考へ、それで更に自分は何が出来るかと考へて、正しい好ましい出来る仕事を撰んで、之れに興味を有つて勉強するのが人らしい人なので、即ち『生のよい』人間

大着眼點

なのだ。たゞ呆然とノンキに構へてゐるのは人らしからぬ、生き甲斐ない、否、人生其物のない生活なのだ。あの厭世家は何か。華嚴の瀧や淺間山や此頃は田子ノ浦などで自殺をするのが流行するが、そんな連中はみんな愉快のみを考へてゐる人々なので、望とあらば人間を辭職して了ふがよい。元來人生はジツとして居て外から快樂を受け込む所にはない、意志力を以て内から外へ働き出す所にある。外から刺激を受ける所に自我の本領はない、内から自力を現はす所に自我の眞面目を發揮する。今快樂利益は外の刺激を主としたものであるに反して、活動や仕事は内的自我を主としたものである、人生の價値を計るにも此所の處で勘違をすると、迷を生じ厭世を感じ飛んでもないことになる。譬へば結婚なんぞでも、十露盤をとつて考へて見たら引合つた話ではない、二十五圓の月給をとる人が妻を迎へて子供の二三人も出来たら、モウ粥でもすゝらなければならぬやうになる。それがイヤだからと云つて妻を迎へずゐる譯にはゆかぬ。苦しくても

何でも子供の教育にはシツカリ注ぎこまなければならぬ。實際快樂利益標準から考へてみれば、世間で妻君に「厄介」と云ふ別名をつけて居るが、全く其の通りで、伶俐の快樂主義者は結婚は馬鹿々々しいと考へて居る、戀愛なんてものは敢てニキビを出して騒ぐ程のものではない。其れ故西洋では、特に米國では主に婦人、佛國では男子が何れも十露盤から勘定をして、結婚を避けてせぬと云ふ傾向がある。それがため此れ等の國では獨身者に對して獨身税を課して居るといふ。米國の獨身女子に對してはルーズヴェルト大統領が其教書の中に八ヶ間敷く論じたことがあつた位だ。去ればと云つて、人世に結婚を廢することが出来ませうか、結婚を廢して善いてありませうか、一概に論斷する譯には往かぬが、結婚を損だ、廢めるが可いと言ふは幸に少數の不健全者の寢言で、健全な心身をもつた多數は、左様な十露盤勘定で結婚問題を決定せぬ。餘り十露盤勘定が足りぬといふ程まで、當り前の人は輕々に此の問題を可決する傾がある。快樂主義でなくとも輕

活動主義の
妙効

卒な結婚は勿論避けなければならぬが、大體上結婚生活は正當で愉快であることは、東西常識の一致する所であつて見れば、快樂主義では結婚の一事さへ満足に解釋が出来ぬことが分る、況んや其の他複雑な厭世や煩悶をやである。

之れに反して活動主義を以てすれば、内面の要求、人生、自然の命令に基いて活動する所に、人生の本義本領を認めるのであるから、結婚が大體可決せらるべき理由があるばかりでなく、厭世の誤を知り、又之れに従つて實行すれば、厭世觀を改めさせるとも出来る。此所に一人の青年が厭世觀に陥つたとする、もう此の浮世に何等の望もない、何をするのも厭といふ有様になつた奴を直すには、此の厭世の精神療法は喧嘩をしかけるのが一番よい、『貴様は意氣地のない奴だ』と罵倒してやつたり、又は碁か將棋なんぞをやつて見て、大に負かして、其上ホラを吹いて聞かせてやると、先方もついムキになつて、『何を小癪な』と云ふ考へを起して食つて、かゝるやうになる。青年の今

の意識の中にはツマラヌ、死んだが増しだといふ考がある斗であるが、例の祖先から譲り受けた遺傳の中には、向上奮闘を喜ぶ性質も潜んで居て、其れが刺激に應じて發して來るのである。サアこの小癩など云ふ考へが青年の内面から出ればモウ占たもので、中々死ぬるものではない、つまり其の青年を受身でなくて働きかけの態度、即ち活動能動の態度に立たせることが出来れば、其の青年は自然此の世に愉快を感ずるやうになる、それを只もう受身にばかりして置いたんでは、いかな名僧善知識の御講釋を拜聽させても三文の役にもたぬ。して見ると正業を興味を以てするとの中には、『忠實』業に服するといふことの中には、快樂利益があるばかりではない、其れ以上人が人になれるといふことがある、自我が始めて自我になれるといふことがあつた、仕事をすることを利益名譽の手段としないで、仕事其物を樂しむ活動其物を目的とするといふことの中に、自己の幸福を發見するといふのが完全主義の教である。

(ホ) 完全説(下)

活動は正大ならざるべからず——正大とは——個人と團體との關係——プラット
 ーの男女の起原——有機的社會が各個人に個人性を與ふ——共同秩序法則
 正義の重大——同時に、特私進歩、自由、自尊の重大

前節に完全説とは活動主義で、正しい仕事其物を樂んで之れに従事するといふ處世上の大有眼點であると言つた。それ故凡そ仕事でありさいすれば何んでも興味を以てすれば可いといふ譯ではない。仕事は必ず正大でなければならぬことは言を待たぬ次第である。抑も正大とは何を云ふのであるか、其れは詰り、二つのことを意味するので、先づ第一には自分と自分が相衝突するやうな欲望を満足させる仕事は正しくない。此やうな仕事は大なれば大なる程身の破滅である、謹んで避けなければならぬ。換言すれば、自家矛盾に陥る様な仕事は正大でない、譬へば大酒をして腦を害しながら一と角の大學者として成功しやうとする仕事の如きは、何れをも樂しむにした所が正しくない。此の點では諸欲望の代議士を撰擧し

正大とは

個人と社會との關係

て國會を開いて議決して前進せねばならぬ、即ち良心の命に従つて行動せねばならぬとを前節に述べて置いた。併し十分に正しいことをするには、立派な健全な良心の指導に従はんとするには、更に第二に他人と矛盾せず、寧ろ他人と歩調を合せて進むやうしなければならぬ。換言すれば、我が活動は甘んじて社會の制限に服しつゝ、行はれなければ正大とは言はれぬ。此れから少しく其の理由を述べて見やう。

先づ個人と團體と云ふものの正體を見届けたいと思ふ。個人とそれからして社會或は國家、それから私と公、それから秩序と自由、統一力とそれに統一される所の多様の力と云ふものは、相待的の觀念でありまして、實は公がなければ私と云ふもの、あらう筈がなく、又個人がなければ團體もない、團體がなければ個人がない。是は分り切つたこととて、絶對的の個人、そんなものは事實にありはしない、個人と云ふならば既に團體を意味し、團體と云ふ時分には既に個人を意味して居る。斯う云ふ譯ですから、公を離れ

プラトインの男女の起源

て私なく、私を離れて公なしと云ふのが本來の觀念の上から見ての見解であります。今個人と其從屬して居る社會との關係を説明するに好い例がある。プラトインがシンポジウムと云ふ——プラトインと云ふ昔の希臘の哲學者が問答書を澤山書いて居ります。此方で申しますれば孔子様の論語見たやうなものでございますが、其中に非常に面白い愛と云ふことを説いた、シンポジウムと云ふ一篇がある。其の中に此個人と團體、公と私を説明するのに、極く都合の好い譬が書いてありますから、之を一ツ申上げて見やうと思ひます。

男と女と云ふものは本來社會と云ふ一の團體で、此社會と云ふもの、極くの標本は男女關係即ち夫婦と云ふものにあることは言ふ迄もないことであります。この團體と云ふものに依つて、此兩方の個人性が分れると云ふことをプラトインが斯う云ふ風に譬を借りて云ふてある。それは男と女の起源を説明したもので、どんな工合に説明してあるかと云ふと、一番始

めの人間と云ふものは、圓ツこかつた、脊中の方も脇の方も圓を形づくつて居つた。それで其一番始めの人間と云ふものは、男も女もない、四ツの手と四ツの足を以て一の頭に、二ツの顔があつて前と後ろにある、それで今人間が歩くやうな工合に眞ツ直ぐにも歩けるし、後ろの方にも歩けるし、前後勝手に歩ける。それで此四ツの手四ツの足を持つて、輕業師が縦横上下自由自在に駆け廻るやうな工合であつた。それで其力と云ふものは非常に強くあつて、従つて其考と云ふものも大膽であつた。或時此人間が集つて天上にある神様を攻撃し掛けたことがある。ツマリ神様に向つて謀叛をし掛けた、甚だ無鐵砲な惡戯をすると云ふ位迄酷い所へ往つた。それだから神様達が天上に會議を開いて、ア、云ふ人間は殺した方が良からうか、電雷を以て一打に打殺して仕舞つたら宜からうか、どうしたものであらう、若し打殺して仕舞つたならば、吾等を拜むものが無くなつて困る、我等に犠牲を備へるものが無くなつて困る、殺すに殺されず、生かすに生かされず、困つた

ものだと云つて居る所を、知恵のある神様が一つ方案を考へて言ふのに、私は非常に好い方法を考へ付いた、彼等の暴慢なる所を抑へ付けて、彼等の惡戯を止める方法を思ひ付いた。彼等を何も殺すに及ばぬ、殺さないで、彼等を二ツに割いて仕舞ふが可い、もと一ツになつて居るから非常に力が強いのであるけれども、あれを二ツに割いたら、二本の手、二本の足で、前より二分の一の力になつて仕舞ふだらう。だから犠牲を捧げる人と、拜んで呉れる人とは、今迄より倍になるやうになつて、而も彼等の力は二分の一に減ずるから、大膽な惡戯は出來なくなる、是れ一舉兩得と云ふものである。それでも彼等が、尙悪いとをするならば、もう一ツ之を四分の一に切つて仕舞つて、一本足で立つやうにしてやつたならば、必ず成功するに相違ない。と斯う云ふので、他の神々も其れこそ名案と賛成した。ソコで圓かつた人間を糸を以て玉子を割るが如く、二ツに切つて仕舞つた。もともと一ツのものが二ツに切られて仕舞つたから、人は始めて二本の手、二本の足の吾々男女

の如き者になつた。今迄一緒に居つたものが二ツに分けられて仕舞つたものだから、男女は互に他の半分を戀しがつて、どうか逢ひたい顔が見たいと云ふ感じを始終持つて居る。此の二つのものが、自分の他の半分を見る時分には非常に喜んで、他の半分を見ない時分には非常に悲哀を感ずるといふ。即ち男女の愛の出所を説いたものである。是れは元と分れなかつた一と云ふものから、二ツのものが生じて來たので、男女二ツが寄つて一を爲すものであると云ふことの説明を、譬を以て説いたのでありませう。果してこんなことが有つたか無いかと云ふことは、申す迄もなく事實上の根據によつたのではない。二ツに切つたなどと云ふが、切つた跡も何もない、別にさう云ふことはないのでせうが、男女と云ふものゝ區別は、何時起つたか、之は誰もさう確然能く知つて居るものはないが、併ながら此話に就いて、最も吾々が注意しなければならぬのは、一が即ち二になつて居ると云ふことは是非承知しなければならぬ點である。此中島なら中島と云ふ

人々の有機的結合

男が自分一人丈で満足な人間だと云ふやうに考へると違ふ、唯獨りとして見る時分には、此は即ち人間ではない、男と女と云ふものがあるから、茲に始めて人間と云ふ者が生ずるのであつて、即ち男を男たらしむるものは女と云ふ他の半身があるから、女を女たらしむるものは男と云ふ他の半身があるからである、と云ふ眞理は、争ふべからざるものである。茲に男と云ひ女と云ふ、特異性があるのは、男女の共同團體がある爲で、此一團體が二の各に特異性を與へたのである。男の身體と女の身體と違ふ、男の心持と女の性情は違ふ、男の能力と女の能力は違ふ、違ふけれども二人共同で同一の事業を經營して居る。個人性は本と社會全體が生むだもので、其れを發達させるものは、取りも直さず社會全體の完全を來たすことになる。

話を簡單にする爲め、モ少し男女と云ふ社會を假りて、共同性と特異性の値打を研究して見よう。男は單に男丈として考へて見まして、價値があると思ふと、それは男の考違ひで、女でも女丈で其價があると思ふと、女の考へ

違ひである、男女が相愛する愛と云ふ羈絆に依つて、兩方が繋がつた所で始めて是等の價值がある。二ツの物が寄つて一の物を成すと云ふが爲に、女性が價值があると云ふとは、多言を要せず明瞭である。勿論之は必ず現實夫婦にならなければならぬ、夫婦になつて始めて價值があると云ふ意味ではない。唯だ全く男が世の中に居ることを知らぬやうな亞米利加の一種の女などのやうになると、女の價值が幾らもないといふのである。マクス、オーレルと云ふ滑稽な一著述家が『女王陛下及び其戀人』と云ふ本——而も其表紙に『女王陛下』と大きく書いて、其下へ及び其戀人と云ふ字を顯微鏡で見るとやうな小さな字で書いた滑稽の本を書いた。其本の中に亞米利加の『新種婦人』と云ふのがある。其婦人は、男が世の中に居ることを考へないで、尤て男と同じ仕事や同じ權利を得たがつて居る。ソコデ今迄世界になかつた新種類の女が出来たと云つて居りますが、ホンニ男の居ることを忘れた女は恐入る。さうかと云つて、始終男の居ることばかり考へて居る女

が、女らしいと云ふ意味ではない。女は又是非夫を持たなければ女になれぬと云ふのではない。一生獨身でも宜い、油繪にある人を以て己の夫としても宜い、小説中の空漠たる男子を己の夫として居つても構ひませぬ。が兎に角、女らしからぬ女、男らしからぬ男は價值がない。男女は此肉眼で見へる所は二ツに分れて居るけれども、其實は一ツの理想目的を有つて居る。理想目的の一つに結び付けられて居る。それであるから、女の個人性と云ふものは、此の相互に結び付けられた全體から與へられたものである、男の個人性と云ふものも、全體から與へられたもので、個人性は全體から離して考へれば何等の意味も、何等の價值もないものであると云ふことは、極めて明白なことであります。男島が太平洋邊りに出来たとして、女島が事實あつたとか云ひますが、其男島の獨立、女島の獨立は、取りも直さず人間として無いのも同じことで、斯う云ふことを男女有機的に結合されて居ると申します。男女が有機的に相結合して居ると同じく、凡そ社會内の凡ての人々

は、よく調べて見れば、皆有機的に結合して居る。我の我たるは彼あるが爲め、彼と結合して居る爲め、彼が彼たるは我あるが爲め、我と結合して居る爲めである。ソコデ我と彼とは各固有の性質能力があつて固有の仕事があるに相異ないが、其の仕事をするには、他人と歩調を合せてしないと、彼我一體で出来て居る大きな我を害ふやうになる。換言すれば、人々には特性があると共に統一がなければならぬ。彼我一體の大なる我とは即ち社會のことで、社會の中に統一と云ふ非常に確乎とした秩序がある、其統一の中に種々異つた自由がある。此統一が段々強くなり、自由が段々大きくなるのが世の中の進歩である。進歩の世の中では、個人性が段々廣く發達して、統一力が段々強くなり、なければならぬ。

東京は日本の中で比較的完全な部分である。それ故、御覽なさい、比較的個人性特異性の發達した人、見様によつては變りものが頗る多い、而して相互の用を足して居る。東京市と云ふやうなものは、言はば實に變人及片輪

人の存在と
價値は社會
的に生ず

者の寄合である。皆どうも一癖ある所の、外の人とは違つた極く人と同じやうなことをしない人間ばかりと云つても可い。大學の先生であるとか、或は又會社の社長であるとか、學校の校長とか云ふやうな人は、誠に立派な人でありませうけれども、見方に依れば、誠に不自由な人間で、片輪な人間である。學者など或る事に掛ては非常に能く知つて居つても、他のことには迂濶千萬なもので、獨逸のレッスینگと云ふ先生は、自分の家に行つて、自分の家の小使に、先生は御在宅でございますかと云つて聞いて、小使に先生は御留守でございますかと云はれたら、それでは又参りますと云つて歸つて往つたと云ふ話があります。その位迂濶な人間がある、自分が學校へ行つて今歸つて來たのだから、主人の居らう氣遣はないけれども、自分の家の小使に會つて、先生御在宅ですか、御留守でございます、それなら又参りませうと云ふ傾向が學者先生にはある、先づ或る意味の片輪者で、或る理學者は着物を着たなりお湯に這入つた、結婚式の時花嫁に待ポケを食はせたやうの話は

澤山ある。言ひ換へて見れば、特異性の發達に熱中して居る、個人性が或る一方に著しく發達して居る此片輪者は、離れれば困り者だが、扱て他の片輪者と結び付いて全體として寄り集るとすると、此片輪者其儘で非常な價値が付いて来る。一ツ／＼離して、千島邊りに持つて往つて棄てておくとする、日本の中で、東京の人間が一番困るに違ひない。「アイノ」などは、何處へ追ひ放しても困らぬ、彼は獨り大工もやつて、家も拵へれば、魚も捕り、熊と組打もする。所が東京の人間はそれは出来ぬ。けれども出来ぬと云ふのは、人として價値がないのかと云ふと、さうではない。大きな團體と云ふものを組織して、其團體と云ふもの、一人になつて居るとすると、「アイノ」などに較べて見れば、天地霄壤の價値の相違がある。自分の家に行つて、旦那様は御居てですかと云ふその先生に價値がある。其先生の方が値打がある。魚は捕れぬでも、大工になれぬでも、熊と組打は出来ぬでも、宜い、眞理の上の研究に、一に全身の力を注ぐことが出来る一種の片輪者の方が價値が

ある。所謂此片輪の變人と云ふものをして、價値あらしめるものは何であるか、東京としての全體、東京市と云ふ有機的全體が、之に價値を與へるので、有機的全體と云ふものがあつて、始めて此の片輪者に、人間としての價値が非常に高いといふ性質を生ぜしめたものである。夫故に男を忘れた女があつてはならず、女を忘れた男があつてはならぬと同じやうに、此人間と云ふものは、己の從屬して居る所の社會全體のことを忘れて、全體を愛する心を失ふと云ふと、己の存在と價値とを同時に失つて仕舞ふと云ふことは明瞭なる譯であります。始終流行つて居ります言葉に依りますと、國家及社會に對する忠愛心のない所の自尊心と云ふものは、即ち所謂我儘、放埒、利己と云ふものになつて、之は進化論上、劣敗の運命に向つて急ぐ連中のことである、決して取るべきでない。

モ少し個人自由の活動と、社會國家の側からの制限との關係を明らかにしやう。世の中には、社會國家の制限の方へ、斗り重きを置かうとするもの

個人、個人
性の用

もあるが、此所には又大に考ふべきとがある。吾々は前條の理由によつて、果して社會國家を愛する念を以て、個人、個人性、特異性を壓服するとを是認できやうか。否な我々は之に對して、寧ろ大に異論を挿むのである。而て其の異論を挿む理由も、矢張社會國家を愛する念と同一根據に立つのである。全體、統一、秩序、團體と云ふ方の方面は、何方かと申すと、文明開化が今迄進んで來た所を保つ力、保守の力であります。それで先に尙進んで往くと云ふ所謂進歩の力と云ふものは、主我的感情に訴へなければならぬ、個人的感情に訴へなければならぬのである。故に人が今迄に達し得た文明の保守と云ふことと斗り思つて居つて、それで自分と云ふものを忘れて仕舞ひますと、不健全な状態に陥る、下手をすると民心が腐つて仕舞ふ。凡そ生物に於きまして、今迄進んだ所迄進んで、扱て止つて居ると云ふとは出來ぬ。進んだ所迄進んで往つて、止つて居やうと思ふと、下へ下つて仕舞ふ。生物は始終進み進んで往かなければならぬ、『日に日に新にして、又日に新』に進んで往

くと云ふことでなければ到底健全なる状態を保つことが出來ぬ。前の縁がありますから、夫婦の例に就いて譬へて見ますと、夫を思ふて呉れる女子のあることは、極めて有難いことであります。朝から晩迄夫のことと斗り考へて居る女子であつたら、果してどうであるか。又妻を愛する男でなければ、男の價値はないが、併ながら朝から晩迄妻の側に居つて、妻が妻がと云ふので、管めたり擦つたりして、女のことと斗り屈託して居る男があつたら、どうであるか。ソレコン互にウルサクなつて嫌氣がさすであらう。此の如き男女は退化するより外はない。義太夫に能く謡つてあります、梅川忠兵衛などを聞いて見ると、實に愉快な心持が起る、男の心には女と云ふ意識が一杯になり、女の心には男と云ふ意識が一杯になつて、二つの心が一ツになつて、其外の考が少しもない、之が愛の頂上、夢中の愛と云ふものである。それであるから、盲目的に二人が一致する、あゝ云ふ風な状態で人間が續いて往つたら、人間は腐敗せざるを得ぬ。すなはち夫婦情死近松の作にある夫

婦で情死をすると云ふ所に至つて仕舞ふ。男女は一つだけれども實際又た二ツだと云ふことも知らなければならぬ。故に東洋では古來『夫婦別あり』と云ふことを説いた。夫婦別ありと云ふのは、日に日に新にして、社會の狀態を進歩させやうと云ふ聖賢の健全な考があつたからであらうと思ひます。夫婦は一つの理想、一の全體の爲めに各自固有の仕事をもつた二人であるとして云ふことを、頭に置いて居れば宜い。それで夫婦の中に健全の進歩が出来る譯である。

箇々人々が夫婦に對すると同じ強さの感情を、社會國家に對して有たぬことは事實である。其れ故、家族と社會國家と云ふ二種の團體は、聊か趣を異にする。一つは天然自然の愛情、一つは多年訓練の結果に待たなければならぬ。もし個人に全體を思ひ、全體を愛する心が乏しければ、正義心が乏しければ、少くとも權力を以て、正義的行爲を勵行させなければならぬ。有機的社會の秩序を保つ徳義は、即ち正義である。夫婦の間の愛情の如きも

正義忠愛と
獨立自尊の
對立

のが、それを結付ける力にならぬで、今度は冷然と構へて敢て爲させる力が要る。正義心と云ふものは、箇々人を結付ける原力である、正義と云ふものは、どうしても、否でも應でも、箇々の人に實行させなければならぬのである。夫婦の間には、自然の愛情と云ふものが生物界に授かつてあるから、心得としては夫婦別ありと思へば宜いが、其れ程濃くない強くない場合に、よつては忘れもする社會國家に對する愛情を補ふには、國家は正義と云ふものを何處迄も個人に實行させる制裁力を持たなければならぬ。が制裁を以て正義を實行させた以上には、其の餘は成るべく、箇々の人の自由に任すが可い、それで何れ程多く、箇々の人の頭の中に、獨立自尊と云ふ心を持つても差支ないのみか必要である。獨立自尊心は、正義の無い所には、生ぜぬ、正義から生じて、正義と同じ目的を助ける、即ち間接に社會國家の進歩發展を來す。ゾモランの言ふ通り、己を尊むが爲、我がと云ふ心があるが爲でなくば、想像力が十分働いて來ない、想像力が働いて來ないと、工風力が働

いて來ない。工風力がなければ發明が出來ない、勇猛心が發達して來ない。全體が權威を以て何處迄も側から干渉して往きますと、偽善、無氣力病的の心構へ、或は「センチメンタリズム」即ち多情多恨主義が蔓つて來ます。日本にも、大分さう云ふ傾向が見えて來たと思ひます。眞正の正義心と云ふものは、自由と云ふこと、少しも相容れぬことはありませぬ。一面からいふと、己を何處迄も尊むこと、他の一面から云ふと、規則には少しも背かぬこと、此二ツと云ふものは、本と同一根本から出て、同一目的に役立つものである。自尊心と伴はない忠愛心と云ふものは、不健全なものであつて、眞に國家の進歩を助けられないものであるやうに考へられます。

英吉利の人民は、極めて保守的で、極めて正義を重んずると同時に、彼等は非常に進歩的で、自由で、自尊的である。亞米利加のエマーソンが、英吉利に往つた旅行記があるが、此れは英吉利人の特性を色々書いて、眞面目に着實に高尚な立脚地から論究したもので有る。其中に澤山面白い例がありま

忠實の重大

す。獨逸の公法學者のエアリングと云ふ人が書いた、『權利の爲の競争』と云ふ本がある、其中に、英吉利人は、正義の爲であると、己の權利を主張する爲ならば、例へば十錢の損害を不正當に我に加へられた爲に、でも五十圓でも百圓でも投じて、三日も五日も暇を費して己の權利を主張すると云ふ意味の事がある。是は英吉利人の、自分一人の懷勘定から云へば損なとであるけれども、其十錢は惜しくはないが、不正不義と云ふものは、我に對して偶々加へられたものであるけれども、其不正不義は、英吉利全體の爲に、或は人類全體の爲に、敵として制裁を加ふべきであると云ふ考からのことである。是即ち全體に對する義務の觀念が強いと云ふ所から生じて來るのでありませう。そこで苟も正義と云ふことを害せぬ限りは、己を尊む、我は我の特長を以て世に立つのである、我は官吏の前に往つても、或は又學者の前に往つても、或は代書人の前に往つても同じことである。我が天職を盡す上に於て、決して人に譲らぬと云ふ、即ち己の天職に自からの信用を置いて、己を

尊んで居ると云ふのである。即ち紳士である。或人が話をしましたが英國では大道で靴磨きをやつて居る連中迄、シルクハットを被つて威儀堂々鐵道の札切りでも札を切りながら、我は紳士なりと云ふ積りて札を切つて居ると云ふ。所謂紳士と云ふことは彼等の通語で、我は境遇に依つて靴を磨くので、札を切つて居るのも我は紳士なりとして札を切つて居る、斯う云ふ考であるから、自然と自分を豪い者と考へて居る。之があるから、札の切り方が上手になつて来る、靴の磨き方が上手になつて来る、其道に、非常に進歩がある。而して進歩には十分な利得があるは勿論である。然るに日本のやうに、人が何と云ふだらうか、斯う云ふたら後に批評を受けはすまいか、新聞で書かれはすまいか、雜誌で悪く云はれはすまいかと云ふことまで屈託して、上は高い人から下は靴磨き、札切り迄、人の噂に屈託して居る、之は日本人の通弊であると思ふ。所が英吉利人の如き、此は我の天職なりと云ふとなら、落着いてする。併ながら正義に従つて、義務として税も納め、兵役に

も就く、種々義務を盡して、我は我の天職に従つて、我が仕事をする、百姓は百姓の仕事をする、豚を畜ふものは豚を畜ふのが我天職である、と云ふ積りて、石炭の火焚きは石炭の火焚きが天職と思つて一生懸命にする。ジョージ・ステベンソンが火焚きから蒸汽車を發明したのは、是から來たので、蒸氣々罐に火を焚いて居るのは、紳士として焚いて居る間に、段々蒸氣々罐と親みを加へて、切つても切れぬ關係になつた所からして、斯ういふ工合にすれば、非常な便利が得られるといふ工夫が付いたのである。それで今日は世界中に行渡つて居る鐵道の起りは、此自尊心の結果であると思ふ。エジソンはどうです、電氣の發明に於ては、世界第一と思ひます。エジソンは、始め素寒貧書生で、電氣を研究して夢中になつて居る時分には、朋友が馬鹿だ狂人だと云つた。貧乏で狂人、餘り好い名ではない。國では食へないから、南亞米利加に逃げやうとさへ思つたとがある。此う彼が他處へ稼ぎに行かうと云ふことさへ考へて居つたけれども、心に常に電氣と云ふとを忘れず、到

頭仕舞にあゝ云ふことを發明し出して來た。名のある人は大抵皆十年や十五年は苦勞し盡したものだ。それはどうして出來たか、人に何と云はれても動かかなかつたのは何かと云ふと、我の天職は茲にありと云ふ考から生じて來たこととなければならぬと思ひます。此考へ——我が個人として、即ち全體の一員として我が盡すべきとは電氣にある、蒸氣々鏝にある、百姓で云へば豚である、芋である、大根であると云ふ心持を以てしますと、其内に進歩が萌して來る。ステベンソンは七十何歳になつて隱居して百姓をやつた時分には、英吉利第一等の葡萄や野菜を拵へた。いざ百姓をしようと云ふ時には、又た一生懸命に百姓のとをする。英傑の面目は最も此の忠實に露はれる。元來人は何をして宜い、我は我が天職として、此の事をやるのだと云ふ、矢張一の獨立自尊の心であると思ふ。アルフレッド大王の時、スキャンジナビアのトリアと云ふ人種が、難船して英吉利に始めて上陸して其住民とならうとした時分に、英吉利人は彼等に斯う云つたさうです。汝等

は、此國に來て、此國の人民にならうと云ふのは宜いけれども、此國の人は何か一つ技術が出來なければ叶はぬ、而も其一ツの技術丈に於ては、天下中の何人よりも立越えて居らなければならぬと。彼等は何かて特長を有つた自尊心を有ち得ぬと國民としない、それを發揮して全體に貢獻することの出來る個人性を有たぬものは仲間としない。此やうに國初から、個人性の發揮を重んじたことが、今日英國國民大發展の原因ではないか。

兎も角も所謂正義と云ふものに依つて、全體に結び付いた以上には、其後は己れの出來ること、即ち己れの特長、己れの個人性を飽迄發達させると云ふ、自分の天職を爲す點に於て、誰にも遜色ないと云ふ、其自尊心を養ふことが極めて大切である。今日本の全體として考へて見れば、餘りに言葉の上で以て、自尊、獨立、自由、進歩と云ふことを恐れ過ぎて居る工合がないかと私は考へるのであります、我儘放埒主義には無論賛成は出來ないことであるけれども、其正義と伴つて居る獨立自尊と云ふものは、益々發達させなけ

ればならぬと私は考へる。外ではない、此の意味の自尊は眞の正大であるからである。

(一) 主義論の約説

各主義の不完全なりとは或意義の不足を意味す——善き主義に従はざる可らずとの意味——至善の境涯即ち極樂、桃源の長短——其れ等と吾人の至善との關係——完全主義の別名(公善、治善及び自我實現)

以上の處で處世上の大方針に付て色々の種類が有る事を述べて各々其の缺點を數へたが、其れ等の主義は皆悪い所斗もといふ譯ではない、勿論幾分か宛可い所もある。併し悪いといふは此の人生の一面斗り見て居て、他の方面を見残して居るといふ所にある。柳は綠に花は紅といふやうに見れば其れで可いのであるが、柳は黄ろく花は紫といふやうに見て得々として居るから、尤で間違ひでなくとも先づ正しくはないと云はなければならぬ譯である。そこで其善い完全な主義に従はなければならぬと云ふこ

諸主義の關係

とは、何も倫理學者が自己の權柄で此うせよと無理に押し付けるのではない。もしソナ事なら誰も其れに屈服する弱い尻もない筈である。然るに吾々が此ういふ方針で世渡りを爲さねばならぬといふは、それは個人から見ても社會から見ても、従はなければ或は内面から、或は外面から、或は直接或は間接必ず其の制裁を受けると云ふ事である。大凡そ此世の中に生活して居るには必ず一定の資格が要る。さうして進化論で言ふ様に、優勝劣敗の原則で、或者は必ず負けて、或者は必ず勝つといふ事がある。悪い處世上の方針に従て行つた時分には、詰り劣敗して仕舞ふと云ふ事になるから可くないのである。例へば快樂主義のやうなもの、或は克己主義のやうなもの、それは好い處もあるには違ひないが、トの詰りそれは劣敗の運命に向はざるを得ないと云ふ爲に、それが非難される譯である。モ少し詳しく言ふて見れば、色々の主義で教へる處のトの詰り、吾々の落着く可き處の境涯、即ち至善といふものが銘々相異なる。例へば快樂主義から言へ

諸種の至善
説の調和

ば『快樂』が至善であり、克己主義からは無欲の『桃源』が至善である、或は宗教家から見れば『天上』が至善であると言ふ事も出来やう。各々一應尤もな處がある。例へば極樂なんといふ處は誰も悪いとは思つては居ない、必ず善いものに違ひないと思つて居る處であるが、さて之を目掛けて行つて果してさう云ふ結果を得ることが出来るかと云ふに、さうは行かぬ、即ち快樂そのものを得る爲には必ず苦痛といふものが一方になければならないので、苦痛なしに快樂のみ有るやうな境涯は到底人間として考へる事は出来ない。何時の世の中になつた處で快樂ばかりが充満して苦痛が少しも無いなどといふ事は此人間の組立それ自らの上から言ふて到底有り得べからざる事である。故に之を目掛けて進んで行つた處が到底失望に了らざるを得ない。其れを若し此處に見當を附けて成るべく苦痛は厭である、早く極樂に行きたいといふ迷を持つて居ると、骨惜しみの、アブナガリの、其れで慾深の腰拔ばかり出来て迎も物の役に立たず、其れで本人自らも豫期した結果

を得るとが出来ないやうな破目に陥つて仕舞ふ。之れに反して苦痛といふものは一寸厭なものであるけれど、併し人生を組立てる必要な要素で、例へば若い者であるとか、或は新進勃興の國民であるとかいふ者は、寧ろ危険艱難といふものを凌いで、それでも尙ほ進んで行くが面白いと云ふ元氣が有る。此の元氣者から見れば苦痛も元氣の一刺激劑たるに過ぎない、而して其元氣を働かすと云ふことが人間としての面目もあるし、樂みもあると認められる次第である。夫故この快樂主義の至善といふ者は、人間の元氣に苦痛の刺激が入要である、人生はハンキな所斗でないことを忘れて考へたものである。其れなら快樂といふ者は全く要らぬ者であるか、悉く我々は快樂と云ふ様な要素を棄て、仕舞つて、其處に人生の眞面目があるかと言ふのに、それ迄行くと又迷である。さう云ふ事は我々に出来る譯でも無し、又望んで進んで行つた處がそれは實現し得べからざるものである。例へば老子などが讚美して居る所の境涯、即ち日本各地の家の掛物であると

か額などに書にかいてある様な、彼の山又山の奥山に桃などが咲いて竹などが生へて、さうして狗兒いぬこの一二匹そこに居て、何だか野蠻人見たやうな人が呑氣に一人二人位居るやうな、さう云ふ處はマア實に風流な様に思へるけれ共、左ればと云つて其人間が少しも快樂を求めない、情欲が無いものだといふ様に思ふと、それは詐りである。如何に仙人の様な人であつても、少くとも此景色は好いとか楽しいとか、或は又イヤ呑氣で宜いとか、嬉しいとか云ふ事は考へなければならぬのであつて、即ち快樂苦痛に對して無感覺のものでは無いから、此點に於て人間は快樂を全く棄て、仕舞ふといふ事が出来ぬ。如何に私は無欲主義で快樂利欲なんといふことは欲しくもなく、又た求めもしないなんと威張つた所が、實際は偽である。若し馬鹿正直に無欲にならうなどといふ非望を抱くが、最後、人生をメチャクに壊して行くやうな事になつて仕舞ふ。即ち快樂主義の要素といふものは、我々の至善の内に在るものであるとして、考へなければならぬならぬ。

いが併し、克己主義、無欲主義、或は直覺主義の理想にも可い所がある。其れは外でもない、快樂の利欲のといふ薄ッペラな弱い考を斷ち切るといふ勇氣である、人生の苦痛を恐れずに寧ろ之に突進し突破しやうといふ健氣な氣象にある。此の所は大に買つて遣らねばならぬ所である。唯だ此の勇氣を人生其物を弱らし疲らしめる方に用ゐて有用の目的の方に用ゐぬ所に不足がある。今我々の立場から云つて見ると、正しい活動といふものを樂んで進んで行くといふのであるから、其活動といふものに依つて快樂を感ずる限り、其内には快樂主義的の意味がある。又活動をなして行くのに快樂のみを目的として行くのでは無い、社會國家の爲めとなる事業を目的として行くのであるから、快樂利益といふことを第一目的とせず、場合によつては苦痛でも構はず事業其物を目的として遣り抜くとする。茲に於て快樂主義に反對して、さうして直覺主義の理性といふものを立て、行く點に一致するのである。我々の立場から云ふ時分には、事業を樂んでなす

人間が大勢世の中に出て来て、各々の人が道理に叶つた正しい仕事を受持つて、さうしてそれらが皆調和して働いて、それで社會全體の上に著しく優れた處の活動が出来る様に、全體として國力が増進する様にといふことを至善とする。活潑々地の人間の有機的の統一状態、それが我々の至善で詰り斯う云ふ風な理想に依つて進んで行かないといふと、此セチ辛い世界の競争場裏に生存して行くことは出来ないのである。モ一つ言換へて見れば、上下一心になつて此歴史的大和民族の發展をなさなければならぬ、其大和民族の發展を圖るに付ては骨の折れる事もあらう、苦痛に感ずる事もあらう、さうして又規則或は原則といふものに從つて制限をされなければならぬこともあらう、併ながら我々はさう云ふ目的を立て、是非其れを遣り抜かねばならぬ、遣り抜くとが愉快と感じられなければならぬ、道徳上の眞理、人生の眞相は畢竟さう云ふ事を要求して居る譯である。エーヴェリ「卿は其、人生の快樂中に此う言つて居る、吾人は自己自身にも他人にも、義

大我主義
公善主義

務なるものを苛酷な監督者のやうに描寫してはならぬ。其は寧ろ此の世の面倒や心配から常に我れ等を守護し又た平和の道に案内せんと待構へ居る所の親切にして同情ある母である」と。義務本分を果すことを樂しむといふのが吾人の主張である。故に此主義から言つて見れば二つの要素がある、即ち一つは快樂を棄てた譯でないといふ事と、一つは目的の爲めには目前の快樂利益を顧みないで、目的遂行の爲め是非なければならぬ法則に從つて活動するといふ事で、完全主義は前に非難した二つの主義を調和してあると言つても宜しい譯である。

學語で云へば、完全主義は社會の快樂幸福を目的とするのでなく、社會の善を、即ち公善又或は治善を目的とするといふ。併し其の所謂公善を謀るとは、同時に自尊自重と表裏するもので、言はば自己の私を成すのである、唯だ其の私は小さな私でなくて、何處迄も社會的秩序法則と合一する所の大我である、社會的の自我である。それ故此の點から自我の實現、即ち自我の

完成完全を目的とするとも云ふのである。

第五章 應用論汎論(法律論)

主義を心と事とに應用したるは規則或は命令——義務——義務を實行する習慣は即ち徳——義務と徳との關係——義務に大小輕重種々あり——義務は時中すべきもの、唯、大體の一致はあり——義務は衝突するか(忠孝兩全)

主義、規則、命令

此れ迄論じた所は主もに理論的の事であつて、道德主義の抽象的研究であつた。此れから之を應用して日常道德の一斑を論じて見る積であるが併し之れに就て少し應用上の理窟を豫め言ふて置く必要がある。抽象的事柄といふものは其儘に直ぐに實行が出来る様になつて居らぬ、實行が出来る様にする爲には其主義といふものを當時の事情に鑑み、或は其の人間の心の有様に鑑みて、取捨斟酌をしなければならぬ。即ち主義を實際の場合場合に應用しなければならぬ、段々抽象から具體の方へ進んで行く手順を取らねばならぬ。例へば完全なることを期せよと言ふた處で、それは實に漠然たる事である。今私が完全となるには何う云ふ事にしたら宜

からうか。其れは今の時勢を知り又今私と云ふもの、性質及經歷を調べなければならぬ話である。元來意氣地なしてあつた者が完全になる道と活潑過ぎる人が完全になる道は最後の目的は同じでも道筋は違はねばならぬ。一人の人に向つてはモウ少し静かにする様にせよ、他の一人に向つてはモウ少し元氣ある様にしないではいかぬ斯う云う風な注意が出来て來べき譯である。ソコデ抽象から段々具體に行くまでの段階を分けて論じて見ると、主義は一番漠然とした一番抽象的な概念であるが、それを少し實際の場合に應用して、稍々一般的の指導を與へて見ると、それは規則になる。例へば勤儉とか忠實とか或は正義とか色々な規則が有るやうなものであるが、それらの規則といふものは元と一貫して居る主義があるに違ひない。其主義といふものは人々に依つて一樣に解釋はされないけれ共我々から見ると、完全主義は詰り自疆不息といふ様な活動主義である、それが應用されて色々な規則となるけれ共、右等の規則は直ぐに學校の生徒や何

かに應用する譯にいかぬから、教師や父母が生徒や子供に言ふ時にはモツとそれを具體的にして、例へば正直といふことは今御前のやうに嘘を言はぬ事であるとか、或は忠實といふことは今御前の様な脇見をしないことである、脇見するな、嘘を言ふなといふやうに具體的指導になると命令といふものになる。軍隊に示してある色々な一般的の差圖は、それは規則であるが、演習に臨んで特別の時に特別の指圖をすること、即ち『討て』といふやうなことは命令である。規則でも命令でも何處から來るかといふと、モツと大きな大體の方針から割出されて來るものである、大體方針の實地に對する應用の程度が此れ等の區別を生ずる譯である。

世間でよく義務といふことを言ふが、一體義務とは右等のこと、何う關係するであらうか。義務とは社會全體の方針から割出されて人々がしなければならぬ事柄を總て云ふのである。凡ての人が働かなければ、假令寢食の出來る身分の人でも、遊んで居れば日本全體の仕事が捗らぬ優勝劣

敗の競争に負ける、ソコデ人々は働くべき義務を負ふ、働かなければ義務を
 欠くことになる。其れ故義務とは日本全體の富強文明を進めるに就て、銘
 々が當然分擔しなければならぬ仕事をいふので之を道から命令されたこ
 とと云つても可い。道から命令されたとは中々一言で言ひ盡すことは出
 來ぬ、極めて複雑である、或は漠然なの、或は判然したのなど種々あつて、詰り
 は主義も義務規則も義務命令も義務と云へる。主義を義務とする場合に
 は義務の數が唯だ一つ外ない、規則を義務と見れば義務の數は必ず數個
 ある、命令と見れば殆んど無數である。而して其義務を實行する所の習慣
 が心に附いて來るとそれが即ち徳といふものである。例へば臨見しては
 いかぬ、或は情けてはいかぬといふ様な事であつても其規則を子供が能く
 實行して、さうして一定の習慣が精神に出來て來ると、それは徳があると云
 ふのである。故に徳と云ふものは義務を實行する習慣力と言つて宜しい
 ものである。今徳と義務の關係を考へて見ると、別に違つたものでは無い。

一つの主義規則命令が未だ實行されないで其人に對する要求として考へ
 られて居る限りは、それが義務であつて、其の人が實行が出來たとして考へ
 て見れば、それは徳といふものになるのである。夫故に徳の説明義務の説
 明といふものは別々に話す必要は無い、内容は大抵定まつて居るものであ
 る。夫故に此徳の事は暫く措いて、義務の事に付て大要を論ずれば、それは
 大抵徳に當嵌まるといふ事が云はれる。

義務の分類

そこで義務には色々種類があつて、個人に對する義務とか、或は社會に對
 する義務とか、國家に對する義務とかいふ様に論ずる場合もあるし、又大な
 る義務、小なる義務といふ場合もあるし、或は大人の持つて居る義務、或は子
 供の義務といふ様な風に種々論ぜられるが、さう云ふ風に分類をするのは
 畢竟使ふ人の目的如何に依ることである。夫故に別に斯うしなれば義務
 の分類が出來ないといふ譯のものでは無い。其當時の用向如何に従つ
 て種々に分類して宜しいものである。併ながら唯義務には極く必要な義

務といふものもあるし、或は小さい義務と云ふものもあるし、必ずしも同一の價值ばかりが有るものではない。人々に依つて分類の仕方は勝手に可いものであるが、唯々斯う云ふ注意は入用である。校訓などを作る時分に成るべく義務の言現はし方を數を少くして、さうして肝腎の事を擧げやうと思へば内容が自然漠然となる。それから數を多くして比較的に重大で無い義務を擧げるとクダクダしくなるけれど、併し實際に兒童には適切である、斯う云ふ事になり得るので、必ずしも三つにしなければならぬとか四つにしなければならぬとか云ふ事は無い、唯々其注意を以て兒童の年齢とか或は所の事情とかを考へて適當に分けてしたならば、それで宜からうと思ふ。

義務の常變

昔からして仁義禮智信といふ様な徳目が立つて居る、アレは即ち義務である、と云うて宜いのであるが、朱子學などの方から言つて見ると、此五つの義務は絶對的に遵奉しなければならぬものである。必らず背いてはな

らぬと云ふ譯であるが、併ながら本來義務はさう云ふ風に豫め型で以て定めて動かないものであると云ふ譯のものでは無い、其時々に依つて各々幾分かづゝの違ひが無ければならぬ。如何に聖賢だとして千年前に千年後の今日今日の某の人の所作を豫め定めて置くことは出来ない筈である。其れを儒者の中にはチャンと定まつて居るかのやうに説き立て、居る者もあるが、實際左様甘くは行かない。ソコで彼等は規則を動かさずに規則の解釋を仕直してヤットお茶を濁して居る。昔から仁義禮智信といふ事の解釋が違つて來たのは其の爲である。一體人間のしなければならぬ事柄といふものは、其時其人其場合に依つて始終變つて行つて、差支ない、先づその點は陽明などの教の方が適切である、それなら陽明の様な工合に人の義務といふものは始終變るものだから、幾ら變へて行つても差支ないかと言ひますと、又さう云ふ事は無い、時世によつて異なることは異なるが、併し其間に矢張大體の一致といふものは無論無ければならぬ。例へば人を殺

すといふ様な事であつても、それは戦争などでは無論敵を殺すことは大變宜い事であるけれど、平常の場合では殺すといふことは宜くない事である。否大に悪い事である。此處の大に宜いと云ふ處から、大に悪いといふ處まで、此間に大變な程度があつて、モウ同一の殺人といふことの善悪が九ツ切り顛倒するやうな場合がある。それは畢竟「時中」といふことであつて、殺す可らずと云ふ絶對の規則も、盗む可らずといふ絶對の規則も出来る譯のものでは無い。併し此世の中が大體今の儘にして在らん限り變らぬといふ處もある、即ち大體の一致といふことは有り得るものである、その所を陽明などでは見ないで、大體の一致までも無い様に考へるのは陽明學者の誤りである。

忠孝は兩全す

又世の中に義務と義務の衝突があると言ふ者もあるが、それは實際言ふて見れば衝突は無いのである。大よそ我々に出来ないことは義務とはならず、如何にノンキにして居られぬ世の中でも「泰山を抱いて北海を超えよ」

などいふ義務のあらう筈はない。手が二本、足が二本で出来るやうな仕事の外は受持ち得られるものではない、即ち義務とはならない。よく例に出て来るのは重盛の場合で、忠孝は兩全しないといふのである。「忠せんと欲すれば孝ならず、孝せんと欲すれば忠ならず、重盛進退、茲に谷まる」と斯う云ふので、此の二つは何うしても一致する事は出来ない、さう云ふ場合に何うしたら宜からうかといふ問が、折節人に依つて提出される事であるが、一體親の側に居て御機嫌を取るといふ其一つの型丈けを孝行と云つて居る場合には、君に忠をする場合に孝行が出来ない譯だけれ共、本當の孝行の意味から言ふて見れば、克く親に事へるといふ意味の中には、忠も這入つて居る。一旦緩急ある時には己の身命を擲つて君に事へる、親の側に居る事が出来ないのみならず、此一身さへも擲つて仕舞ふといふ意味がある。けれ共さう云ふ場合に親も當さに喜ぶべき譯で、孝行といふことは忠義の中に一致して仕舞ふ、忠即ち孝といふ事になる。忠義も矢張り孝行であるといふ事

が能く分らぬと重盛のやうな煩悶が生じて来る。又別の方から云つて、忠義でも其通り、一旦緩急ある時は歟を持つて居た者までが召集されて戰場に立たねばならぬといふ事となる、それは忠義であるが戦争をするといふ事ばかりが忠義では無い。天下に事なき場合に於ては孝の中に忠が這入つて居るとも言へる。忠勇の兵士が戦争を止めて一旦家へ歸つた以上、忠實な百姓となることは、是は親に孝行であると同時に又た大に君國に忠義となる譯である。詰り行爲の一定の型が眞の義務でなく、眞の義務は其時其時に自分が爲なければならぬことの外にはない、一時に兩立しない二つの事が命令されることはないと思へば重盛のやうな煩悶は起らないのである。

第六章 應用各論(一)

(イ) 事業に関する義務

義務に大體四つあり。(一)事業、(二)交際、(三)社會國家(團體)に對して、(四)修養——事業に興味を有すべし——興味には克己を要す——事業は手段に非らず——副業にも忠實なるべし——エマアソンの言——ヘルシヤ王とソロン——事業に正否あれど大小なし。

此れから色々の義務を四つに分けてお話する積であるが、第一に、事業を、するには何う云ふ心持を以てすればよいかと云ふことを説く。

事業に當るには楽しく愉快にやれと云ふ外はない。下女などに夜間郵便を出して來いと言付けると、ハイと言つて立つは立つけれど、影へゆく『チョツ、今頃になつて此んな用をいひつけて』と僅か半丁許りも歩けばすむのにブツ／＼言ふたりして主人を恨む者がある。こんな下女は既に碌てなしたる素質を現はしてゐる。何でも仕事をするには興味を有てやれ

執業上の心構

ば成功をするので、顔を髻めてやつてゐてはいかん。佛さまや神さまは決して顔を髻めはなさらぬ。もし何んな用を命じても、厭やな顔をせぬ下女がゐたならば、その下女こそは即ち佛様であり神様であるのだ。母親が我子を育てるにウンコをしたり、シッコをしたりしても、少しも厭やな顔をせず、始末をする。此れは全く神佛の心を失はざるが爲めて、即身成佛である。小學校の先生が十五圓や二十圓ばかりの俸給を貰つて多くの兒童の世話を焼かなければならぬ、ヤレ校長が教案を作れの講習會へ出席しろのと、面倒臭い事を云ふのをイヤだ〜と、たゞモウ糊口のために働くやうでは大した事はとても出来ない。青涕たらしの餓鬼だ！と云ふのは教師が悪いので、何んな小供でも東郷大將や大山元帥を扱ふやうにする、しなくては氣が濟まぬ、するのが面白いといふ先生が理想的なのである。

さうかと云つて吾々は少しも意志力を用ひずして興味が起るか、と云ふと、決してそんな事はない。生れて直に神ならず佛ならぬ吾々は修養しな

ければならぬ、力めて自分の厭やだと思ふ心を抑へつけてゆくやうにすれば、やがてそれが習慣となり、ツマリ性となる。興味を起すにも克己が必要なのだ、夫婦の間にも親子の間にも随分これがあるので、それは時によればア、厭やだと思ふ事があるのを、ジツとこらへて盛返してゆくの、家庭の平和幸福が保つてゆけるのだ。學生にしても克己のない人と云ふものはいつまでたつても風來山人ぢや。此の學校へ入つてみやうと思つて入學すると、三月か半年たつとモウ厭やになる。又他の學校へ入ると、こゝも二月か三月で倦厭が來て他へ轉學すると云ふやうに、尻の置處がさまらぬから、何年たつても一人前の修業は出來ぬ。己れの事業の中には、スツカリ自分を打ち込んで仕舞はなければならぬ、満身の精力を傾注しなければならぬ、自我即ち事業といふ心持でなければならぬ。今は昔とは勉強の意味が異つて來た。昔の勉強は立身出世の梯子であつたものだが、今日ではさうではならぬ。勉強すると云ふ、それ事體がモウ立派な目的なのだ。一家の

經濟を司り、學校を司ると云ふ事は一つには衣食を得る爲めでもあるが、唯だ單に金を儲けるための手段ではない、人間の一分を立てる爲めに外ならぬ。凡そ何業でも左様で、銘々が妻子に對し隣人に對し國家人類に對して思つたよりも多くの恩誼を蒙つて居るから、其の御恩報じをしなければならぬ、それに御恩報じ丈けては足らぬ、其上に我々の先祖から譲り受けた此の文明を其の儘にして置た丈では子孫と生れた甲斐がない、人間一正と言はれる上は是非其れ相應の一分を立てねばならぬ。職業は其の爲にするのである。其れ故金を溜めた人が必らず人らしい人であるのではない、人らしい仕事を遣つてのけた人が賞められべきである。

私はこゝに新渡戸博士の『歸雁の蘆』と云ふ書物の中にある實話の一つをお話しやう。博士が米國の或る田舎の圖書館に行かれた時に、たま／＼職工の女房らしい姿も服装も見すばらしい婦人が本を借りに來た。處が、受付に居た女子の事務員が、ニコ／＼笑顔をして、『モシ貴女は何んな本を御覽

米國婦人の
執業振

になりますか』と尋ねた。日本の事務員などだつたら、こんな場合にいやにツンとすまし込んで、ソ知らぬ顔をしてゐるのが多い。『本が見たいのです』と云ふと、初めて此方に向いて四角四面の面構へをして、横柄な態度で、『ここに規則書があるから、それを見て一定の書式で圖書閱覽願を出しなさい』と云つたぎりで、シガリの煙でも輪に吹いてゐる處だ。處が此のアメリカの女子事務員は感心なもので、件の女房が、『ハイ私は亭主に食べさせます手料理の方法を調べてみたいのでございますが』と云ふと、『ア、左様ですか』と親切な態度で、『それならば此の本と彼の本を御覽になると、よくお解りになりますませう』と、丁度職工の家庭に相應する手輕な料理の本を教へてやつたといふ。すると今度は十歳ばかりの坊ちゃん、と七歳ばかりの嬢ちゃんがやつて來た。處が女事務員はいつも變らぬ愛嬌をた／＼ながら、『坊ちゃんは何の本ですか』嬢ちゃんは何がよいのですか』と尋ねて、坊ちゃんにはベースボールの本を、又嬢ちゃんには動物畫の本を出して見せてやつたといふ。

つまり是も自分の職業に興味をもつてゐるから、自然其の仕事に親切が溢れ出るのである。それから見ると日本の事務員には未だ横柄きはまるものも少くない、殊に役人なんかになると、役場や警察や郵便局なんかに出ると、つまりぬ連中が無暗に頭を高うして、人民に對して權柄を張つて、煩べたの一つも叩きつけてやりたいと思ふやうなものもある、嘆かほしいことである。佛教徒ならば佛になるために、耶蘇教徒ならば耶蘇になるために、日本國民ならば大和魂を突通すために、各それ／＼の道につくせばいいので、何も頭ばかり高くして威張るばかりが能てはないんだ。警察官などが試に優しく人民に親切に應接すると、却てそれがために威光がつくので、又軍隊の人々でも己は國家の干城ぢやと云うて威張顔ばかりされると面白くないもので、民家で火を失した時などに走せつけて、人民と力を協せて鎮火に盡力されると、却てその尊嚴を加へるものだ、此んな善い例も見えて來た。ツマリ其れも此れも自己の事業に興味を有ち忠實であるからのことであ

る。勉強の意味は昔と大層違つて居る。アメリカのコンコードの聖人と言はれたエマーソンが「報酬の有無にかかはらず常に業務を勉強すべし、有形無形の報は自ら其中に存するものなり。田を耕すと詩を作ると、苟も事業たる以上は、其の體裁如何の如きは問ふに足らず、おのが心に満足し得ば十分なり。また幾たび失敗するも憂ふるに及ばず、何となれば、一事を勉強したる報は、勉強したること即ち其の報なればなり」と教へたのは此所のことである。

又自分の一分を立てるは文學にありと考へ込んだ青年が、資産がないため上京したいけれ共それは出來ぬ。伯父に頼んでも近所の人に頼んでも金を貸して呉れぬ。已むなく一時村の教員か何かをして、資金を貯てから順次に文豪と云ふ目的へ進んでゆくのはいい。此は本業の外の副業である、副業も時によつては已むを得ない。孔子様も左様のことがあつた。困る時には一時何をやつてもいい。併しながら是れだからと云つても決し

てイ、加減にやつて可いことはない。興味をもつて本領を届けぬやうにして過去の賤業は決して將來の履歴にキツのつかぬやうにやらなければならぬ。孔子が嘗て『委吏となる料量平かなり、司職の吏となる畜蕃息す』とある通り、職人の時には職人として忠實に、日傭としては日傭として忠實にやれば善い。何でもデモ的でやつてはいかんである。彼の世界の大學者、即ち哲學者、經濟學者、倫理學者として有名なミルが、東印度會社の書記であつた時は、大學者としての評判の外に、大事務家としての評判をも取つた。彼が將に其の社を辭さうとした時に社員が送別會を開いたが幹事の一人が挨拶して言ふには、我々が此所にミル君に敬服し感謝するのは決して大學者たるミル君に對してではない、其れは今更言を待たぬことである。が吾々は當會社の一事務員であつたミル君に向つて敬服し感謝せざるを得ぬ、實に同君の入社して以來、事務の整理の付いたことは驚くべき程度に達したのである云々といふことであつた。ミルの副業に對する忠實の如何

ソロンとクレイザス王との問答

が想像されるではないか。副業に氣のり、のせぬ位の間人は、本業にも又た勉強せぬもので、畢竟勉強の品性がないことを證明するのである。勉強の意味を昔のから今のに變へることは、日本國民の精神を根本的に刷新する上に甚だ切要である。勉強の二十世紀的意味を例解する爲に、モ一ッ此所に斯波のクレイザス王とソロンとの話をしやう。ペルシヤはペルチスタン、アフガニスタンの西に位する國で、此二國を超えてお釋迦さまの生れた印度の國となる譯だ。昔は其の領域頗る廣大で南は埃及、西は希臘東は支那に接すると云ふ盛んな有様であつた。處でその頃歐羅巴の東方に希臘と云ふ小さい國があつて、武力も富力も到底斯波に比すべくもなかつたが、しかしその國にはソロンと云ふエライ賢人があつた。此の賢人は大政治家の一人なので、自國の憲政の基礎を立てた後、世界漫遊に出掛けた。其れて波斯に入ると、王がソロンに逢ひたいと言つて宮中へ招待した。て何日の何時頃に參内して呉れと云ふ事なので、ソロンが約を履んで王宮

に行く、先づ王は延見するに先立つて、侍臣をしてソロンを案内せしめて、武器庫やら黄金庫などをスツカリ見せて置いて、さて王が會うた。王の申すには、『兼て賢者の名を聞いて居たが、今日逢ふことの出来たのは甚だ喜ばしい、就て一つ尋ねたいのは、卿は世界中を漫遊して歩いたさうだが、誰れがこの世界で第一番の幸福者であるか語つて聞かせよ』と、暗にソロンが自分(王)の事を云ふだらうと待ち構へてゐると、ソロンは空惚けた顔をして、『されば、世界第一の幸福者は私の故郷アテンの町外れの何村何兵衛でムらう』と答へた。スルト王は一寸意外に感じたが、『それでは其の次には誰れだと思ふ』と、今度こそは自分(王)の事を云ふに違ひないと思ひきや、ソロン再び答へて、『それはスバルタの少年で母親に孝行するために一命を捨てた人でござらう』と答へたので、王はモウ耐へ切れなくなつて、『オ、それなら朕の如き者は何であらう』と、やゝ聲を勵まして問ひ掛けると、ソロン少しも騒げる色なく冷然として、『いや王様。よつくも聞きなされ。天道さまや佛さまは至

極妬み深いものでございますから、餘り幸福が過ぎるとキット何か禍を降すものでございます、一年は三百六十五日、十年は三千六百日、假に王の御壽命を七十年と致しまして、何萬何千日と云ふ長い月日の間には、必ず禍が御身の上に降りかゝらぬといふ保證は出来ませぬ、それ故私は未だ王様を幸福な御方とは申上げ兼ねます』と答へたといふ。其の通り聖賢ソロンの豫言は的中して、後に北方の蠻民が蜂起して遂に王の軍を破り王の身を擒にして、了つたが、その最後の時、今や蠻民の一人が白刃を揮うて王の首を刎ねんとした斷末魔に際して、クレイザス王は初めてソロンの明言を想起して、三度口の裡で、ソロンよ、ソロンよ、ソロンよと云つた處が、斬者は王に、『何と云ふ咒文を唱へたのか』と問うたので、王はイヤ是は咒文ではない。實はかやうである、と一伍一什を物語つた爲めに、伴の蠻民も亦た天運の頼み難きを悟つて、王の死を赦して了つたと云ふ實に趣味津津たる活ける教訓があるのだ。これを見てもいくら巨萬の富、百千萬の兵があつたからと云つて己

れに自力がなければ、近世的意義の勉強の精神がなければ、決して頼りになるものではない。『明日ありと思ふ心の仇櫻』で、夜半の嵐は何日吹き荒さんて梢の錦を泥土に委せしむるかも圖り難いものであることが分る。之れに反し勉強の精神、忠實の精神、自強不息の精神が旺盛でありさへすれば、ソロンが言つた通り、何村の何兵衛又は十七八の少年で短命でも、天下第一幸福な人、人らしい人ともなれる筈である。吾人日本人の大に考へて見ねばならぬことである。

業體の善惡

事業は何でも可いと云つたが、職業は選ぶ必要がないとすれば大間違である。業にも正しいのと、正しからざるのと二つがある。醜業——女郎屋、高利貸などはこの類だ。白首などを置いて有望なる青年の生血を吸ひとらんとするなどは少しも天地社會の恩を報じ、人らしい人の一分を立てるとにならぬのであるから醜業である。それから今の青年は、よく大きい事業と云ふ事を口にするが、成程ナポレオンとか、大山元帥とか、東郷大將と

か云ふ人々の事業は立派であるから、其れを志すことを私は悪い事とは云はぬけれども、しかしそれは事業がエライのではない。その人が事業をエライとするのだ。派手な事業をすると云ふ事は、必ずしもエライとは云へぬ。自分の才徳と手腕とが實に郡長たるの資格があり、知事たるの資格がありさへすれば、人力車を曳いて走つてもいい。郡長が車夫になると云ふと、世間の人は指さしをして嘲り笑ふかも知れぬが、決してさうあるべきではない。いくら車を曳いてもその人は郡長たり得るの才徳さへあれば、何ぞ必ずしも慚づるに足らんやであるのだ。現に私が先年仙臺の方へ講習に出掛けて行つた時に、聞いた話したが、某郡の郡長さんでありました、何かの事から知事と意見が衝突して、そんな事なら罷めて了ふとスグに辭表を出した。併し剛直清廉の士で家に貯蓄がある譯ではない、寧ろ食ふに困る。ソコデその日から人力車夫になつた。サアたいへんな評判が立つたので、郡長さんの車夫が出来たのであるから、乗客の方から『何卒一つお

乗せ下さいませんか。』よし何處へゆく。』お代はいくら差上げましたら可うございますか』などい云ふ應接振りがあつて、目的の處までゆくと、乗客の方から鄭重に『どうも難有うござんした』と云うて別れると云ふ事を某る知事から聞いた事がある。こんな場合に世間の人が、『あの奴は郡長を罷められて車なんぞを曳くとは馬鹿な人間だ』と云つたならば、云ふ方が悪いのだ。つまりぬ車夫と人は一口に言ふが車夫がつまりぬのではない、引く人がつまりぬのが多いからのことだ。『我れも人なり』といふ見識で、自ら興味を有つてやつてゐる者は、人に馬鹿にされないのみか、自ら乗客が殖ゑて成功するに、反して、最初十錢と約束して置きながら、先方へいつてから、『旦那モウ五錢増して下さいナ』などと、酒手をせびるやうな盗人根性のある車夫は、やがて餓死をするか、強盗でもやつて監獄にぶち込まれて了ふに違ひないのである。業體に迷つてはならぬ、何人も其の業務を貴くするやう心掛ければならぬ。

事業に勤勉し又之れに忠實なることは非常に大切なことであるが、其の大體論は主義論の中、完全主義の條下に述べてあるから、本節と併せて讀んで頂きたい。

(ロ) 交際況論

人の入り込む社會の種類(愛、義、利)——交際の三大則(愛、敬、誠)——同一人の時々々に變ずる資格——日本人の交際法は更に一段の研究を要す。

社會の種類

人と人との交際の道はどうすればよいかと云ふと、其れには先づ自分の入り込む社會の種類を知るが肝要である。元來この社會を作つてゐる人と人との組合の種類が、たゞさん異つてゐる。愛を中心としてゐる仲間がある。例へば家庭とか朋友とか云ふものはこの種類に屬する。又た愛と云ふやうな懐かしいものではなくて、義理づくめで出來てゐるのがある。それは國家の兵力とか警察力とか權威を土臺として出來て居る社會で、これは情愛ばかりでは立ゆかぬ。即ち正義が根本となる。此外に又た相互

の利益を目的として仲間を作るとがある。此れは利を中心根本とする會社組合等の社會である。而して此等の三つは互に交際法の上に變化があることを知らなければならぬ。例へば家庭道德の中心は愛である。家庭にも勿論正直も必要であるが、併しながら親の悪事を密告するやうな子はいかん。論語にも『父は子のために隠し、子は父のために匿す、直きことその中に在り』と云つてある通り、世間の人は正直と云ふものは眞直なものだと思つてゐるが、必ずしも直線的のものではない。愛を中心とする社會は愛の爲めに幾分曲線的になることがある。又た正義中心の社會では正義の爲めに愛が幾分形を變へねばならぬ、即ち皇室國家の爲めには親子夫婦の情愛を打捨て砲煙彈雨の間へも駆けてゆかなければならぬ。極端の場合となると、『大義親を滅す』と云ふこともあるのは即ちこの所を道破したのだ。淨瑠璃の辨慶上使の段、寺子屋の段などを見ると、この點がよく記されてある。利益中心の社會では、合ふも離れるも利益との相談であるが、

扱て仲間の利益を保護する爲めに設けられた規約規則の手前に對しては、矢張正義關係となる。換言すれば愛即ち情實の爲めに規約規則を破るは不正となる。銀行員や會社員やなどは、よほど此點に注意を要するので、親や妻子や朋友の爲めだと云つて、銀行や會社の金員を使ひ込んだりなどをするのは情狀憫むべき場合でも勘辨のならぬことである。此所へ情實を入れさせやうとし、又た入れさせるのは畢竟道德上の智識の不明から來ることである。健全なる常識を有たぬ所置である。何と云ふても、今迄の日本の徳教は、孝りに情愛のみを重んじた傾がある、其の爲めでもあらう、又一つの國民性でもあらう、吾人は兎角利の社會のことでも感情で打ち壊す弊がある。眼前某々の人と仲間を組めば利益が得られるといふ場合でも、何もあの人間は蟲が好かぬとか、氣に食はぬとか云つて事業を共にせぬ。これはよくないとして、西洋人などは利益のためには平素自分とは氣の合はぬ人間とでも團結して事業を共にする。共にして而して苟も會社の事であ

れば影も日向もなく同心協力する。同心協力するから何處から何處迄も仲直りが出来たのかと思へば決して左様ではなく、會社の門外一步を出づれば又もや犬猿の間柄となつて仕舞ふのもある。公私の區劃がハッキリついてゐるには感心する。ツマリ智がある、伶俐であるからだ。

交際上の最大原則

大體から云ふと、人の結びつく關係は以上三つあるので、どんな人との交際でも必ず此の三つになつて了ふ。ソコで此の三つの社會に於ての交際の仕方であるが、其れには其れ相應の作法がある。概して云へば、凡て交際の大原則は愛と敬と誠との三つである。が、此れ等の三社會に於ては各此の三原則の重きを爲す點が違つて居る。家庭では愛が最も重く、國家皇室に對しては敬が最も重く、會社組合等に於ては可い加減の程度に於て愛も敬も共に行はれなければならぬ。而して誠といふ元則は愛にも敬にも何時でも何處でも、必らず突き通つて居なければならぬ。『子が親の爲めに隠す』といふ場合には、一寸考へると誠がないやうであるが、成程直言或は正直

といふことは無いやうなもの、良心上の誠は矢張ある。唯だ子の意識には親を愛する至誠の情が強いから、言はば自然に不正直になるので、不正直の行をしやうといふ太い量見は更にないのである。して見ると人の交際上第一に心得べきは、實地の場合に臨みて、今自分は三社會の何れの中に居て交際するのであるかをよく辨へることである。同一の人に對しても愛が中心となることもあり、敬が中心となることもある。然るに或人は交際する時に資格の變る事を知らぬ。國家内の一個人としては郡長も百姓もない。百姓の太郎兵衛どんはもし知り合の間なら遠慮なく郡長さんの家へ出掛けていつてのんきな世間話をするがよい。而して郡長さんも郡長としてではなく、只一私人の某と云ふ人となつて互に談話を交はすと云ふ美しい習慣をつけてもらひたい。散髪屋へ行つても、風呂屋へ行つても、郡長郡長で押し通されては甚だ困る。公け以外では肩書をヌキにして、温然親しむ可き紳士として交際して頂きたい。婦人でもさうだ。時と場合

によつて自分の資格が變ると云ふ事を考へなければならぬ。妻としては兎も角も、一家の主婦として、夫の代理として立たなければならぬ場合には、それ相應にチャンと男のやうにやらなければならぬ。アノ假名手本忠臣藏の芝居を見ても、大石の妻も石が夫の代理だと云つて刀を抜いて斬てかゝる所——それ山科の閑居へ加古川本藏とやら云ふ武士が鶴の巢籠りと云ふ曲の尺八を吹きながら尋ねて來る節がある。つまりあれだ、あゝ云ふ風に婦人ながらも毅然とやる時には、手にも見せぬと云ふ工合にやらなければいかん。何んな場所につれてゆかれても、その處々に適應してシツクリと合ふやうな人品となつて貰ひたい。大西郷翁にも幼兒がなつくと云ふのはこの處で、又あの成田屋——團十郎ですナ、あの優は地震加藤をすれば立派に清正となつて、觀客をして老英雄が惆悵に一掬の涙を灑がせもし、又八百屋お七になれば紅むの振袖も艶麗なる戀に狂せる少女となる。何もあの優の十八番である勸進帳の辨慶ばかりが好いのではない、色男に

もなれば悪形にも扮する、それが何れも巧いから名優なんだ。吾々でもさうで、女にでも子供にでも又老人にでも、魚屋にも八百屋にも郡長さんにも總理大臣さんにも、誰彼からも『彼の人は分つた人だ』と云はれるやうになりたいものである。但しそれはさうとして、よく交際の作法を知るは中々理窟一片では出來ぬことで、愛と敬との遣ひ分け、混ぜ工合は餘程緻密の注意を要する。何でも彼でも一列一帯にゆくと考へては大間違である。同じく朋友として交際する時は、誰れも同等であるが、實は其間にも長幼賢愚の別はある。長者賢者は成るべく愛を主として、何處迄も打ち解けて出るのが作法であるが、それに目下の者が調子付て不敬に涉つてはならぬ。例へばこゝに居られる和田中佐殿が私室へ退かれて後、やはりこゝに居られる大場少尉殿に向つて、『どうだ一番碁を打ふ』と云はれるとして、それは決して陸軍中佐と云ふ資格で少尉に命令を下されたのではない。命令ならば『大場少尉！碁を打て、そして俺に敗ける』と云やあ可いんだ。しかしそれ

では面白くも何ともない。それ故此んなことは是非も友達同志としてやらなければならぬのであるから、一つ軽く打解けて出られる筈である。しかしそれは長官の方からで、下の者から『ウンやらう』と云つてはいかん。やはり『ハイお相手をいたませう』と云はなければ圓満の交際は成り立たない。がそれも直立不動の姿勢でやらなくつてもいい。又た龜の甲より年の功で、老人には何かにつけてマケなければならぬ。親の方からは打とけて出ても、脛を噛んでゐる忤の方からはやはり夫れ相當の敬意を以て對さなければならぬのである。この點から考へると、日本今日の狀態では、マダ、不、充、分、の、點、が、少、な、く、あ、る、ま、い。尙々切に諸君の御研究を煩はしたいのである。

第七章 應用各論(二)

普通の交際術

交際法と品性——愛、敬、誠と禮儀——禮儀の變態——エーヴペリー卿の交際法論
 ——先づ愛敬すべき度合人柄を知りて適宜に待遇すべし——イエス及びノ
 ——愛嬌——各種の人と團體に對して——議論談話の仕方——冷笑、面皮を割ぐ
 こと、笑はれたる時——他人の「私」に對して——沈黙——應接の態度——交際と衣
 服——見習の必要——禮儀禮容は一小事に非ず——ヨリ以上のハイカラたるべ
 し。

交際法又は處世術と云ふと、一種の腕、仕方でありますから、枝葉なものやうであるけれども、人間の萬事は皆な品性から起るものでありますから、口を利きますのでも、或は又手を舉げ足を動かすのであります。皆な品性の關する所であつて、處世術も廣い意味に言ふ時分には品性の中へ這入る。通例使つて居る所で品性と術とを相對して言ふ時分には、品性は狭い

文と質

意味になつて、術と云ふものと相對するようになる。で、すから、品性は骨で、術は肉か皮のやうなものになるのであります。が、もと相離れたものではない。人間の極の内面と、それから人間の外の方に現はるゝ所見ゆる吾と、見えぬ吾との相違があるのである。孔子が論語の先進の篇の一番初めに斯う言ふて居ります。「先進於禮樂野人也、後進於禮樂君子也、如用之則吾從先進」即ち其意味は今時の君子が禮儀と云ふものを行つて居ると、世間からは野人と言はれる、後進の者が禮樂を行て居ると是は君子と言はれる。けれども私は野人と言はれても先進のやり方に従ふつもりである。當時先輩の禮樂は質素で、後進の禮樂は浮華に流れたのを戒しめて、孔子は寧ろ浮華を拒けて質素を取つたらしい様であるが、詰り、文質彬彬、而後稱君子と云ふのが孔子の理想であります。人間は内面ばかりが良くて、それで充分とは申されない。矢張外面に於きましても君子は君子らしいところの容貌風采、及進退動靜が無ければならない。品性が先づ内面の骨を組立つて、それが段々

々と細かく開發して參りまして、遂には美的の要素を收容含蓄するやうになる。品性は道德的のものでありますけれども、其品性が段々進化した揚句は美的にもなる。即ち質と文と云ふやうに言ひ現はして、品性に關する部分は質と申して、その美的に關する部分は文と云ふた時分には文質彬彬として居らなければ君子ではない譯である。孔子さんの考では今の後進のやうに、文の方へばかり走つては所謂ハイカラになり過ぎて困つたものであるが、吾は野蠻人と言はれても蠻カラと言はれても、矢張先進の禮樂に於ける如くありたい、斯う云ふのであります。出來方を云ふて見れば質からして文に及ぼすと云ふのが順序で、文の方を先へやつて、外側の方を造つてそれから内面の方を拵へると云ふのは前後の順序を誤つたものである。處世術など、申すものゝ、其人物がまだ出來上らない中に術でばかり世の中を渡つて往かうとするならば、是れ所謂後進の禮樂に於けるものであつて、決して宜しいものではないであるから、私が茲に處世術の効用を少

しく力強く述べましたにしても、此順序を缺いて迄も處世術の必要を唱へると云ふ譯では決してない。一般の人が質をよく造ることを努むべきは固よりであります。が、全時に日本社會にはもう些と術の方へも力を入れべきである。斯う云う筋なのであります。

然らば術は元來はどう云うものに關係するかと云へば、手取早く申せば詰り禮儀禮容のとであります。即ち外側の方例へば衣至舛吟のの様子をして居ると、それからコスメチックでもつけて香ひを良くしたり、或は又角の附いて居る着物を來たりして、少しは體裁を繕らうと云ふ方の側であります。が其の根本原則はと云へば單に外形斗りでは十分でない。矢張愛敬誠に基づかねばならぬ。此の精神を形で現はすのが禮儀禮容の本領である。愛即ち他人の心持を害しないやうに、他人を喜ばせるやうにと云ふ趣旨を能く言現はしたのは、私の見たところではナポレオン一世の皇后ジョセフィンの言であると思ひます。ジョセフィンが云ふには、一體交際に於ては

用愛、敬、誠の

「私が欲すると云ふ言葉が大禁物である。たつた一つ「私が欲すると云ふことを言ふて宜い場合があるが、それは I will that all around me be happy. て「私の周囲の總てのものが幸であることを私が欲すると云ふ時の、私が欲するは宜いが、其外人の前へ出て「私が欲するは禁物で、私は足を伸さんと欲す、だから足を出す、私は饒舌らんと欲す、それ故に饒舌る、私は嚏をせんと欲す、それ故に嚏をする、邊り構はず何でも爲たいことをするのは人を喜ばす術の大禁物とする所である。斯う云ふ意味なのであります。なか／＼「ジョセフィンは交際術が旨かつた人であるが、其術の原則と云ふものは即ち此の愛に外ならぬのであります。有子は又た「禮之用、和爲貴」と教へて居りますが、和の本は矢張仁と愛でありませう。それからモ一つは敬で、敬には詳しく言へば己れを敬すると他人を敬するといふ二つの意味がある。が、更に深く立ち入つて己れを敬する所以如何、他人を敬する所以如何と推して見ると、己れを敬する所以は、又た方々に他人を敬する所以と同一である。それは自

尊自重する者であつて始めてよく他人を尊敬するのでよく分る。先づ自尊自重の側面から見ると、禮儀禮容の効能は詰り自分と云ふ大切の本城を護るところの塹壕のやうなものである。自分が禮を以つて人と交らないと、他人の輕蔑を招く、或は直様な人に眞價を見潰されてしまふ。でありますから自分の縁に塹壕を設けて、さうして進退動靜に規律のあるとは他人の容易に我を侵害するとの出來ないやうに防ぎを附ける道具になる。學校などに於きまして、直様オイ貴様と云ふやうな調子で話をして、あなた斯様になさいとか、私が斯様に致したうございますとか、丁寧な言葉を使はない人は、詰り馬鹿にされる、あの人間は輕ッぽい人間であるから、足で踏潰しても宜からうと云ふ風になる。ところが初めからどんな人に會ひましても、人に丁寧な御辭儀をしたり言葉使ひを慎んだりする人は、自然と人が其人を尊敬するやうになる。女子などにありましては、尙更のことでありまして、若し女子がよく男に馬鹿にされまして、オイ姐さんなんと、心易だてを言

はれ易いものであります、オイ姐さんと言はれる女子は塹壕がないからである、塹壕をチャンと拵へて、さうして禮儀禮容が凜々しくある時分には、此女子に向つてどんな亂暴な書生でもオイ姐さんと言ふとか、或は其人の前で無禮な所業をするとは、逆も出來るものでない。でありますから神々しい氣高い婦人の前へ往けば、どんな亂暴な書生でもその前に匍匐してそれを尊敬せんとするものである。これが禮儀禮容を嚴かにする所以であります。男でも同じであります。又他人を尊敬する側面から云ふて見ると、餘り慣れ慣れしくするのは何の造作もなく、直に他人の御本丸に肉薄することになる、否、肉薄出來る、肉薄しても差支ない程先方が輕ッぽいと見る嫌がある。大抵の人は此んな馬鹿者に容易に肉薄させるものではないばかりか、表面は兎も角も、内實では忽ち百里も千里もの遠方へ擊退して下ふ。其れ故紳士淑女の紳士淑女に近づぐには、其れづ、鄭重の儀式作法があるべき譯である。此やうに人は自他ともに堅城に立て籠つて居る、人

間の心と云ふものは實に奥深い、外側はチヨット輕ッぽく見えましても、なか／＼内側が貴い人もあります。極く洒脱のやうに見えても、慎重な人もあります。からなか／＼人の本心と云ふものゝ中へ這入つて腹心を開いて相對すると云ふとは容易に出来るものではありませぬ。日本人などは、門を出ると三人の敵ありと心得よと云ふ格言がありますから、何でも無暗に人に心を許さないやうに銘々が用心して居る。其用心をして居る心の門を段々人に開かして、さうして人の心の奥底へ潜り込む例へば人間の心の奥底は浦鹽旅順のやうな要塞の固めがある。それに關らず自然と其中へ潜り込んで、相手方に此人でなければ天下に友とする者はないと云ふ位に思はせるには、即ち禮儀禮容には誠の敬と愛とが車の兩輪のやうになつて居る。堅城を守る塹壕、堅城に攻め入る坑路、兩つともになければならぬ。

尤も是は普通の場合を言ふので、特別に秀でた人が特別の事情の下にあ

カーライルと女王との
山陽と女王との
公陽と女王との
グンと其妻と
一婦人

る時は勿論變態がある。カーライルが御承知の通りに田舎で文學の研究に従事して居つて、極く詰らないところの窮措大であつたが、其の大著述から一朝聲名が次第に世の中に現はれて、遂にはヴィクトリヤ女王の御耳に入る程になつた。女王が頻にカーライルに會ひたいと言ふ恩命を賜はつた。誠に榮譽なことでありますが、カーライルは、私は宮中に用の無き人間で、且つ野人禮に狂はず、面倒臭い所へは御免蒙るとお斷りを申上たが、女王が度々使を下されるので、已むなく女王の所へお目に掛りに出ました。すると女王が玉座に御在あつて、カーライルは其前に立つて居つた。其側には侍従がズラリと列んで居る。種々御物語があつて、段々時が立つの中に、カーライルが突然後の椅子へ『御免蒙ります』と云つて腰を掛けた。それは宮中の作法ではない、帝王の御前に在つて言葉を掛けて戴くさへも人臣の榮華であるのに無禮な所置をしたから、侍従が立つて引立てやうとした。スルト女王が目でお制しになられました。其んなことをするには及ばぬとの

お知らせがあつた。女王がそれを御許しになつたことは女王のおエライことを現はします。けれども女王の尊嚴は天下に知らぬ者はないが文學の貴さは動ともすると忘れられる。權威ある勢力ある人の前に立つ時は文學者など自ら好んで卑屈にも陥りたくなる。尊敬は當然分り切つて居るが自尊自重は欠け易い。此の時田舎の堀つ立小屋に居つた人間が文學のためにはウイクトリヤ女王と雖も如何ともする能はざる見識がある、其處を示すとすれば、斯う云ふ變法も出るのではありません。女王の文豪文學に對する無限の愛とカーライルの自尊自重と相待つて適宜の處置をなして居る。又頼山陽の外史の一番初めに大文章が出て居ます、目野の亞相公に上る文章、彼がなか／＼當時の大宰相の所へても會ひに往かない、野人禮に狙はぬからと斷つて御機嫌伺に出ない、終に相公から切に請はれたに依つて、『魚は琵琶湖の鮮にあらずんば食はず、酒は伊丹の釀にあらずんば飲まず、』其位の御馳走をして而も禮だの容だのそんな小むづかしいと言はな

ければ御客に往つてあげませうといふ意氣是れも相公の愛と山陽の自尊とが折合つた變態の禮と申して宜しいであります。ソレカラ随分えらい人は我儘な無禮なやうなとをやる。彼の電話を發明したエヂソンが妻君の貰ひ方はどう云ふ貰ひ方をしたか。彼は針金を引張つて見たり、藥を注いで見たり、いろ／＼な試験をしたりするために助手が入用なので、近所の一女子を頼んで來た、それで針金でモシ／＼をやつて居つた。今迄はエヂソンはラブだの戀愛だのと云つて居る暇はなかつた。けれども此女子を見てそれでエレキが通じたと見えて、何等の造作もなく、突然『お前は私の妻にならないか』と掛け合ひ出した。實に簡単な話であります。スルト其の女子も考へて見て御返事をしませうと云つて、歸つて親達と相談をして翌日例の通り勤務に來て『宜しうございます、なりませう』と、此れも間に相應して至極單簡明瞭に答へた。此う云ふ工合にしてエヂソン夫人が出來た。斯れば婦人に對して無禮なやうであります、エヂソンと云ふ人は逸獨の

皇帝でも何とも思つて居ない、電話機を發明することはヴィクトリヤ女王にも獨逸のカイゼルにも誰にも出來ない、此點では眼中人無しであれだけの公益を世の中に與へたのであるから、斯う云ふ人には此んなこととて例外が出て來る。が普通の人で普通の場合では無作法といふべきであらう。實は何れ程エライ人でも慎しむのが可いので、慎しめば慎しむ程奥床しさが益す、エラサが現はれる。亞米利加のグラントに斯う云ふ話があつたと思ふ。グラントは自分の居る田舎から買切の瀛車を以て政府へ通つた。スルト或時其買切の瀛車へ婦人が一人乗込んで來た。グラントが葉巻を咬へながら居るのを見ると、其婦人が「何れ亞米利加の婦人でありませうか、其れ位のことをやつたのでありませうか、私はどうも煙草の臭ひが一向好かないから、あなた煙草を止めて下さい」。婦人の前では煙草を喫つてはならぬと云ふ禮儀が彼方にあるのでありますから、グラントにそれを要求した。するとグラントは是は私の買切の車で、お前などの乗込むべき所て

ないと云つて追拂ふても宜いのであるが、それを追退けないうて婦人の言ふが儘に葉巻を外へ捨て、しまつた。次の停車場へ往くと、驛長が廻つて來る。グラントの瀛車の中に婦人が居るから、あなた其處へ乗つちやアいけませぬ、是は大統領の買切の召車だと云つて叱られた。ソコで婦人は眞紅になつて飛出した。普通の人ならば眞紅になつて困つた様子でも見て、無禮に對する自分の腹癒でも爲るのでありますけれども、グラントは態々婦人の方を見ないで、知らぬ風をして居つた。カーライルや山陽やエヂソンのやうにやるのも例外としては宜いが、平和な文明なセントルマンとすれば寧ろグラントを摸倣するのが最も危険のない、最も高尚な遣り方である。此關係を段々論じて往きますと、根本は品性にあるので、事に依れば禮容と云ふものは構はぬでも宜いことがあり得るけれども、若い人などの養ふて往くには是非共質を土臺にして、文が其表を飾らなければならぬ。それが何方かに偏すると、そこでハイカラと蠻カラに分れる。ハイカラの方は質が

少くて文が多過る、蠻カラの方は質が多過ぎて文が少な過ると云ふこととあります。が、どちらが世の中で成功するに付いて得があるかと云ひますると、ハイカラの方がどうしても得である、眞の意味に於ての成功と云ふことはどうか知りませぬが、此方が多數の人に喜ばれるのでありますから、どうも成功をし易い。其代り其人の一生は若し質と云ふものがそれに伴はないならば、それは幫間的に流れて獨立したる品性と云ふものを持つたとは云はれない。併し外から見ても大勢の俗人に喜ばれるやうな所謂成功と云ふものは此人の方に多い。己れの質があるから術の方は粗略にしても宜いと考へる人は何方かと云へば高慢な人である。斯う云ふ人は世間多數の人からは好評を受けないもので、事に依ると段々と困窮などにも向かつて往く。裏店長屋に居て大氣焔を吐くと云ふやうなキニツク哲學者風になる、あゝ云ふ人は人に恐れられたり、自分だけは非常にエライ抱負があるが、段々二階から下へ卸される、下から空藏へ追遣られる、仕舞には家もな

く妻もなく子もないと云ふ風になり易い。何れを望むか、人々の氣性如何に依つて自由に撰んで宜いばかりか、社會全體として考へれば、斯う云ふ人間も無ければ、皆が人に喜ばれることばかり考へて居つた時分には發達することは出来ませぬから、是の種の人も必要であります。併し今日の世の中は、どうしても社會多數の人に交つて、どんな哲學者でも、どんな天才でも、他人と相須つて他人の力をどう云ふ形にかして借りると云ふことがなければならぬ。言換へれば昔キニツクやストアや或は東洋の老莊などの時代に比べれば、今は事業が社會的でなければ到底爲し得べからざる時勢になつて来て居るから、此術と云ふものを研究する必要が昔よりも増した。私は斯う考へる、どうも今迄の交際術の説方は日本では未だ足りぬ。そこで私がエーザベリイ卿の此れに關する著述を読んで見て、西洋人からは平々凡々なこと、又讀者の或る方からも左様見られるであらうと思はれることを、一應参考の爲め述べて見やうと思ふ。が、此ういふことは老功の君子

エーザベリ
の脚の交際
上の諸注意

たることを要するのであるから、大體卿の教訓を敷衍すると致します。
エーザベリ卿の言ふに、處世術とは人の歡心を得る方法である、人を喜ばせることである。若い人はよく人を喜ばせることを知らなければいけない。併ながら其人を喜ばせると云ふことをする爲には、何が必要であるかと云ふと、最も多く必要なのは、讀心術で、勿論人の心を読む、人の心を知らなければ人を喜ばせることは出来ない。ところで人の心を読む術はなかなか六づかしい。本を読むなどから見ると非常に困難である。何となれば心と云ふものは骨と肉と皮がある、人は皮だけを外に見せる、淺い所は直ぐに見えるが、併し奥の方へ往くと肉があつて、其中に骨がある、其骨の心髓まで見透すと云ふことは容易なことではない。其れ故人と交るにしては、外側で見ゆる所は詰らない、段々奥へ往く程大切である。人を信用するのでも皮の方で信用をしてはいけない。人間と云ふものは奥底を知つて信用をしなければならぬ。例へば金の事に付いては信用が出来るけれども

其他の事に付いては信用が置けないと云ふ人がある。如何に親友であつても、金を貸してならない人もあるし、懇意でないからと云つても金を貸して大丈夫な人がある。信用も其人の心如何に依つて種類と度合とをよく考へねばならぬ。それには餘程よく内心を検査しないとならないのである。其人等の中には自分と事を一緒にすることの出来る人もあるし、或は唯單に自分が使ふことの出来る人もある。圓いところの人間は圓へ、角いところの人間は角へ入れる注意をしなければならぬ。ウカと人を信ずることは悪い、ウカと人を疑ふことも悪い。其疑ふ、信ずると云ふ源を造る所は、自分が其人の内面を覗き得る力如何に依るのである。人を信用する一段となると、完全に信用しなければならぬ。併し盲目的に信用することは宜しくない。若し其人に對して疑があつたならば、人を用ゐてはならない。又用ゐた以上には人を疑つてはいけない。けれども其疑はしいと云ふことが疑はしかつたならば、寧ろ信用した方が宜い。相手が心髓か

ら打解けて交際が出来る人なら結構此上なしであるが、左様注文通りの人は容易に無い、無いからと言つて皆捨てて了ふなら、世に交はる人が無くなつて了ふ。或は深く、或は浅く、愛と敬との度合様式を變へて各適宜の所置に出るのが、禮義の必要の所で、品性の力、徳の力の大きなは言ふ迄もないが、『虚飾の伴侶となるなくば徳も長足の進歩をなさざるべし』とフランスの皮肉な一哲學者ロシフォーが言つて居るが、それは確かに其通りである。私は正直だから宜い、私は勉強するから宜いと、自分の徳を頼んで他人の虚榮心を見殺すと、どうも成功する人になれない。又佛蘭西の貴婦人のモントーンが言ふた言に『禮儀は一錢を費さずして凡ての物を買ふ』と、禮儀と云ふものは——作法を丁寧にする者は一錢を費さずして總てのものを買ふことが出来るといふのであります。或時英吉利のエリサベス女王が、財政上の御心配がありました時分に、パルレー公が女王に忠告をした、其忠告に斯ふ云ふことを言つて居る。『万民の歡心を得よ、されば陛下は萬民の心

と共に、萬民の巾着を得ん。』彼等人民共の歡心を御買ひなさい、若し歡心を御買ひなされると、其歡心と同時に人民共の巾着を陛下が握るとが出来る、と斯う言はれたと云ふ話でありますが、成程禮儀禮容が正しくて、腕のある人は他人の巾着の紐を解く力がある。親父さんの巾着は直ぐに解ける。他人であつても、上手な術のある人は他人の所へ往つて無理にも金を借りて来る。鯉節一本位持つて往つて百兩借りて来ると云ふ連中が世の中にあるが、それは術で世の中と云ふものは力と共に術が大切である。それはどう云ふ譯であるかと云ふと、人間と云ふものは力てやらうと思ふと抵抗をする傾向があるが、術でやると喜んで引廻はされるものであるからだ。昔太陽と風とが賭をやつて、或る旅人の上衣を脱がせることを競争した。初めに風が暴威を振つて旅人の上衣を吹拂つてやらうと思つてドン／＼吹いた。さうすると旅人は寒いから一生懸命着物を體に結付けて、成るべく吹飛ばされないやうにした。上衣はどうしても取れない。今度は太陽が

やつて見やうと云ふので、温かい光を放つてそれでヤンワリと照し付けた。ところが温かになつて来たものだから、旅人の満身に汗が段々出て来た。是れでは脱ずばなるまいとヒョットと脱いでしまつた。此れはリリーの譬話であるが、風のやうにやつては人は動くものでない、太陽のやうにヤンワリやらぬといかぬ。何でも人を追使つてはいけぬ、それよりも導き誘ふやうにすれば、人間は動く。よく美人が獅子の角などを持って動物を自由自在にして居る繪があります、あゝ云ふ工合に、何でも魅して使はぬと、人間と云ふものは旨く引き廻はせるものでない。言ひ換れば、其人に快樂と云ふ鼻薬を呉れると、人間はどんな暴々しい頑迷者でも引廻はすことが出来る。シエクスピーヤの言葉に、『劍で撲り附けるよりも笑顔で威し附けよ。』威し附けることも宜いが笑顔でやる、是は旨い言葉であります。だがそれを始終、所謂藝者がやるやうな工合にやつた時分には、それでは藝妓或は幫間と云ふものになつてしまつて、獨立的人間の品格は失つてしまひます。が、若

ハイとイエ
エの返答

しさうでなく不正の道に踏込まず、自分が賢く爲し得る限りは、人の心を喜ばせるやうにすることが、道徳にも適ひ己れの成功にもなる。
 應對に付て、第一に注意すべきことは、ハイとかイエとか、云ふ然諾が肝腎である。イエスと云ふ言葉、ハイと云ふ言葉の方は言ひ易い。折節は濫々やる時もあるけれども、まア出来るとして、イエ即ちノーと云ふ言葉が非常にむづかしいものである。イエと云ふと、適當な時に於て言はないが爲に、それが非常なる損害を一身一家の上に招くことがある。初めに斷然イエと云つてしまへば、霜を踏んで堅氷到ると云ふやうな悔がないのに、初めにノーと言はなかつた爲に、段々深みへ這入つて、さうして仕舞には罪惡の淵に這入らねばならぬと云ふ仕儀に陥つてしまふやうなことがある。ノーと云ふことは餘程肝腎なことで、其一例として小亞細亞の人民はノーと云ふ一言を發することが出来なかつた爲、到頭國を滅ぼしたと云ふ例があります。此の話はプラターク英雄傳の中にあるのださうである。

だから「ハ」と云ふことは適當な時に於て發言する勇氣もあり智慮も無く
てはならぬ。「ハ」と言ふのは宜いが併ながら快く「ハ」と言ふが宜い。他
人の感情を害することは何時でも悪いから、「ハ」と言ふは何所迄も言ふに
せよ、顔に青筋を立て、私には出来ませぬなど、云ふのは是に至つて拙な
やり方である。日本の若い人、今の中學校の青年などが、時によると教師に
向つて其の感情を害するも構はず此の流で應對する者もあるが、斯う云ふ
のはまづい、試験の點が十點位直ぐ減つてしまふ。世の中の事柄はどうし
ても感情で持つもので、人間は感情の動物である。大に理窟張つてラシヨ
ナル、ビーイング、理性ある生物などと大層らしく言ふは言つても、感情で動
くのだから人を怒らせることは誠に悪い。さればと云つて、愛嬌を失はな
いつもりで、イナと返答すべき所を曖昧にして居つてはいかぬ。譬へば婦
人が墮落する初めがそれで、何れ婦人自から先へ墮落する者はない。男子
からアイラブ、ユーなどと甘つたるいことを言はれた時に、其處で斷然と己

愛嬌

れの意思を發表して、私はそんな不爲赫なことを致しませぬと云ふ意思が、
明瞭に男子の方に分るやうであれば、笑ひながら居つても是が決して墮落
しない。毎日の新聞によくあるのだが、何れ墮落した女は初めに斷然とノ
「を言はないで、それで段々と深みへ情愛の爲に引張込まれて、遂に出るこ
とが出来ぬ、寧ろ毒を喰はゞ皿までと云ふ徑路を取つて居ります。即ちノ
「を斷然言ふのが宜い。が併し同時に素振は親切に、丁寧な、公明に快活で
あること、即ち愛嬌は是非あつて欲しい。人に依ると私は天性どうも無愛
嬌であつて、愛嬌と云ふものは一向出ないなど、云ふ人がある。それは事
實さう云ふのもある。どうも顔附のまづい、愛嬌に向かないやうな顔心柄
と云へば愛嬌に向かないやうな、木で鼻をかんだやうな連中もあるが、併し
ながら爲やうと思ふと出来ることだ。なぜと云ふに、此の交際術の中で、兎
も角も他の人を樂ませやうと云ふ心持が、其の過半の部分占めて居て、
かも、此の心は持たうと思へば誰れにも持てるから。が、此愛嬌を修養する

のは、年を取つてしまつてはいかぬ、年を取つてしまつてから愛嬌を覺えやうと思つても、造つたやうな愛嬌になつてしまつて、どうも旨い工合にいかぬから、若い中に二十歳前位に之を得てしまふが可いとエーッペリ、卿は云ふて居る。それは尤な話で、何でも若い中の方が宜いのであります。世の中を廣く見れば、實際其實力がある人で、随分陋巷に窮居して居る人があつる。それはどう云ふ譯であるかと御考へなさい。是に反して随分どうもあの人で、あの位置が能く勤つたものだ、自分に耻かしくなからうかと思ふ人間が、是が香水の香ひや、今の愛嬌一つで、長官或は裏門攻撃など、云ふ方法に依つて、存外エライ位置を得て居る人もあつる。是は何であるかと云ふと、一に他人に快樂を與へると云ふ術如何、腕如何にあるのである。であるから、それを實驗して見ない人は愚かな人である。それで又モ一つは、人を喜ばせることの功德は、對手を喜ばせて見ると、自分も愉快なもので、當人が幸福を得るやうになるから、是非愛嬌は養ふやうにしなければならぬ。さ

ればと云つて人を喜ばせやうと云ふ考で、其方へ熱中してしまつて、冷靜の頭腦を失ふことはいけなない。冷靜の頭腦を以て居ないと飛んでもない遣損ひをする。此れも其の一つであるが、人を見ると、馬鹿氣た人間が多い。其の時分に、馬鹿氣た人間を、馬鹿にしてはいかぬ、理性を以て判斷して、馬鹿げても、憫口だらうと云ふことが見えなくてははいかぬ。又たもし眞實其の人が馬鹿であつても、賢い人も、金持と同じく、高慢をする權利はない。天才其他賢人と云ふものは、天賦の性が他人より優つて居ると云ふことなんであるから、親から譲られて財産を持つて居ると同じやうなものであるから、眞實向ふが馬鹿な人であつても、それを馬鹿にする資格が何人にもない。だからさう云ふ所はよく智慧を運らして、決して馬鹿にしてはならぬ。且つ實際に於て人と云ふものは、此方考えたやうな馬鹿者ではない。卿は此う諄々と青年に忠告して居る。又世間を見ると、いろ／＼な人があつていろ／＼なことを言つて來るも

のであるけれども併しながら一々それを信じてはならぬ。虚世辭を言ふ人も随分世の中には少くないから、其様の人は不誠實な人でなくても、何か求める所があるものであるから、危険なりとして戒むるが宜い。人を輕々しく敵と思ふても宜くないが、親友と思ふことも宜くないのである。殊に人間自ら理性的の動物なんと云ふけれども、随分矛盾、撞着、偏見と云ふやうなものに富んで居るものであるから、それを能く氣を付けなくてはいかぬ。口には主戰論などを唱へて居て實際には却つて伴を徴兵に出さない工面をして居る人などもある。又た團體と云ふものは複雑な表裏のあるものであるから、團體を攻撃したり、悪く言つたりすることは宜しくない。一個人と云ふものは、事に依ると怒りや恨みを忘れることがあるけれども、團體と云ふものは悪口を言ふと誰れか彼れか覺えて居つて、未始終までつけ廻されるものであるから、團體を敵とすることはよく戒しめなければならぬ。であるから昔の英吉利の有名なバークと云ふ政治家は、随分人を彈劾する

ゲーテの英
人評

ことをやつたけれども、國民全體、或る階級全體、或る職業全體と云ふものを彈劾して、人民を怒らせ、人民を嘲弄したことは決して無かつた。個人でさへも其人の感情を害したり、或は其人の一面だけを見て、交際することは無論悪いが、團體の方は此の點を餘程餘計に注意しなくてはならぬ。て其處へ往くと、獨逸のゲーテなどは、憐悌で、ゲーテは英吉利人を斯ふ云ふ風に評して居る。彼はエツケルマンに向つて、『英吉利人は、惣じて交際場裡、人の居る所へ這入つて来る様子、素振と云ふものが、すべて自信、沈着、何かどうも自から氣取つて落付いて、世界の主人のやうな様子をして居る』と言つた。所がエツケルマンが答へて、英吉利の青年と云ふものは、獨逸の青年から見ると、少し痴鈍である。教育と雖も劣つて居る。精神の修養も獨逸に劣つて居るではないかと言ふた。ところがゲーテが答へて言ふのに、私が彼等の優つて居ると云ふのは、其んなことでない。又英吉利の門閥や財産がどうの斯うのと云ふのではない。『彼等の優勝は左るとに存せず、又其門閥に存せず、そ

は將に其の天の此くあるべく彼等を作りし如くあらんとするの勇氣を持つにあり。彼等には曾て一半なる者なし。彼等は完完なる人なり、時には完全なる愚者もあり、是れ予が實に認むる所なり。然れども此れさへも或る物なり、而して其れ相應の價值を有す。』此のゲーテの意味は、何も教育財産精神修養がどうの斯うのと云ふのではない、唯だ英人は賢愚何れにせよ、唯完全だと云ふたのであるとのとて、言ひ廻はしが真に甘い。斯う云ふ風に、團體を評する時分には、やるが宜い。是等に照して見ますと、吾々は言葉使がひど過る『日本人は概して意氣地がない』、『斯う言ひ拂つてはいかぬ』、『どうも』、『體學者なんと云ふものは無氣力なものである』、『實業家なんと云ふものは馬鹿者ばかり多い』、『さう云ふ言葉使が悪い』。さうすると其處に居る學者、實業家が皆氣を悪くして、何の某は凡て吾々を悪く言つた、我々一同の敵であると思つて仕舞ふ。

それから議論です、議論と云ふものは危険なものである。議論をすると

議論談話の心得

兩方の感情が冷へて来る。親友の間でも議論をやると今迄の溫情が冷へて来て、賣言葉に買言葉で、兎角誤解が生ずるものであるから、議論は成るたけ止すが宜い。旨く往つたところで、口に勝つて友達を失ふのであるから、議論は止す、理窟から言ふて見れば、どれ程良いことであつても、人と反目することは御氣を附けなさい。なぜかと云ふと、斯う云ふとを考へなくてはならぬ、總ての人が自分の過を知らない、それを知つたにしても、自ら信じない。或る人が此人を論破してやらうと云ふ心持で強く攻撃を加へても、決して此方の信仰を先方に移すことは六づかしいのである。けれども若し場合に依つて自分の考を何處迄も先方に傳へねばならぬ必要がある時分には、それは簡單明瞭に言ふて、さうして満足して居るが宜い。さうして先方が何程かでも心を動かしたなら、信念を動かすやうなことがあつたならば、それで満足して居る位に止めなくてはいけない。斯ふいふ注意があります、是も尤であります。それから其次は談話に就てであります。話をす

ると云ふことも非常に術に關係がある。よく話す人と云ふものは必ずしも話をしない。スラ／＼饒舌るからお話し上手と云ふ譯のものでない。寧ろ上手な話し人は口數を多く利くものでない。話を聞くのも亦六づかしい。是は話をするから見ると少しは樂であるけれども話を聞く間に批評家或は判事と云ふやうな態度で話を聴いてはいかぬ、ハ、ア或は左様かと云ふ調子の間に、顔付や言葉つきの間に、人の言ふことに反對し、或は上げたり下げたりして人の寸尺を立てながら聴いてはいかぬ。詰らないことを言つて居る、或は僕は反對だと云ふやうな風をして聴いちやアいかぬ。それで話を聴く時分には、自分を無くしてしまつて、話をする人の心の通りになつて聴くのが一番宜い。それでさう云ふ工合にして親切な同情ある聴き人である、と云ふと、段々と話す人の信用を得て來て、それで友達の間であるならば、さう云ふ人には始終話を聴かされて居る身分であつても、遂には他人から助言を求められるやうな満足が來るものであるから能く辛抱

して聴ゐて居らなければいかぬ。若い人は大人の中へ交つて注意をして貰へるものと思つてはならぬ。年寄つた人が話をして居る中へ口を出して、さうして自分の話を聴いて貰はうと云ふ野心を持つてはならぬ。小さい人は、座つて、さうして聴きながら見て居れ、人がどんな工合に話をして、聴く人がどんな工合に話を聞いて居るか、と云ふことを見るので、人に注意をされないナッシングの中が、さう云ふ稽古をするに一番宜い、不注意人物は觀察の特權あり、不注意人物の中が、物を公平に觀察する利益がある。老人と云ふものは、事に依ると小僧ツ子が生意氣なことを言つた時分に、眞面目に受けなくて、何と答へたらば宜からうかと云ふことさへも考へるのを面倒がる、其面倒を省く爲に好い加減にして置く。詰り益を受けなければかりでない、馬鹿にされる。それかと云つて、馬鹿者が自分に向つて馬鹿なことを言つて來たにせよ、馬鹿な返事をしてはならぬ。お前も矢張馬鹿者となるから。此處に「バトラ」の言葉が適切である。曰く、「賢人の口は腹に、愚者

の腹は口にあり。愚者は知り、思ふことを總て言出せばなり。』是は一寸考ふべきこととす、そこで卿は更にやさしい返事をしると云ふことを説いて、『やさしい返事は怒を解く』と云ふ格言を添てある。

それから冷笑に關しての注意に移りまして、冷笑と云ふものは甚だ悪い、といふは、冷笑すれば無禮を受けたよりも、損害を受けたよりも、人が恨みを持つ。それから人の面皮を剝ぐとが悪い、尻から割れるやうな嘘を吐く人がある、氷の黒焼を今見て参りましたなど、眞面目腐つて話す。ソコで彼奴の小面が憎いから面皮を剝いてやらうと云ふ者があるが、それがいけない。若し義務であるなら仕方がない、検事判事が面皮を剝ぐのは罪人をそれなりにして置く譯に往かないからである。化皮を剝がれた怨の深いに就て茲に一例がある。昔希臘のトラシラウスと云ふ人が狂人になつて、希臘の或る川に世界中の軍艦商船が皆な其處へ集つて居る、而して其れが皆んな自分の所有だと信じて居つた。此れは例の狂人の空想であります。

笑ふ、笑はれる

ところがクットーと云ふ人が之を氣の毒に思つて、其の癡狂を癒してやつた。するとトラシラウスが不平で、お前は私の軍艦商船を皆んな損失させてしまつた、恨めしいと言つたさうである。大凡そ面皮を剝ぐと此ういふ結果になる。偽りを言ふ人には偽りは一種の價值のあるもので、それを片端から壊はして往けば恨みを買ふに極つて居る。殊に串戯の爲に人の面皮を剝いて友達を失ふことは馬鹿な話、世間には自分に對して榮枯休戚何等の關係のない人の面皮を剝いて、其れが爲め之を敵とするやうな人々もあるが甚だ愚かなことである。併し若し自分が人に笑はれた時にはどうするかと云ふに、人に笑はれると云ふことは随分ある、まして聾者などになると、他が自分の噂をして居ないかと、聲の早耳をする。が凡て邪推をしてはならぬ。若し人が嘲弄を加へんとしたならば、須く先を越して、先づ自分を笑つてしまふと、嘲弄しやうとする先方の意氣込が一概に消へてしまふ。嘲笑する人と一緒になつて、自分の短所缺點を自分で笑つて了ふは痛

いやうだが、結果は却つて可い。學問が出来ない人で落第ばかりして居つて、人が笑ひさうであつたら僕は落第ばかりして居つて困ると斯うやる。さうすると他人が笑ふことが出来なくなる。何人も己れの弱點に超絶した人を見て喜ぶものである。何故であるかと云ふと、さう云ふ人には才智があり、諧謔の趣味のある人であるからである。併し人に笑はれる材料を態々拵へて、さうして先を越すと云ふのは詰らぬ話である。併し笑はれると云ふことを嫌ふ人間は、小さな人間である。場合に依つては、自分に見識があり、實力がある爲め笑はれることもある。此の嘲りと云ふものを忍ぶ勇氣がなければならぬ。それを自分の柄にもないことをやつて、笑はれまい／＼として體裁を仕損ふと、譬へばイソップ物語の鳥が孔雀の羽を附けたやうなことをして笑はれると、自分の價值が絶無になる。髭の無い人が附髭をつけて、さうしてストロブの前で蠟が融けて忽ち髭が落るなどは、それは甚だ人品の上に關係がある。が、他人の輕蔑は自分の缺點短所の爲め

にもよるのであるけれども、必ずしも品性を害するものではない。と此やうにラポックは教へて居る。

それからジョセフインの言ふたやうな工合に、交際場裡に於きましては、私と云ふことを甚だ忌む。例へば私の衣物が、私の連合が、私の子供が其他一切私に、私は、私が皆な禁物である。決して自分に付いては語るなどある。が兎角是がやつて見たい。其の結果他人に喜ばれないやうになるのである。併し自分で私、私と云ふことは悪いけれども、もし他人に私は、／＼と云ふ人があつたならば、謹んで其の私を聴くが宜い。さうするとお前さんは評判が好くなる。對手はお前さんを誠に話のよく分る人であると云ふのみならず向ふの人の腹がちやんと分る、私は、／＼と云ふ人は、慥面もなく其の醜態を露出するものであるから。それから應對談判をする時分には、セキ込んで可けない、能く落附いてすべきである。『若し解くことの出来る結び目であつたならば、其結び目を切斷してはならぬ。』小荷物、繩などが

餘り入り組んで結ばつて居る時に、エ、面倒臭いと吾々がナイフなどで一刀兩斷するところがあるが、左様短氣に、一氣呵成に談判を片付けやうとするは可けない。應對談判に付いては、餘程悠長に構へてやらぬと、遣損ひがある。なぜかと云ふと、人と云ふものは、お前斯う云ふ風なことをして呉れぬかと、此方の要求條件を持つて往くと、先方は其要求條件は願ないで、自分の勝手な話ばかりをするのが好きだ。金を貸して呉れ、左様媾和條件がどうなりましたかとやる。それが濟むと教育問題に這入る、宗教問題に這入る、自分の好きな話をして要求の件は今日遅くなりましたから後日にしたら如何ですと云ふ風に追歸す。其處へ往つて無暗に此方からサア答へなさい、さう云ふ風にやると人を怒らせるから暫らく堪忍して先方の言ひたいことを先へ言はせなければならぬ。第一に自分が怒つては可かぬ。此方は要求を急いで居るに餘分な話をしてなどの氣合は噓にでも出さないやうに、怒つても腹の中に怒つて居るのは宜いが、それを口へ出しては可か

ぬ。又素振を見せてもいけない、絶交をしてしまふと云ふやうに手紙を書くなどは尤も事を破る本である。て、應對をするときに差出口も悪い。人と人が色々話をして居ると、それは斯うだと横合から突然に言ふものがあるが、それはいけない。それに付いて、キング、ゼームスが目に蠅が飛込んだ時に斯う云ふと言つた。『余は三王國を持てり。然るに汝は余が目に飛入らざるべからざるか』と。余は三つの王國を持つて居るから、其方は何處へでも自由に飛んで往ける、其れを所もあらふに乃公の目へ飛び込む奴があるかと云ふ至極最も小言である。それと同じやうに、天下到る所汝の話し相手はあるのに、今二人が話をして居る所へ差出口をしなければならぬのは、餘程へまな人間である。話をして悪い事、悪い記憶を惹起すこと、或は見解の違ひを起す政治談、さう云ふことは普通の人としてはいけない。時によると餘り懇意でない間柄で、眞宗を信じて居る人の所へ禪宗の人が往つて、あなたは何を御信じなさるかと云ふと、先方の宗教を悪いと言はぬ

ばかりである。だからさう云ふことは注意しなければならぬ。それから先方が女であつたら年齢を聞いてはならぬ。あなたも幾歳ですか、愛嬌でやるつもりだけれども、若粧りて年を隠してやらうと云ふ考のある人に向つては、何とも氣の毒千萬である。四十でありながらマサカ二十とも言はれないさうかと言つて四十とも言はれない。ソコで困る、赤面する、怨むといふことになる。何れかと云へば經驗の足りない人には、『話をするのは銀だ、それから黙つて居るのは金だ』、『ソロモンは『賢者は聴き、愚者は語る』と云つた。噤舌の弊に落ちぬ注意が肝心である。それで何でも話好きの人は用があつて話をするのでなくて、談話のために談話をする連中だ、口を動かさないでは居られぬから、何でも人に向つて話をする。どう云ふ目的があつて、しやうと云ふのでなくして、饒舌る人がある、それが即ち處世上不成功の秘訣だ。話をするのならば、腦で話をするやうにするが宜い。パトライが斯う云ふ風に教へて居る、『談話の高調時には急き込みて、思ひしよりも別なるこ

とを口外し、舌の使用の外は何等の意味なきことを語るものなり、是れ禍害弊根の伏在する所なり。』と此れは眞理である。それからブルタークの本の中にデマレータスと云ふ人が、某る集會の席で黙つてばかり居る、或人が言葉を知らぬ爲か、又た智恵が無い爲めかと聞いたところが、『愚者焉んぞ其の舌を制するを得ん』と即答した。是も明言だ。馬鹿がどうして舌を動かさずに居られるものか、此舌を動かさないうで居ることの出来る人はえらい。又應接の態度であります、が總じて人に癢に障らせる、自分で計りえらがつて、何だか人を眼下に見下すやうな人を睥睨するやうな工合があつてはならぬ。人は各自に小さくなることは嫌ひだ、銘々が自ら小さいと思ふことは不愉快なものだから、人の前へ出て尊大振つた素振をするのは最も禁物だ。大抵の場合に言葉を出すに獨斷的では可けぬ。是は是に相違ないと云つては角が立つ。先づ斯うであらうと考へると云ふやうな調子でなければいかぬ。事實と思はれることでも聞誤りと云ふものもあらうし、言

ひ誤りもあらうし、人傳に傳つて來たことは中間に傳ひ誤りもあらうから、決して容易に強い斷言の出來るものでない。殊に斷言して威張らないでも損のないことで、成るべく人の感觸を害しないやうに、穩便にやるが宜い。さればと云つて石橋を叩いて見て渡るやうに用心に用心をして、斯うしたならば感觸を害しはしないか、斯うしたら冷評を受けはしないかと云ふ風に、びくついて居つて、何にもしないで居るのはいかぬ。或る程度までは孔子の『再びせば茲に可なり』と云ふたのと同じやうに、ペーコンが教へて居るのに『會て過失せざる者は何事も爲し能はざるものなり』過失と云ふものは態々して宜いことでないが、己れに爲し能ふだけのことを盡して過つたのは仕方がない、餘り謹慎退嬰に過ることも宜しくない。

もう一つ衣服が、衣服はさつぱりと着なさい、時間と金を非常にかけてはいかぬ。金が非常にかゝつたやうな衣服を着て居るのは俗人だし、それから身仕舞に非常な手数をかけたらしく見えるのは遊蕩兒らしい。

時間と金を浪費しないやうに衣服を奇麗に御着なさい。何となれば大抵世間の人は衣服で其人の相場を極める、人品を衣服で判断するものであつて、實質的にあなた方を待遇する人は天下に一二人か二三人位ほかないのに、唯だ見る丈の人は非常に多いのであるから、衣服に注意しない人は成功しないものである。其れに衣服に無頓着な人と云ふものは、大抵衣服以外のことにも無頓着なものである、とラボックは云つて居る。是はどうも例外なき規則とは出來ぬ、日本等には衣至肘、袖至腕と云ふ人でも思慮周密の人があるから、だが相當に衣服に頓着した方が賢いでありませう。

それと通り濟みしましたから、次は全體の約論になります。いろ／＼のことについて彼は注意を述べてあるが、大體此の處、生術と云ふものは考へて出來るものでないから、交際場裡に立つた時分には、人の振りを見て最も好い最も自分に愉快と思はれるやうな作法を見習ふと、が肝腎などである。是は若い人の能く注意すべきとて、あゝ云ふ素振が自分に快樂を與へ

た斯う云ふことが宜かつたと思へば、それは見習ふやうにしなければならぬ。世の諺に『禮儀は人を作る』と言つてあるが、其通りである。ペーコンが又斯う言つた『快き容儀は永久なる推薦状なり』それから尙ほミッドルトンが斯う言つて居る。『功勞と知識とは一旦人の歡心を得て後飽くまで之れを失はざるを得れども、人の歡心を得るまでが困難なり。汝の應對、風采、禮容に依りて人の注目を引け、汝の言葉使ひの流暢優美によりて人の耳を喜ばしめよ、されば確かに——(ミッドルトンは、確かにと言つて居るが、ラポックは斯う言ひ直して居る、予は寧ろ多分と言はん)歡心は得られん。』實力と云ふもの丈ではなか／＼他人の歡心が得られない、其の代り若し歡心を得てしまへば失ふことはない。が先づ通例としては言葉使ひだの禮容だの風采といふものに依つて、他人の目を喜ばしたり耳を喜ばしたりするやうにして、實力を人に見せない中に人に愉快に思はれたいものであるといふ意である。有名なロード、チエスターフキールドが自分の子に付いて

斯う云ふことを言つた『人々は吾が兒が知人の間に必ず愛せらるゝと言ふ而して余は甚だ之を喜ぶものである。されど余は余が兒が未だ知られざる前に他人に好まれ、已に知られたる後にも愛せられんを望む。若し人は等のことを小事なりとせんか、是れ人生を解せざるものなり。注意に注意しても尙ほ足らざるは是等のことなり。人の心を得るは常に斯かる小事による、智は通例情の泡沫に過ぎず』と。一寸言ひますとチスターフキールド卿が、私の伴が能く人に愛せらるゝと云ふことは結構なことであるが、まだ足りない、私の伴は人に知られない中に好まれるやうにしたいと思ふ、若し誰かそんなことは詰らぬことでも宜いと云ふならば、其人は人生を了解しない人である、世の中と云ふものはそんなものでなくつて、詰らぬらしいことが人間の幸福立身の上に、非常なる力を持つて居るものであつて、智と云ふものは情に比べて見れば泡のやうなものである、と云ふのである。是位に愛せらるゝと云ふことが大切なものだ、とラポックも考えて

居る。

以上が大體エ卿の説かれた注意で、取捨は讀者にお任せ致します。要するに原則は愛敬誠であつても、其の應用法は更に區々別々で、洋の東西で相異なるは勿論、同じ國でも流々の細工が有り得る事柄である。唯だ此ういふことも、人生の一大重要事として多大の研究と修養を要するとは切に注意を請ふ所である。アメリカのエマーソンは斯う言つて居る『人生は禮儀を顧みざる程短からず』佛蘭西のマダム、テッカーは斯う言つて居る『女子は男子をして義侠心を起さじむる程の禮容あるべし』禮儀を好くして男子に接すれば、男は此婦人の爲めならば一身を犠牲に供するも惜しからずと思ふ。女子は其れ位の禮容を持たねばならぬの意味である。是は男子でも同じことと勉めれば此位に往くかも知れない。國事犯罪人であつた米國のアイロン、バーが謀反の罪が定つて法廷に裁判を受けた時分に、ハイカラで以て言語動作何處から何處まで至れり盡せりであつた。或る女子が

父と共に其處へ傍聽に来て居て、彼人が大逆無道の罪人とは何うしても私には信じられないと父に言つたと申します。此邊はアイロン、バーの禮容術の極致を發揮したものである。術が好いと云ふと男女共に斯う云ふ感化力を持つことが出来るのである。段々此處へやつて參りますると、餘り此人間の腕或は術或は皮を大切なるものゝやうに申上げて、品性が是に比すれば誠に詰らぬものゝやうに聞えるやうになつたてでありませうが、それは初めから申す通り、多數の俗人と云ふものを相手に致しまするには、是非之を以て進んで往かねばなりません。又是から先は俗人などゝ云ふのは畏れ多い話で、どんな人でも社會多數の御蔭を蒙りつゝ、進んで往かなければならぬことであるから、日本人も従前より、以上のハイカラにならねばならぬことは吾々の共に注意せねばならぬことであります。けれども、獨立的の氣象がなければハイカラになつても何にもならぬは言を待たない。

第八章 應用各論(三)

家庭

家庭の意義を一層深厚にすべし——改良されたる有別意義は男女交際の作法——女子の貞操——自由戀愛——家庭は更に合理的に内秘的なるべし——夫唱婦隨——男子の貞操と親切——女子の守刀——克己節制の基礎上に天真爛漫

さて諸君。いよゝゝ家庭論に入る事となつたが、中島の家庭論は若い人達から嬉し涙を流して難有がられるほどのものではなく、さりとては又老人達から歓迎されるやうな説でもないのである。東京邊りのニキビ盛りの青年からは『中島の家庭論は存外古臭く吾々の爲めにはなつて呉れぬ』と云つて非難された位だから、そのおつもりで聞いて頂かぬと私が迷惑する、又も聞きになる諸君も失望される。

百年も前のお話をすると、社會の女子に對する感想は此んなものであつた。何うもこの女子と云ふものは、ツマラヌ者で、いくら教育を受けても其

女子と修養

教育の力が至つて淺薄で、場合によると有害である。と云ふ證據には人の妻となつた當分こそは殊勝らしくしてゐるけれども、漸々と月日がたつに随つて、地金が現はれて來て横着になりたがる者だ。朝寐をする。晝寐をする。黙つて置けば仕舞には夫に向つて『妾少し頭痛がするから御飯を炊いて頂戴よ』などと、夫を召使扱ひにするやうなものもある。それだから昔は女子と云ふものゝ頭を無暗矢鱈に抑へつけて偏に横着な心を起さぬやうにして、お前達はコンマ以下の人間だぞと、男からも社會からも卑しめられて居たのだ。今日ではそんなツマラヌ女子は一人も半人もないのであらう。皆んな天晴一人前の人といふ自覺を有つやうなられて、教育も次第に盛んとなつたのは實に結構である。からして假令九尺二間の棟割長屋の裡と雖も、女子はみだりに自らを卑屈にせず、此所にも我日本帝國の精華を發揮させると云ふ事になつて來たのである。成る程たゞモウ家の内に引込んで居て子供を生む道具となつてゐてはつまらぬ。大に人の本分に鑑

みて家庭を根城として内外に向つて活動しなければならぬ。即ち男女同權たる可きものであると力味返る婦人が澤山出来て来た。此の氣運は邦家の爲め賀すべきであるけれども、中々この可きの通りには参りかねる。随分婦人の中には男優りもあるが、實際の處、教育、修養、自覺と云ふ點から云つても、男子に比して女子の方はまだ淺薄である、更に大憤發を要する。而して其れは男に柄をつくといふ爲めではなく、國民教化の本たる家庭の意義を今よりも高尚にする爲めである。

さて家庭の意義をモ少し高尚にせよ、深くせよと云ふのは何う云ふ意味かと云ふと、これは餘程大問題だ。大問題だが、畢竟は男女關係を一層精神的に合理的に解するやうに、人々の自覺が出来れば解決されることである。然るに不幸にして東洋では此が割合にない。男女の關係と云へば忽ちに肉慾満足、少し上つて子孫生殖、其れ以上は幾何もないやうな有様であつた。それ故異性が近寄りさへすれば、直に其の感想が此邊へ集つて無造作に動

男女有別

物的關係が結ばれるといふやうな傾がある、肉慾に對する節制がない、其の結果に關する知慮が乏しい。ソコデーも二もなく嚴重に其の中を隔てるより外に仕方がなく、遂に彼の『有別主義』といふ教が出来て来た譯である。

本はと云へば、餘り男女關係を動物的に見過ぎた爲め、従つて家庭といふものも當然高尚ではなかつた。然るに西洋特にアメリカなどでは餘程男女交際が自由で、夜間でも年若い男や女が、月光清く水の如く流るゝ公園などを共々に散歩してゐるのを見受けるやうであるけれども、先づ先づ間違ひはない。青年男女が他人の居らぬ處で長椅子に倚つて小説を讀んで居ても決して間違ひはないといふ。その理由はいくらもあるが、要するに彼等には人たる所以の自覺が深く、此の深い自覺に従つて節制もし、知慮も運らし、又社會も青年男女に左様することを要求して、若し之を實行しないものがあれば、斷乎として嚴しい制裁を加へるといふ風俗がある爲めであらう。個人の修養と社會の制裁と甘く相待つて、此やうに行くのであ

るが、修養も制裁もない人と社會が忽然之を摸倣するといふ一段となると大弊が生ずる。現代の青年が之を誤解して西洋の型をその儘のみ込んではいかん。さればと云つて昔の型其の儘では逆も行はれない、女大學を見ると中々六ヶ敷いことが書いてある。例へば男女の衣裳を同じ衣桁には掛けるなどか、箆筒の抽斗を一所にするなどか、手から手へ(男女が)直に物品を渡してはいかんとか、家の内を手燭をもつて歩くとか云ふのだが、私の家やうな大きくない家は燭をつける間にはモウ裏口へ出て了へる。男女七歳にして席を同うするのは悪いと云つてあるけれども、近日のやうな時世ではトテモ行はれん説なので、例へば瀛車に乗つた處で、客車内に婦人が居たら男子は着席する事が出来ずに旅行は出来ぬ事となる。其れ故理論的に西洋のハイカラ型と日本の極端な非ハイカラ型との關係を論定しやうとすれば、先づ青年男女の修養と社會の習慣、制裁の整頓するに従つて、此れ迄の有別主義、拘束主義に改良を加へて、モ少し自由に接近させるやう

にするが可いといふことにならう。併し修養は、勿論學校で書物を讀んで忽ち出来ることではなく、社會の習慣も中々急に改められるものでないのみか、男女の間は天性上接近し易いもので、餘程立派の人でもツイ間違の起り易い所であるから、下等の情慾の奴隸とならないで常に高尚の理想を追求しやうとする男女には、青年期のみならず、幾分の有別主義は必ず長く保留されなければならぬ譯である。西洋では自由であるとはいふものゝ、よく實際を調査する時は、決して放埒のことはない、矢張有別主義は行はれてある。して見れば日本などでウカと其の外形を見て自由主義、解放主義を取るなどは危険極まることである。實際の點から考へれば、著しく行はれ難い節々を除いて、従前の有別主義が男女交際の方法として、今日に適したものと云はなければならぬ。

ソレニ貞操は男女共に大切なこととは言ふ迄もなく、特に女子は貞操の純潔を殆んど其の生命とする、如何に學問が出来、藝能に達者であつても、此れ

男女の貞操

がなければ到底家庭の主婦となつて次代の國民の品性を陶冶するといふ大任は受持つ譯に往かぬ。よし家庭の主婦とならず、學校の教師となつても、純潔の徳のない唯だ物を教へる器械たる人は、人物上に感化を及ぼす能はぬのみか却つて悪影響を與へるから、此の職に在らしめる譯にも往かぬ。ツマリは捨てるものとなつて男子の玩弄物位になるが關の山である。否、な更らに貞操の純潔ばかりではない、貞操の純潔といふ好い評判も失はぬやう、實も名も兩つながら完全でなければならぬ、假りにも浮名を立てられるやうでは十分の婦徳があるとは云はれない。昔しローマの皇帝ジュリアス、シーザアの妻が會て或る人と怪しい關係があると云ふ噂さ——ホンの噂さが世間に流布した。實際調べて見ると虚偽であつた。處が、シーザアは直ちに此れに三下り半を與へて了つたので、世間では餘りシーザアのやり方が殘酷であると言つた處が、シーザアが答へて云ふのに、他の人の妻ならばイヤ知らず、假初にもシーザアが妻と云はれん程の者は、よしや噂さな

嚴格な風儀

りとして許しては置けぬ、『シーザアの妻は嫌疑以上でなければならぬ』と云つたさうだが、さもあらうと思はれる事である。諸君は何れもシーザアでなければならぬ、又シーザアの妻でなければならぬ。火の無い所に煙はたぬ、煙さへもたてぬやうに注意して、世人から一點の非難だも受ける事のないやうにして貰ひたいものである。然るに今日我國の狀態はと見ると、自然主義と云ふ汚俗弊風が盛んであつて、六十歳の出齒龜も輩出する位であるから、予は七十歳以下の男女は昔の規則その儘とはゆかないが、少なくとも此の點で嚴肅な精神を失はぬやうありたいものだと思ふ。

以上を概括して言ふと、今日の時代に於ては大體において男女間の交際は有別主義にやつた方が間違がなうて濟むであらうといふことになる。或る人は古る臭いといふであらう。併し永らく有別主義の教訓習慣の結果一種の遺傳であらう、予は唯だ何うも日本人には動物的銳感性があつて困ると思ふ。女と男とが接近するとお互に何となく下等なる劣情が發動

する人々が少くない。ともすれば下劣なる情慾が起つて遂に汚たない交際となつて了ふ事實は遺憾ながら否定する反證を有たない。つまり日本の男女と云ふものは交際と云ふ事よりも異性に對する情交と云ふやうな方面へ力を入れすぎる。西洋の男女は交際をしても中々戀愛談などは話題に上せぬ、萬一男からイヤラシイ事でも云ふと、女の方で生涯近づけぬ事にしてゐるからいつまでも純潔な交際がつゞけられてゆく。日本の女子はさうではない。男の方から何かフザケた事でも云ふと、『オウいやだ』なんて口さきでこそ擯斥してゐるが、心の中では『モツと澤女話して貰ひたいものだ』と思つてゐるのも少くないらしい。今日我國の青年が口にする自由戀愛と云ふものは、或る一種の慾望をお互に満たす事が出来るか何うかと云ふ事が主位となつてゐるのが多い。どうも日本の青年男女には此點で餘り多くの信用を置く事が出来ない。大學教育を受けた男女でさへ過失が起る位なのだから、他は一般に知るべしである。勿論戀愛其物が悪いの

ではない。もし青年男女が相對して此の感情が起つた時、人たる自覺を有ち、冷靜なる理性の判斷と云ふ事があつて、互に其血統は正しか、生涯の苦樂を共にするに足る人間か否か、それから自分の身にとつて、家にとつて、社會にとつて、國家にとつて何等の弊害をも及ぼさぬのみか、却て大に之れを利用するといふ事を考へて、それで如何にも大丈夫と云ふ事がシツカリ分つて了へば、一所になつても差支へがない。しかしこの事は餘程意志の訓練がつんで居らぬと失敗する。結婚した後になつて、男も女も互に『思ふたやうなものぢやなかつた』と云ふ後悔が出るやうになる。で、その揚句の果が夫婦別れをする、つまり是れは情慾に基いて一所になつた結果なので、感情に趨つた爲めに失敗したのだ。世の中にも『惚れて通へば千里も一里』とか、『好いた人の痘痕は笑歴に見える』と云ふ俗諺があるやうなもので、たゞ『二寸あの人』は容子がいゝと思つた、その一瞬間に夢中になつて了ふからいかんだ。理想的の婦人が愚かな夫を持ち、賢い男が愚かな妻を娶ると云ふのは、

つまり慎重なる考慮が乏しかつた結果に外ならぬ。高等の教育ある人でも間違ひが多いのであるから、世上多くの人々では間違ひのあるのが當然と思はれる。何をいふても突飛な變革は尤も避くべきで、漸進主義でソロ／＼改良を加へて行つたならば其の中必ず立派な風俗をつくる事が出来るに相違ない。今俄かに西洋式特に米國式にやらうと云ふのは思ひもよらぬ。比較的風俗の淫靡なりとしてある佛蘭西でさへも、未婚の少女は決して一人外出する事はないさうだ。(尤も下等社會ではさうもゆくまいが)一寸太物屋へゆくにしても母親がついてゆく。そして男の客が來て居ると、母はその中間に席をとつて娘と男とを並べぬやうにする。モシ男の近くに自分の好きな太物があれば母親にとつて貰ふか、さもなければ、母の許しを受けてから自分がとりにゆく位で、中々男と一所に飛んだりハチたりするやうな事は出來ない。夜間女一人て巴里の町などを歩いて居るならば、それは賣春婦だ。男と女との感情の間には嚴然と規則がたつて居るので、

中々日本のニキビ盛りの青年が考へるやうなものではないと申す。

日本の家庭——殊に女子は、モ少し合理的にならなければならぬ。立派な女子もあるに相違ないが、數の上から云へば東西同じく不健全なる思想を有してゐる者が多い。それに日本には古來何となくハツカシイとか云つて初心を貴ぶ癖がある。成程初心と云ふものは結構だ。スレカラシよりも初々しい方が可いのは知れきつてはゐるけれども、初心のハキ違ひは御免蒙りたいものだ。女が男に少々思召しがあつて、それを口に出して云ふのは未だ惚れ様が薄いので、本眞に惚れたのはサツと顔に薄紅葉でも散らして、口では何とも云はぬと云ふのだなど、世間の男が思つて居るものだから、餘り伶俐でない女などは何でも初心にやらなければならぬものだと思ひ込んでゐるらしいが、そんなことでは今日間に合はぬ。尤も男の方でも、あの人と一所になつて食へるか食へぬかとか、意志は強いだらうか、又は弱いだらうか、趣味は高尚か、それとも下劣であらうかと云ふ風に、解剖

的に考へるやうな女は餘り虫が好かぬらしい、何だ結婚をするのに利害得失を考へるやうな女は不可と云て排斥して丁ふ傾がある。が、此の男の考も舊式過ぎる。舊式同志の寄合は、一寸イキ姿か何かを見てすぐ様夢中になつて了つて、ナニ世間がグズ／＼云へば二人手に手をとつて、山の奥へても行つて『竹の柱や萱の屋根』の家庭を作つて見せるなど云ふ風があるけれども、サテ果してそれを實行して永持がするか何うかと云ふと、それは甚だ疑はしい。金は何うするか、飲食物は何うするか、一日二日は芋でも嚙つてやつてもゆけやうが、どうしてソナ無意義の生活をやつてゆけるものぢやない。もし生涯そんな真似をして居れば人間ぢやない、鹿か熊だ。掘立小屋に住んでゐて神聖なるラブもよく出来た。動物の雄と雌とが唯だ鼻を突き合せてゐて何が出来るものか。此の如くにして紳士たり、淑女たるの體面が果して保ち得るものかどうか、論ずる迄もなく保てないと云ふことは知れてゐる。米國大統領のルーズヴェルトが常々崇拜して居る英國

のレツケイ先生は、『子女の教育の出来る見込がなくして結婚するは一種の罪惡である』と云つてゐる。即ち子供を教育して善良なる國民を作り得るやうな經濟的基礎をも作る事を期待せよと云ふのだ。女でも再婚すればその價値の幾割かは割引されるのであるから、よく／＼將來の事を考へた後で結婚するやうにしたがよからうと思ふのである。が、私が婦人だからとて相當の見識を有てよと云ふのは、決して十萬二十萬の財産のある家へ婚嫁せん事を希望せよと云ふのではない。兎に角今日どうか此うにか暮向が立つて往つて、それで少々の餘裕があつて小供を學校へ入れる事の出来る位な家ならばそれで可からう、夫婦共稼ぎの境涯實に無上の樂みなりとしなければなるまい、唯だ結婚は重大の事であるから十分の知慮を運して悪い所でなく、却つて大に運らさなくてはならぬといふのである。が、其の一々の箇條は今畧して置く。

日本の家族制度には善良なる特長もあるけれども、又一方から見ると、夫

更に内秘的
なるべし
の
小説談

婦間の熱情の乏しい處がある。其の原因は色々あらうけれども、重なるものは家庭特に夫婦間に内秘的といふことが缺けて居る爲めだと思ふ。それについてこゝに面白い一例がある。それは彼の露西亞の文豪のマキシム、ゴルキイと云ふ人が作つた或る小説の中に書かれてゐること、ロシヤの或る都會の最下層の貧民で、穴倉に住んでゐる夫婦の生活状態を描き出したものである。亭主はウツカとか何とか云ふ激烈な酒を呑んで毎日グデン／＼に酔つて了つて、仕事にも何にも出掛けない。それをキカヌ氣の女房が怒鳴りたて、仕事へ出掛けさせやうとする。毎日のやうにこの夫婦が喧嘩を初める。或る日此の醉狂せる亭主は『何をこのお多福奴！』と鐵拳を振あげて女房の横鬢を叩きつけたので肉が破れて血が流れ出した。女房は亭主の權幕が猛烈なのに驚いて、家を飛び出して公園の方へ逃げて往く。その後から怒り狂うた亭主が追かけてゆくので、近所の人々が見るに見兼ねて亭主の腕を引捕へて『まあ／＼』と押なだめてゐるのを、件の

女房が眼に入れるとビタリ立止つた。どうするかと見てゐると、鮮血淋漓たる顔をした女房が、仲裁をしやうとしてゐる近所の人々に向つて『お前さん達は何をいらぬお世話をお焼きた。私等二人が夫婦喧嘩をするのに、他人のお前さん達が出しやばるには當らんぢやないか。さつさと彼方へひッこんでお了ひ』と云ふ所がある。何とマア恐ろしい山の神様ではないか。『どうもお世話をかけて相濟まぬ』とはお禮を云はないで、『いらぬ世話をするな』とは強い御挨拶のしかたではないか。併しながら大抵夫婦の間柄のことは夫婦が片付ける、而して他人の世話にならぬ家庭は内秘的ならざる可らざるものであるといふ家庭の組み立て方としたならば、是もよからうと思ふ。此の夫婦は假令喧嘩はしても、情愛は濃い筈である。それに比べ、日本の夫婦仲といふものは、アツサリしたもので、夫婦喧嘩をした時には態と大きな聲をして隣りの小父さんに聞かせて、仲裁に来て貰はうと待ち構へてゐる。こんな事では小父さんとの懇意が出来ても、夫婦間の熱情は

起らないのが當り前である。古來婚禮の式を上げた後三日目に、里歸りと云ふ事をする習慣となつてゐるが、その時に嫁さんが何を云ふかと思ふといろ／＼と片付いて行つた先方の事を喋舌る。旦那さんはこんな人だとか、舅父さんはイケ好かない人で、姑母さんは意地の悪いお方らしいとか何とかソリヤ飼猫が尻をひつた事までもベチャクチャ／＼喋舌つて了ふ。それを又聞く相手の母親が『オ、そうかい／＼』と感心して聞くから母との愛は衰へないが、一向夫の家の者との愛は養はれない。『私は貴方のために殺されても、それでもこの廣い廣い天地の間に頼りと思ふのは唯だ貴郎も一人の外はない』と云ふ熱烈炎の如き愛情があつたならば、決してそんな悪い影口がさけぬ筈であるのだ。一升の愛情があつても親や兄弟へ夫の悪口を云ふと一勺二勺とその愛情が減つてゆく。又夫の方でも其の通り、妻の一身に關する事柄と云ふものは、漫りに妻以外の者には話さぬやうにする時は、自然妻が己れに對して深い情愛を有つ譯である。而して日本主義

を執る可きか西洋主義をとるべきかと云ふと、私は此所の所は西洋主義を參酌して日本主義を補ふが可からうと思ふ。尤もこれは私がさう思ふので、決して斷案ではないから宿題として諸君の研究を求めて置く。あの英雄崇拜論を書いて有名な文豪カーライルが、此れも文學趣味の深いウエルシユ嬢と結婚した時には、夫人の父は亡くなつて母のみであつたが、夫人はカーライルに向つて、『私の母は財産上貴郎の御厄介にはならないけれど、せめて一つの家庭に生活させて下さいませんか』と切に願つたけれども、カーライルは斷乎として、いや折角の願望ではあるが『家庭は異分子の混入を許さな』と云つて謝絶した。夫人の母は遂に別居する事となつて了つた。いかに最愛最慕の母なりとは云へ、家庭に同居を許さぬと云ふのは、日本の風俗から見ると大に奇異に感ずるけれども、彼の國の社會では却て『カーライルは實に立派なる所置をした』と感嘆され賞讃された位で、かくの如く家庭は眞に内秘的であつて、始めて彼の濃い濃い情愛の家庭が作られるの

である。西洋は個人主義の家庭で、日本は家族主義の家庭で、既に組織の根本が違つて居るが、参考として裨益を得ることが少くなからう。凡そ社會の制度は急進を許さない、且つ日本の家族制度の特長は失つてはならぬ。カーライルの處置を今直に日本に移すことは考へ物であるが、兎に角此の精神を加味することは出来ぬことはなからうと思はれる。

言ふ迄もなく、いかに私が家庭は内秘的なるべし、夫婦の愛情は濃やかなるべしと云つたからと云つても、夫は一般論で、所と場合とは何處でも考へなければなるまい。例へばよしハイカラ主義の家庭が善いとしたにしても、此所に一對の夫婦があつて、歴史的の事情や土地風をも顧みないやうでは宜しくない。未だ昔風の殘存してゐる所で、夫婦が互に手と手をつないで散歩すると人の眼につき易い。それは未だしもハイカラ髪の大リボンの奥さんがデレ／＼して時々旦那とキッスをするなどは正氣の沙汰とは思はれない。第一他人様の眼ざはりになる。町の人などが「ア、あれを見

夫唱婦隨

よ、ハイカラ女が亭主の頬をナメた、ナメた』など、來た日には、迎も町の風紀は保たれなくなつて來る。風儀警察上こんな事は許されぬ。『郷に入つては郷に従へ』で、昔風の處ではやはり昔風にやつて、それにカーライル主義の幾分かを加味したらよからうと思ふ。それで婦人の教育が進むと女子の權利が進んで、男女同權説などもソロ／＼出て來るであらうが、しかし我國古來の家庭の大原則とする處は『夫婦婦隨』であつて、牝鶏の晨を告ぐると云ふ事は最も嫌ふべき事になつてゐる。否、我邦ばかりではない。物の分つてゐる者は西洋でも左様である。こゝに一佳話を傳へやう。英國女皇ヴィクトリヤ陛下がアルベルト公と婚儀の大典を擧げさせられた時に、カンタアペリイの大僧正が女皇に向つて『陛下。只今御誓言を遊ばさなければならぬのでございますが、一般の男女であるならば夫婦婦隨を誓ふ事になつて居りますけれども、陛下は實に大英國の君主に渡らせらるゝのでございますから、陛下のみはさうは参りますまい。如何に御宣誓を遊ばす事で

ございませうか』と尋ねた處が、陛下には玉顔美はしく大僧正を省み給うて『否とよ大僧正！妾は大英國の女皇としては何人の命令をも耳にせぬ。妾が心のまに／＼立振舞ふであらうが、妻女としてはアルベルト公に隨はなければならぬ。之れが人道の大法であるから、妾は普通男女の如くに宣誓する事にしよう』と仰せられたと云ふ。聞くだに床しき想ひがする話である。一天萬乗の陛下すら尙然り、況んや多くの男女は夫唱婦隨を以て常規としなければならぬ。此は實に歴史習慣から來た譯ではなくて、主として天の定めた法則である。

男子に對しても言ふべきことは少くない。元來男子と云ふ者は比較的義俠、武勇の徳を有つてゐる、此は戦争をするのを見ても解るが、この武勇ある男子が女子を遇する一點に至ると、存外勇氣がない。これは一概に武士道の弊とも言へない。前に説明した通り、何事に對しても融通の利く一つの勇と云ふ徳はない。意志と云ふものを其れ其れの事に働かせて其れ其

男子の家庭
道徳

れのこととて鍛錬せぬと、其れ其れの勇は養はれぬ。戰場で勇氣無雙の士でも、其の勇は酒とか女とか云ふ方面には存外効力が薄い。酒や女には幾分特別の勇を養はねばならぬ。『どうも見掛によらぬ人だ』と云ふ俗諺のあるのは此の爲だ。しかし是を見て、その人の全般を評して了つてはいかん、過失と云ふものは誰でもある。少しも過失のない者は又たエライこともせぬ輩だ。大人物には過失はあり勝ちだ。何も過失の獎勵をするのではないが、人生は失敗の歴史だ。この失敗に省みて前途にすゝむのが眞の大人物である。獨逸の文豪ゲーテが『人として過失なきは大人物にあらず』と叫んだ。石橋を叩いて渡るやうな人間はトテモゑらい人間にはなれない。昔の武士に『英雄色を好む』の過失あつたことは、勇氣ある英雄たる資格を害しないが、併し度を外れて色を好むは慥かに、武士の一過失に相異なる。言ひ換へれば、近代的、大人物として許されやうとすれば、戰場の勇士は、又情慾に打勝つ、勇士でなければならぬ。女子に向つて貞操を強ゆる如くに男

子も亦た貞操を守らなければならぬ。而して之を守らぬは矢張眞にエライ人といふことは出来ぬ。幸ひ此事は近來一般の輿論となり、次第に實現の拂になりつゝあるやうに思はれる。が男子の過失といふものは此外にも多く、又た容易に改め悪いもので、私なども實は今少しハイカラとなつて女房の働と美德とを認めて賞めてやるが至當と思つて居るが、扱て改まつて我女房をほめ立てると云ふ事も異なるものでキマリが悪い處がある。とても西洋人のやうに無遠慮に賞めてやる事が出来ない。マアしかしそれは言葉に出して事々しくやらないまでも、何か御馳走でもして呉れた時には「ア、これは好い加減に調理が出来た、大變口に合つて甘い」とかなんとか云つてやれば、女房の嬉しさは莫大なものだらうと思ふが、其れも中々言へない。忠告をするにもその通りで、成たけ口には出さずに顔色位で悟らせるやうにするがよからうが、今多くの家庭では依然として荒々しい言葉遣が行はれる。然るに實際夫婦は互に賞められ戒められて家庭の空氣が綺

麗になるので、書家などは妻が一片の賞賛のために大に感奮して立派な品を書いたと云ふ例がある。これは或人の自白だが——其の人が妻を迎へた當分の事であつた。元來富裕ではない身分であるから、其の日の日にも困つて徹夜して原稿を書いた事があつた。或る晩其の人は一枚五十錢か七十錢かの原稿を二三十枚も書き上げて一服した時、もう寝たらうと思つてゐた妻は丁と背後に坐つてゐて、——一體其の人は女房にヤサシイのであるから——書いて了つてから妻は其人に向つて「貴郎は實にエライお方で、妾ホト／＼感心致しました。貴郎の頭の中は思想で一杯になつてゐるんでせう」と賞めて呉れたが、その時其の人は涙がこぼれる程嬉れしく、「げに持つ可きものは女房なりけり」と感心したといふことであります。今の妻には此のことが有り得るが、今の夫にはなかく、こんな位に妻の功績を認めてやることは稀であらう。併し男が女の功績を認めるに吝なるは決して男の名譽ではない、むしろ明らかに之を認めるこそ眞に智仁勇の將

男子の風行
に對して

たる器と云ふものであらう。

數へ立てれば今日の男子に望みたき事は中々多いが、其中の第一は貞操で、女郎を買つて悪い藝妓を買つて悪いと知つて行ふのは、第一に其人の意志力のないと云ふ事を示すのである。根性の腐つた人で、こんな人が會社の役員になるとクダラヌ感情のため賄賂をとるとか、さまざまの悪い事をする。又男子の貞操を守らぬことから、惡疾を受け繼いでそれを子孫に傳へる。若し女子の貞操が大切ならば男子の貞操も大切だ。女大學には男の不貞操について少しも妬むなど書いてあるが、それは程度問題だ。焼餅をヤクと云ふ事は善い事では決してないけれども、ヤカざるを得ぬ時には焼くのもよい。尤もそれを下手にやつてはいかん、上手にヤイテ貰ひたい。餘り夫に對して博愛主義で、へ、ラ、笑つてゐると自分一人の不幸福のみならず、一般の女子並に夫に對して悪い影響を與へて了ふこともある。女子の權利は守刀である。これはムヤミ矢鱈に引抜く可きものではない

が、最終の手段としては已むを得ぬから引ぬいて何んとか片をつけなければならぬ場合もある。新聞に出てゐたから御承知でもあらうが、東京の某博士——學者としては名高い人でこの方面の意志力は十分あるんだが——この博士先生は自分の理想の夫人を貰つて三人の子までなした中であるにもかゝらず、下女に手をつけて何人も、子供をこしらへた。で一番後の下女は大變お氣に合つたものと見えて、博士先生は「お前は雑巾がけや掃除などをせんでもいいから、お湯に入つてお化粧をして綺麗になつて俺の歸るのを待つて居な」と云つて學校へ出てゆく、スルトその下女は未だ夫人も入らぬ前から湯へ入らうとする、夫人が「お前は何故そんなことをするのだエ」と詰られると、下女は「だつて此れは旦那さまの御命令でございますから」と云つて、夫人の命令はきかぬ。サアこんな時こそ實に危急存亡の秋であるから、守刀を引き抜いて毅然たる所存の程に出れば可いのに、博士夫人は女大學の文字にあてはまつた通りの貞淑溫良の方であるか

ら守刀の鞘を拂ふ勇氣を出さないで、遂に不愉快な苦痛な煩悶の後お里へ歸つて了つた。此夫人は貴族の子弟を教育してゐる或る有名な女學校を卒業された才媛であるといふ。先づこの夫人は得心の上で獻身犠牲となられたにしても、考へて御覽なさい此の先き第二、第三、第四と博士は夫人を拵らへて行つて殆んど底止する所を知らざる不行跡を重ねるに違ひない。其れは小督の曲に唱つてある通である。して見ると此の博士先生幾つまで生きてゐるか知らぬが、まあ七十位迄壽命を保つとして幾十人の婦人をして斷腸の思あらしむるか知れない。其れを第一の奥様が守刀を抜いて、初めてるとき夫の不正を正したなら、第二以下の似而非奥様達に同様の苦痛煩悶をさせずに濟み、又自分も小供も、更に旦那様自身も眞の幸福を得られたであらうに、唯自分を無意義に引き退つたのは、いかにも残念至極な話ではありませんか。若し夫が愈々不正行爲で己と子供とを苦しめ、家庭を破壊するやうな危険があつたなら、其れこそ一大事であるから、苟も社會の

理想的家庭
の要件

習慣、法律の保障がある以上、己の權利を主張して、即ち己れの守刀を持つて男子の悪行を止めさせるが可いのである。私は民法の事はよく知らないが、つまりこんな場合には是非夫が離縁を強るなら、夫に對して三萬圓とか五萬圓とかを出せよと要求するがよいのである。此れは單に自分の利益勝手から割り出してのことと斗りてなく、又た一般に女性のため社會の爲めにもなる、正義の行はれるは誰が見ても結構なことでないことはない。此點でモ少し日本女子が強くなつてほしい。

又男女でも色慾のために結婚するのはその家庭の失敗の本である事を知らなければならぬ。十七八から二十四五まで、その色慾の發動を抑制すると云ふ習慣をつけなければならぬは勿論である。カーライルも其の日頃戀ひ慕うて居つたウエルシュ嬢から突然結婚を諾された時に、『お前は色慾の要求で私に結婚をゆるしたのではないか、それではいかん』と注意して、いよく左様でない事を確めて結婚をしたやうに、家庭を作る迄には、餘程

克己節制の準備を入用する。ヴィクトリヤ女皇はアルベルト公の申出に對して、御身の妾と結婚するは多大の犠牲である。妾は何を云ふても大英國の女王で、御身は自然日蔭者とならねばならぬ、男子でありながら椽の下の方持ちとならねばならぬ譯である。此の多大の犠牲を御身に拂はせるは妾の甚だ氣の毒と感ずる所であるが、御身はよく之を忍耐して下さる決心が御座いますかと、柔しく譲つて念を押して始めて結婚を承諾された。理想の家庭はナマヤサシイ骨折苦勞で出来ることではない、種々の材能と種々の美德が其の地盤となつて始めて宏壯美麗の大建築が其の上に立てられるのである。が併し十分材能ある人々が、一旦之を築き上げた以上は、其所には秋風肅殺の氣があつてはならぬ、寧ろ春風駘蕩の趣がなければならぬ。『左様然らば式』で持ち通すは如何はしい。心には堅い骨が透つて居ても、始終ニコニコ然であつてほしい、先づ天真爛漫で、互に心置きなく語り合つても、もし腑に落ちないことがあれば、誰れに遠慮があらう、互に胸のすく

やう成るべく他人に迷惑をかけぬ限りにおいて、夫婦間にて何とでもして解決をつけるが可からうと思ふ。飽くまで誠意實意があつて又飽くまで愛情がある以上、これに幾分の敬意を交へて思ふ様振舞つて可からうと思ふ。年が年中晴天續きといふ氣象もあるまい、風も起り雲も出て雨も降るであらうが、愛敬誠で出来上つた家庭には、其れは唯だ天地自然の化育を賛ける爲め生ぜねばならぬ諸種の變化に過ぎないで、全體に於て和氣洋洋花笑ひ鳥唱ふといふ極樂世界が現はれるであらう。

第九章 應用各論(四)

親子

孝の形は變ず可し——親は子を私有物視す可らず——子の自由意思を尊ぶ可し——今日に處するの道は、親に對しては其利益の限り舊俗に依り——子に對しては新道を以てす可し。

昔の家族制度では兎角親の權柄が強過ぎて、それがため子供の發達を阻害する傾向がある。それではよろしくない。各の人の天職本分を盡し、而かもそれを妨げずしてその發達を助長せしめるやうななければならぬ。だから親が矢鱈に威張すぎるのはよくない。随つて孝行の形態は昔よりも少しく變へて、子の個人性をヨリ多く認めるやうにするが可いのである。東京などでは高位高官の人でありながら、金が澤山あると云ふので、我子を出來るだけ立派に——精神意思の立派ではない——徒らに華美な衣服を着させて世間の馬鹿から『まあお綺麗な』とか『大層いゝ御召物です』など、

子供は私有物に非ず

云はれるのを喜んでゐる人があるが、これも謬見である。未だ教育の時期に在る子供に對しては、友仙縮緬や何ぞ餘り華美な服装はさせぬがよい、否させてはならぬのである。そんな事では親が我子を自墮落に陥して、了ふ。子供は自分の玩弄物ではない、親が世に高慢する爲めの生きた道具ではない。なんでも自分の位置や金力を見せびらかす爲め、又一つには子供の喜ぶやうにといふ方針で、有るに任せて美服など着せるのは、經濟上は兎も角も精神を臺なしにして仕舞ふ。それ故たとへ我子なりとは云へ、決して私有物視してはいかんで、全く我が子は、天皇陛下のものだ。日本帝國のものだ、たゞ生みの親はそれを預かつてゐるに過ぎぬのだと思つて、精々子女の教育に力を盡さなくてはならぬ。我が子も社會國家のものだといふことは空想ではない。昔希臘では子供が生れると直にそれを國家が引受けて教育したものである。又財産とてもさうで、昔は一切の富を國家が所有して居つたこともある位で、今でも其意味は残つて居る。私有財産とい

ふものは、一つには又公有の意味のあるものを國民がみんな分けて預かつて居ると見ても可い。便利上金と云ふものは私有物とされてゐるけれど、それだからとて有るに任せて湯水の如く費ひ果して可いと云ふことは決してない。即ち一切のものは私有物に非らずして社會國家の所有にかゝるものであると云ふ考へてゐれば、先づく間違ひはあるまいと思ふ。我子を我家に頂つてゐるのは、天皇や國家に對する重大なる責任なりとの感念を確守しなければならぬ。凡ての事物に對してこの考でやつて頂きたい。先日この會場へ見えた西洋の婦人(ミス、ゲンス)が頭にしておられたあのボンネットを見ても、あれは古いものだ。西洋人は決して浮華を好むものではない。然るに日本人は兎角に新しいもの／＼と趨うて、一寸外へ出るにも宮内省の官吏が御殿にでも登る時のやうなキラビヤカな服装をしたがるが、よくない事である。私は日本の女子が十三四になると、モウ腰を撫てたり頭をイチツタリして妙に嬌態をつくるのが大々嫌ひである。

眞の孝

いづれ衣服の改良と云ふ問題も來るに違ひないが、いかにも教育盛の娘の帯一本で三百圓も五百圓もかゝる様な事では困る。寧ろ極端に其の反對に出で、少くとも教育期のお嬢さん方のリボンや簪などは止めた方が可いかも知れぬ、兎に角質素の趣味風俗にしたいものである。そうすると子供の方では、もう身に着けたもので、外から親の力、金の力で着けた金箔の爲めにモチヌやうなるから、自然憤發心を起す、學問藝術品行など其れ其れ勉強して材徳を修めて、社會の人々の尊敬賞賛を得やうとするやうになる。而して此やうに實力を養ふことは、決して富貴のお子さん方の爲めにならぬといふことはない。此の點でも西洋人が我れ等よりも一段優れた見識と好い風俗とを有つて居ると思ふ。

子を育てるは骨の折れる仕事であるとは今更言を待たぬ。親の心配苦勞は實に察するに餘あることである。併しながら世間では其れ程の心配苦勞は何の爲めにするかと問はれると、老後の助になるやう、死に水を取つ

て貰はれるやうと答へる者がある。此は至極尤な申分であるが、前述べた通り、我が子を私有物としてはならぬ、我が子ではあるが、又同時に社會國家のものであるといふことが正しいとしたならば、子を養育する目的は其れ斗ては足らぬ、寧ろ其れ以上貴い目的として、先づ第一に我が子が他人社會に迷惑をかけざるのみか、却つて其の利益幸福を増進し得るやうにと育てぬは、物の解つた遣り方ではないことが知れる。我が子は親に柔順で親切であるやうにと願ふことは勿論であるが、同時に夫に對し隣人に對し一般世人や國家人類に對して不正不仁であつてはならぬ等である。もし社會國家に對して不爲めといふやうの場合であつたなら、幾分親には不利であつても親たるものは其れを忍耐せねばならぬ。譬へば親の情としては、何時迄も我が子を子供らしいやう、甘へるやう、場合によつては、世間知らずにしておく方が氣持が可いこともあらうが、其れは畢竟親の勝手利己と云はねばならぬ。世間で往々孫とは仲が可いが、子とは折合はぬといふ諺も

あるが、此は親たる者が自分より劣つた弱い子供の外、獨立の一人前の人に同情することの出来ぬといふ弱點を有つて居ることを示すので、知慧の足りない勝手利己の多い一證據となりはすまいか。廣い世間には固より分つた親々も少くはなからう、併し中には随分親の權威を笠に衣て、無法に威張りたがるもの、自分の勝手に目標として子供を育てる者もある。親の飲料を取る爲めに醜業婦にさせたり、樂隱居をする爲めに苦役に服させたりするのは、假令我が子の得心があるとしても、本人及び社會に對して相濟まぬ次第である。又其れ程でなくとも、老夫婦が若夫婦の厭きも厭かれもしない好い仲を、生木を割くやうに割いて仕舞つたりするものもある。元來財産を持たない嫁が、此れも矢張財産を作らない、寧ろ作ることに出来ない夫に片付いて、唯だ父母の勞働の蔭で、殆んど濡れ手に粟といふ工合に、親の譲りを受ける若者供もある我が邦のことであるから、大體の仕組みとして親に多大の權利の付いて來るは當然のことであるが、左ればと云つて隨

親子の衝突
解決に就て

分無理なこともあるは事實である。其れも此れも畢竟は親の子をもうけ、之れを育てる第一の目的は、先づ其の子を一人前の人、獨立自由の人となすにあるといふことが明らかとならぬ爲めである。孝行は我邦古來の大法で、子たるものは何處迄も之れに背いてはならぬが、孝行の大切なる所以は、單に其れが親の爲めといふ斗りではない、廣く社會國家の眼から見ても、大切な行であるから、眞の孝行とは、詰り人たるの道を以て親に仕へるといふことの外にはない筈である。世の親たる者は、此の點で餘り少しの働を恩に衣せて子供をイジメ又は嫁をイジメぬやうありたいものである。が、此れは私が自ら子供の親として意見を立て、見たまで、私は子たる者が右様の理窟を以て親に臨んで可い、其れでも孝行たるを失はぬとは決して言はぬのである。假令當世稀れな、分つた親があつて、私は子供に對して何等の恩義も與へて居ない、唯だ親たる義務を盡した迄である、何等の報恩を求むることはしないと云ふ者があつたとして、扱て子たる者が、ハイ左

様でございますか、ソレナラ私は私の勝手に致しますと答へたなら、誰れでも此子の薄情忘恩を憎まぬことはなからう。左様言はれ、ば尙ほ更分つて出られ、ば尙ほ更注意周到に孝行を盡さなければなるまい。道德の眼から見れば、凡ては皆義務である、當然である。親が子を育てるのが義務であれば、子が親を養ふも親の機嫌を取るも義務である。親が權利として子に要求するとしては無理であることが、子が義務として親に盡すとしては當然であることは少くない。分つた親は何と言はうとも、兎に角育て、教へて貰つた恩義の大きいことは全く海山の如しと云つて可い。『子を有つて知る親の恩』で、子といふものは此の點で又甚だ勝手に流れ易く、實際に於ても心安立に任せて親に對しては甚だ我儘な者である。よく此所を考へれば、何人も私こそ十分親孝行をしたなど、大言し得るものはなく、却つて甚だ相濟まぬと感じなければならぬ次第である。して見ると我が存在の本たる親の心を安んじ、楽しくさせ、身體を養ふことに對して何うして申分

があらう。親が威張るのは悪いが、甚しく社會國家を害せぬ限り、子たる者が古來の習慣に従つて、否、其上にも、親に孝行を盡すべきは新道徳から見ても當然のことである。特に今日の親は概して昔の考へて教育されて來た者で、道徳上の知識から云へば、殆んど右様の理窟は一切知らぬのである。其の知らぬ者に向つて、知つた者が先づ我から古來の孝の道にヒケを立たせるといふことは甚だよろしくない。親としての道に改良すべきことがあつたなら、其の實行の期限は殆んど今日、新教育を受けた者から始むべきである。尤も新道徳から云つて、親の利益となるやうなことは即刻行ふが却つて可いけれども、苟も其の不利益となるやうのことなら、自分の代から行ふことにしなければならぬ。譬へば息子が嫁を貰ふにしても、貰つてから後にしても、今日の家族内には随分六かしい問題が持ち上る。青年男女は多く歐化の傾があるに反して、老人達は又悉く之れを喜ばない。青年男女の望では、親の財産だけは頂戴して何うか別居がしたいといふ。親の方

の望では、何も女に教育は入らぬ、金釘流に手紙でも書いて、帳面でも付けられ、ば其れて結構、理窟は言へないでも、昔氣質の親に従順であるやう、オシヤレは知らないでも、親の身上を減らさぬやうと堅く注文する。而して此の急激な進歩派と極端な保守派の衝突は何處でも免れない。が此所である、我輩が前に世の親に對して聊か理窟を述べて其の反省を催して、少し日本の親は威張過ぎるといふたのは、考へて見玉へ、此の兩派は親子として何處までも打協しなければならぬ運命を有つて居るもので、若し談判が破裂すれば、親子共に幸福の得られぬは知れたことである。私の言ひ條を立て、下さらなければ、私は財産も入りませぬ、此の家も續ぎませぬと、子供に言はれても困る親の位置である斗りか、モ一層激しく出られて、家出します、此んな無情な世の中に生きて居りませぬと覺悟され、ば立つても居ても居られぬ仕儀になる。息子を自暴自棄に陥らせるも不利であるし、嫁に入水させるも残酷である。我が身可愛し、息子可愛し、世間も大事と思ふな

ら頑固は言はぬこと、言ふ權利はない、言つてはならぬといふのが親に對する理窟である。が、扱て其れかというて、子供達、若夫婦が調子に乗つてハイカラ主義全勝の凱歌を唱へて可いといふ道理は毫頭ない。假令親が分らぬにせよ、親は親である。他人に對してさへ其幸福利益は謀らねばならぬものを、況して我が身の親に對して其の幸福利益を害して可いといふ道理は萬々ない。意見が違へばよく納得のつくやう、分らなければ分るやう、而して成るべく讓歩に讓歩して親の心に合はするやうするが孝行といふものである。純粹の理窟からは、福澤翁の主張した如く親子別居が可いとしても、我が邦古來の習慣がある以上、親が好まぬ以上、今差向き子が其れを言ひ張るは宜しくない。ソナナことは自分が親となつた時に自分の子に別居を許すが可いといふのである。勿論此れも單に形式上の調和説で、親に向つても子に向つても、雙方互に成るべく多く讓歩するやう勉めるのが道徳だといふたに過ぎない。其れ故此れ位の注意では複雑な衝突問題を一

々解釋し盡すことは思ひも及ばぬのである。畢竟家族間のことは餘り具體的のことばかりで、甚だしく社會國家に影響せぬ限り、最も流々仕上げを御覽じろと言ひ得る所で、抽象的理窟一片で容易に始末のつかぬ、又始末をつけてならぬ事が多いからである。總じて、家庭は、内秘的で、大抵のことは内々でよろしく行るに限るのである。

唯だ何處迄も内々といふ譯に往かぬ。其れ故某る點では民法も刑法も、國家が干渉することもあるし、又輿論正義の標準で裁判せねばならぬこともある。が併し其れは生命財産幸福の大事に關したことである。法律は明文に示されてあるから言ふに及ばぬが、道徳から云つても如何に親であるからとて、餘り無法の要求期望であつたなら、斷然子が峻拒することを是認することは無論ある。家出も宜しい場合がある、親の意に背いて可い場合もある、別居しても可い場合があるけれども、其れは例外のこととして、一枚擧する必要もないことであるが、此やうな大事件に遭遇して日本人が冷

靜に判断することなしに、餘りに輕卒に死途を急ぐ流行は、聊か警告せずには置けぬ。重々親が不條理に不條理をいふ時には、必らずしも死ぬには及ばぬ。自分のもの父母のものであると同時に、又た社會のものである所の我が身體を、輕々しく破滅させることは、重い罪惡である。『命ありての物種』で、己れの良心に省みて、其の大命令に背かぬ限り、假令一時親の機嫌を損ずるとも、社會は其の人に同情を惜しまぬのみか、何時かは親子笑つて仲直りの期もあるに相異なるから、世の青年たる者は、此の點で、モ少し氣強く、モ少し社會的思想を有たなくてはならぬと思ふ。

第十章 應用各論(五)

忠

忠孝一致——直接間接の忠——私人平生の忠は自己に忠なると同じ——吾人は忠勇に就て餘り自負すべからず——外國歴史の忠勇談——非常時の忠の觀念の一轉進、及び其方法——平時の忠また勵まざるべからず。

忠孝一致

此れから團體に關する道徳に就てお話し、やうと思ふ。團體というても、其中には色々ある。其中最も大なる者は國家であること、而して國家并に國家の主たる皇室に對する吾人の本務が忠であることは言を待たない。今細かく國家といふもの、本體を吟味する時は、學者の間に種々の意見があるに相違ないが、我が邦では、古來忠孝一致と唱へて、疾くから國と家と君主と家長との間の類似點を認めて居た。此は眞に道理あることで、國も家も共に單に人々の集合して居ると云ふ斗りてなく、其れを組み立てる人々は、生き代り死に代り、始終變つて居るにもかゝらず、一定の目的を有つた

團體は何時迄も續くものである。家は小さい、其の祭の絶ゆることがある。國は大きい容易に亡びるやうのことはないが、其の形式は眞によく似て居る。前節に親によく仕へることを孝と云つたが、實は、モ少し廣い意味に、孝を解して、先祖の名を辱かじめないのも、孝と云へる、先祖と云へば何れ程古い者も、其中に這入つて居る。して見れば、親や先祖に孝行するといふは何の某と云ふ一個人たる親や先祖に孝行するといふのではない。ツマリ、其れ等の凡てを以て組み立てられて居る家といふ團體によく盡すのが孝なのである。己れが生みの親に盡す孝行の中には、たしかに家の代表者、即ち家長に盡すといふ意味が含まれて居るのである。國といふ團體も亦同じこととて、古來此の日本國には幾千萬億の人々が生き代り死に代つて今日に及んだのであるが、國は依然として神武天皇様の創められた國である。又た今後とても其通り『さざれ石の巖となりて苔のむすまで』數限りない人々が生き代り死に代はるであらうが、左ればとて依然として神武天皇の創め

られた國に相違ない。よく國に盡すべしとは某々の人によく盡すといふことではない、某々の人々の凡てを其中に含んで居る團體によく盡せよといふことである。其れて其の國の天皇陛下、即ち日本國民の父によく事へること、即ち忠は孝の大なるもので、孝は忠の小なるものに相違ない。此の意味で忠孝は一致といふのである。

モ少し立ち入つて忠孝の一致點を陳べて見れば、國家に國憲國法がある通り、家には家憲家風がある。天皇陛下に一視同仁の愛がある通り、親にも亦た無限の慈愛がある。が、若し國憲國法に背くものある時は、陛下は其の至仁の大御心を有たせられながら、尙ほ雷霆の如き權威を以て所有不正を罰し玉ふ如く、家長たる者も其の教訓命令に背く子供がある時は、涙を揮つてまでも之れを折檻する。刑罰や折檻は共に君臣父子の相互の私事ではない。此の私事でない所の併し多く人々の好まない時によると反抗もし兼ねない所の正義を決行する爲めには、國家に陸海軍警察などの有るやう

に、家長も亦た必要の場合には腕力に訴へても其の意見を通す。それからまた國家には祖宗並に勳功のあつた歴代の英靈に向つての祝祭があるやうに、家にも亦節時行ふ所の祭事がある。此の他國家にある衛生、經濟教育其他一切の機關と事務とは大抵家にも備つてある。一家の家長は詰り小天皇陛下である。一家の總取締をする總理大臣であつて、同時に各省の大臣である。裁判官である。裁判官であつて同時に巡査を兼ね、又た探偵までも兼ねることがある。教育家、僧侶、衛生局長、外交官、兵卒等凡そ社會國家にある一切の用向は皆な凡て一家の父母の分擔せないものはないと言つて宜しい。それ故に、もし一家の父母たるものがチャンとした心得があつて、よく此等の職權を行ひ子供に各に又其れ相應の行儀習慣心得を有つやうする時は、其の行儀習慣心得は引き伸ばしさへすれば、丁度社會國家及び天皇陛下に對する凡ての本務となる譯である。『忠臣は孝子の門より出づ』とは此所のことである。然るに若し人の親たる者が漫然として更に子供の教育に注

忠の諸形

意せず、遣り放しに育てやうものなら、假令學校の教育は可くとも、萌芽のない所に樹木の育ちやうはないと同じく、遂に社會國家の厄介ものを生ずるものである。知識學問は年を取るに従つて何うにも付けることは出来るが、服従や同情や正義や正直や禮儀等の諸徳は殆んど注意されないやうな時分、十分家庭に於て基礎を養つて置かなければ子供の教育は失敗に了る外はない。今家庭内で小供の有つべき諸徳を一言で孝といふことが出来ると同じく、其の大きく生育した諸徳を忠といふのである。眞に味ある哉、忠孝一致の言と云ふべきである。

孝とはよく親に事へることであるとは、本の引き括つた説明にすぎぬ、即ち形式的解釋に過ぎぬ。其の一々の説明内容の解釋となると、命令、教訓、禮儀、學習、遊戯、起臥其他一切の事に就て一々の小供の心得、小供の本務を數へ立てなければならぬ。忠も亦た其の通りである。忠の形式的解釋は、よく君と國とに事へることとなる。が、其の一々の内容はと云へば、人民の立

場にあつて銘々の爲すべき仕事の一々を數へなければならぬこととなつて、甚だ込み入つた仕事となる。其れ故今此所で忠の委細の内容を論ずることは逆も出来ない、唯だ大體の様式と其れに關する一二の注意とを述べて見やうと思ふ。先づ忠にも直接と間接とを別つことが出来る。直接の忠とは其人の本業が國家皇室に關することにあるをいふ。宮中府中の人々の仕事即ち政府筋の御用に與る職掌の方々の忠は此れである。然るに人民は皆國家皇室の事に與つて居ないことはないが、其の本業とする所は寧ろ各自銘々の私事であるから、一種の意味での忠ではあるが、此れは間接の忠である。官吏にも私事がある、人民にも公事がある。けれども公事を責任として居ると、私事を責任として居ると自ら其間に相異がある譯である。が、忠君愛國に就て官吏のは從來可なりによく研究され、又た實行されて居るらしい。否な研究され實行されて居る凡ては殆んど直接の忠ばかりで、比較的間接の忠が疎そかになつて居りはしないであらうかと思ふ。

元來人民が自己の仕事を爲すのは必らずしも奉公の務を爲すと云ふ心持でするのではない。國憲國法に従つて國民たるの義務を怠らず、又世間の義理人情を果してさへ行けば、其の餘は自分及び妻子眷族の爲めと思ひながら、銘々の課業を勉強すれば、其れで可い筈である。換言すれば、法律、道德律、風俗などの命令に従ひながら、自己の課業に忠實であることは、假令毎日毎時國家とか皇室とかいふことを思つて居らずとも、良民たること、其れ自身既に忠といふことが出来る。人世の事は妙なもの、心に忠といふことを忘れぬ者の行爲の結果が、餘り國や君の爲とならず、自己の爲め、自己の爲めと斗り意識して居る仕事、が却つて公益を進めるやうなことがある。官吏の忠が公益を進めないといふではないが、自らも忠と思ひ、忠と揚言して居りながら、知らず識らずの間に利己心が進入して、忠を笠に着て私腹を肥し、私名を竊むやうなこともないとは限らない。『官田に在る蛙は官の爲めにし、私田の蛙は私の爲めにす』とかいふが、官を標榜して其實私の爲めに

嘵々する厚顔の蛙も随分有り得ることであるが、其所へなると私田の蛙が看板に偽なく、私の爲めにすると公言して私の爲めにするは聊か無罪と言へる。否、官吏以外の人の事とする所は、他く迄も其の私を成すにある、但だ其私の成し方が吾以外に迷惑損害をかけてはならぬ斗である。最も自己に忠なる者即ち最も君國に忠なる者と云へるのである。『一旦緩急あれば義勇公に奉ず』べきは固よりであるが、平時の事で云つて見れば、必要もなきになま、中國事を杞憂する百姓よりも、家業專一と耕地を整理し、良種を撰み、培養法を鍛錬して穀物の收穫を多くし、共進會に一等賞でも得るやうに考へることが忠であらう。又た詩人、美術家などが君國に忠を盡すといふことは、朝夕に君と國とを念ずることではない。彼等は寧ろ専心美の神に仕へて觀察を鋭くし、想像を饒に、言句を精練して常人の見及ばぬ、思ひ及ばぬ、又言ひ及ばぬ理想の新境土を開拓するを心とすべきである。して見れば忠は必らずしも人々の意識を占領する君と國との觀念の強さと正比し

ては居ない。が其れも此れも敢て君と國とを疎そかにするといふでは決してない、此やうな農夫、詩人、美術家の心にも暗々裏に自己に忠なることが即ち君國に忠となるといふ考が働らいて居らなければならぬ、このでもし此れが働いて居ないとすれば其の農夫も詩人も美術家も、眞によく自己にも國家にも忠なるものといふことは出来ぬ。如何に農業に勉めることが國力を増進すると云つても、飽く迄利己的に利慾本位で計り農業を勵むといふことは忠とは云へぬ。其れこそ『義理をかき、恥をかき、人情をかく所』の三角法の金溜め主義の人で、此れは方に悪人と云つて然る可して、論外でなければならぬ。忠といふは普通の義理人情を盡しながら自己の家業を勵むのでなければならぬ。更に其の一段上となると、利己的十露盤から割り出しては逆も引き合はないやうな農事上の改良を爲すことや、身錢を切つて地方殖産の興隆を謀つたりすることや、公益を謀りながら自己の家業に勉めるといふこととなる。詩人、小説家でも其の通り、唯だ賣れる買へるを

當てにして自己の筆を走らせるやうな所謂三文文士は自己に忠でもなく、又君と國とに忠どころではない。飽くまで眞面目な作品を出すやうでなければ、文士の文士たる價値はない。文士も眞面目に己れに忠實であれば、自然に社會風教に害ある文字を弄して、敢て人の劣情を挑發するやうなことはしない筈である。此の點で敢て日頃道德道徳と神經過敏に思つては居ないもの、不言不語の間に世の中の道德的秩序を破らぬのみか寧ろ其れと歩調を合せて行くのである。其れ故詩人でも一旦緩急ある時には獨逸のキヨルネルのやうに筆を投じて戎劍を事とし祖國の爲めに戦死したやうなものもある。哲學者でもフイヒテのやうに其の講義を中止して父妻相率ゐて戦争に奔命した者もある。戰場に出る出ぬは暫らく別として、詩人にも哲學者にも其の冥想沈思をすて、所謂俗務にたづさはるべき時機がある否な其れは畢竟彼等が詩人哲學者でありながら、又一面に於いて人であり國民であるからである。自己に忠であれとは、絶對的に詩人であ

歐米にも忠
愛の精神あ

れ、哲學者であれと云のではない。ヒュームが『哲學者たれ、されど又人たれ』と教へた通り、専門の仕事は普通の仕事の基礎の上に築き上げられたものでなければならぬ。従つて人國民といふ資格の上に根本的危険損害が振りかゝる様の場合には、専門の外廓から退却して普通の本城即ち直接の忠君愛國に立ち還らねばならぬ譯である。此の意味で最も自己に忠なるもの即ち最も君國に忠なる者と云へる。

日本人の忠勇なることは今日既に世界の定評となつた、世界は皆我國民の忠勇を激賞し韻羨して居る所である。が併し此所に注意すべきは、餘りに同胞が之れに調子付かぬことである、高慢すべからざる事である。忠勇は決して日本人の一手專賣ではない。思つても見玉へ、凡そ此のセチ辛い世界の舞臺に立つて、苟くも國を成して居ることが出来る以上、必らず一定度の忠勇の徳が無くては叶はぬ筈ではないか。國民が卑怯で不忠で、其れで光榮ある國家を組み立てることの出来る道理はない。歐米各國ともに

吾人以上でないかも知れぬが、又決して以下でもない所の忠勇の實例が無いと思つてはならぬ。世界は日清日露戦争前には、日本を見くびつて居つた、逆も彼れ等程の忠勇の徳は有るまいと思つて居た。然るに其れが實際も有つたものだから驚いたのだ。其れは勿論日本固有の優秀な精神の發揚ればならぬ。我れ等が中學の時に習つた位の歴史傳記の中にも、彼れ等の忠勇美譚は幾らもある。平凡なことではあるが、其の平凡なことさへ動もすれば忘れ去られんとする傾向ある今日、聊か記憶に従つて其れ等を語つて見るも、穴勝無益で無からうと思ふ。第一に思ひ出されるは彼の普國今日の基を開いたフレデリック大王である。大王は四周の國々を相手として、七年の戦争を繼續して遂に最後の勝利を得たのであるが、其の間壯丁は戰場に出て、實業は振はず、出費は多大であつたから、財用は足りない、其れで大王の軍は敗北又敗北で、普軍の損失は非常なもので、大王も僅に身を以て

免るといふ窮境に陥つたとも屢々あつた。併し若し一旦大王が敵手に擒はれてもしようものなら、それこそ敵は之を奇貨として難題を吹きかけ、普國は何んな見苦しい媾和條約を結ばせられるも知れない。ソコで此れは大王の忍びない所であるから、彼れは若し敵手に落ちたら直に自殺と心を極めて、右手には劔を持ちて號令して居たが、左手には常に毒藥の瓶を持ちて居られた。人民はソラ又壯丁、ソラ又金といふやうに人と金とを徴發された。都市は寂れ、田畠は荒れ、家々では既に幾多の犠牲を拂つて居るに關はず、國家の大事の爲め敢て快よく血税租税を負擔した。普國今日の盛運は此くの如くにして開けたのである。此は實に偉大なる、舉國一致の忠君愛國ではなからうか。又彼の英國が未だ今日のごとく海上權を占めなかつたエリサベス朝に、當時の大海國たるスペインが『無敵艦隊』を組織して、實に艦艦海を蔽ふといふ有様で、堂々肅々襲ひ來つた時に、エリサベス女王は國家未曾有の危急存亡の秋とあつて、自ら馬上にて全軍に號令し、國

家の爲に死を毫毛よりも輕んずべきを諭した時、一人の將卒も生を思ふ者はなかつた。而して此の憤興せる士氣は、遂によく無敵艦隊を全滅させて今日英國勃興の端を開いた。此れも亦た吾人に劣らぬ忠勇心の發揚と見ることが出来ぬであらうか。近くは亦た彼の米國である。殖民地たる十三州と當時世界の最強國たる英本國とは、金力に於て兵力に於て逆も釣合の取れた勝負ではない。然るに米國民は、『我に自由を與へよ、然らずんば我に死を與へよ』の意氣で、野から山から、市から工場から書齋から集り集つて、突嗟の間に烏合の軍團を組織して、ワシントンを總大將として獨立の旗上げをした。此は素人と本職との戦争である、貧乏人と金持との喧嘩である、一種の意味から言へば、強い者と弱い者との勝負である。ワシントンの軍はアチラでも敗けた、コチラでも敗けた、今年も敗けた、明年も敗けた。敗けに敗け抜いた。政府の經濟上の信用は落ちる、物資は集まらない。或る所の冬籠りなどでは、兵士は殆んど寒さを防ぐ衣服がない、身を養ふ食物がな

いばかりか、最も甚しきは穿つ靴がない。地上には一面氷が張り詰めてある。命令に従つて氷の上を進退する兵士の足は腫れて破れて血だらけとなる。血だらけの足跡が其の儘氷り付いて一見ゾツとするやうな光景を呈して居る。仁慈な總大將ワシントンは之を見て泣かずには居られなかつた。が併し此やうな情態であつても兵士はよく従順に又た快活に大將の下知を奉じたのである。十三州到る所此の精神が漲つたからこそ、よくもマア彼の無理極まる獨立戦争に勝つたのである。彼れ等に忠勇の名を與へないで可からうか、尙ほ此やうな例は和蘭にもある、イタリヤにもある、フランスにもある、又たロシアにもある。しかも其れが頗る少なからず有ることは吾人の忘るべからざることである。油斷大敵！吾人は未だ忠勇を誇るべきではない、更に忠勇を勵むべきである。

然り、眞に忠勇を勵むべきである。備はることを求めんとする慾目で以て我が國民を見れば、其の誇つて居る忠の徳は、未だ甚だ未熟であるやうに

平時の忠愛
未だ足らず

も見える。非常の場合、戦時の忠は比較的よく了解され又た行はれて居ることは今更疑ないが、其れてさへ或人は危ぶんで居たものもあつた。若し露國と媾和談判が彼れ程早く結ばれないで、戦争が永びいて二度三度露國の受けた位の大敗の報が一二年の間に續いたとしたなら、何うあつたらうか。我が國民はよく堅忍持久して再び陣勢を整へて見苦しからぬ戦を戦ひ抜くことが出来たであらうか、どうかと。サアといふ一段となると随分日本國民にも堅忍不撓の勇氣があることは、幾ら安目に踏んでも否定することの出来ぬは勿論であるが、兎に角我が忠愛心が一面に於ては、性急で感情的で随つて一時的である缺點を有して居るなどの評は、少なからず有る。此の點で我れ等は、モ少し合理的の持久的の忠愛心を養成するやう務めねばなるまいと思ふ。其れは果して何うして出来るであらうか。外でもない平素に於て人としての道を明らかにすると同時に、之を單に知識として留めて置かないで、よく實行に現はすといふ新らしい習慣を、輿論や教育の

力で作るのにある。或る武將或は其他の人々が日露戦争の功を收めた所以は新式教育の蔭ではなくて、全く古來武士道の爲めだと云つた。成程大部分其れに違ない。新式教育を受けた青年は、割合に臆病で、口計り達者で、軍事に對して割合に冷淡で、役に立たぬと云ふやうな一二の現象があるは事實であらう。が、さればと云つて古來の武士道を其儘に保存しさへすれば十分とも言へないであらう。兎角はモ少し複雑な精緻な道德觀念を其中に吸収させる必要あることは多言を要すまい。換言すれば、古來の武士道は日本人の到底捨てることの出来ぬ所であるが、其れが今日一發達を要することも否定されぬのである。而して其の發達は成るべく早く清新健全な輿論を作つて教育の方法によつて明治式の忠愛の所作や習慣を作るより外はないと思はれる。

戦時も大切であるが、平時は尙大切である。平時は戦時より長い斗りか、非常時の成敗は畢竟平時の修養如何によつて定まるからである。其所で

平時の忠愛であるが、吾人は遺憾ながら此の點で又た日本が歐米諸國に勝つて居ると信ずることは出來ぬ。此かることの優劣を判定する標準は固より定め難い。其の測定法は甚だ困難であるが、要するに此れは人としての修養の點で、東西何れが優つて居るか云ふことで、吾人は誠實、勤勉、正義、博愛の四標準で之を測定し得ると思ふ。日本にも十分此の四標準に及第して滿點を得るやうな立派の人々も少くないが、未だ全體の數から云へば、比較的歐米の一等國に劣つて居りはしないかと怪しまれる。空心配であつて呉れば、國家の爲め喜ぶべきであるが、聊か參考の爲め其の一斑を説いて見ようと思ふ。

第十一章 應用各論(六)

勲勉誠實

國と國との道德を比較するは困難なり——エマーソンの「英國國民性」の一節

比較は困難

大凡そ一國と他國との道德を比較するは、精密に云ふと、甚だ六かしい。第一に其の比較方法が何うすれば可いか、科學的に論定されなければならぬのであるが、此れが果して論定されるものであらうか。有形物質の上のことでさへ、既に少なからぬ困難が有る。況んや無形精神のことは頗る覺束ないこと、言はねばならぬ。それ故平時の忠て日本が西洋よりも劣つて居はせぬかといふも、今此所に科學的に證明しやうなどいふことでは決して無い。唯だ大體に於ての優劣を漠然ながら考へて見たいといふ迄である。比較は困難であるといふこと、比較の方法の科學的な見付け得ぬといふは、必らず國と國との間に優劣がないといふ譯ではない。余が考へる所によれば、最も確實な比較法は相互の習性風俗を對比して見ることであ

る。習性風俗は主もに各國民の道德上の智識の深さ廣さと又た其の實行力と正比するものであるからである。其れとして此所に英國國民の習性風俗を最もよく描き出した論文がある。其れと對照して日本の現時を考へることは趣味の多いことである。論文といふは例のコンコードの聖人エマーソンの『英國國民性論』である。よつて今其の最も勤勉誠實に關する二節を譯して讀者の高覽に供する。勿論エマーソンとても觀察違もあらう、解釋違もあらう、多少の世辭もあらう、不識不知の理想化もあらう。が兎に角本書は英國國民を領解するとしては既に定評のある好著である。但だ彼の文は深遠で巧妙で六かしいといふとも世のよく知つての通である。余は随分注意して忠實に譯した積であるが、或は其の眞を傳へ得ぬ所があるも知れぬけれども、其の大體の趣旨が取れぬやうなことはあるまいと思ふ。讀者は果して之を讀んで如何に感ぜられるであらうか。此は味方としては甚だ頼みとすべく、敵として甚だ恐るべき國民といふ印象が、獨り余のみ

エマーソンの
英國國民
性論

にあるのでは無からうと思ふ。偏に讀者自らの判断を仰ぐ次第である。以下皆凡てエマーソンの論文の一節である。

(1) 勤勉——余は自己の靴で、最もドッシリと突立てる人々の中で、最もドッシリ突立てる者は英人であることを知る。英人は其の馬匹で賞美する性質を自ら有つて居る、即ち活氣と耐久力是れである。余がリバープールに到着の日、一紳士は話の序に、余に當時のアイルランド總督の人となりて語つて此う曰うた、『クラレンドン卿は闘雞のやうな猛勇を有つて居る、而して死に至るまで闘ふ』と。而して余が最初に聞いたものは最後まで聞いたものであるが、其れ程迄に英人の賞美する一事といふは即ち**猛勇**である。猛勇といふ語は美はしいものではないが、併し英人は萬口一音之を謳歌して居る。馬丁も之を有つ、商人も之を有つ、僧正も之を有つ、婦人も之を有つ、雜誌も之を有つ、英人は曰ふタイムス新聞は英國に於て最も**猛勇**なもので

あると。而してシドネー、スミスは、國務大臣たる小ジョン、ラッセル卿は、明朝海峡艦隊の指揮を取るならんといふ言を俚諺となさしめた。彼等は汝自身の意見を敢て貫くやう汝に要求する。而して彼等は事務の處理上、單刀直入イエス或はノーと答へ得ぬ振舞ある卑怯者を惡む。彼等は敢て人の意に忤へもする、否な彼等は汝が本心から之を爲し、又た勇氣を以て之を爲すなら、快く汝をして十戒を破らせもする。汝は何うあつても、或る者で有らねばならぬ。苟も或る者なる以上は、汝は汝自身の意志するまに、此れを爲すも可し、彼れを爲すも亦可し。

器械が一切の事業に應用された、而して極度の完美に達した。それ故機關に注意し、竈に火を絶さぬ外は、人の爲すべき仕事といふは殆んどない、けれども機械は正確な世話を要求する。而して機械は倦み疲れることがないから、其の世話人に取つては荷が勝ち過ぎる。鑛山や鑄爐や、水車や、醸造場や、鐵道や、蒸氣ポンプ、蒸氣耕作器、聯隊操練、巡查教練、裁判所規程、商店規程

等が人間の一切の習慣動作に器械的正確を與へるやう働いた。戰慄すべき程の一大器械其れ自身が英國全土を占有して居る。空氣も、男子も、女子も、又た思想其物さへ自墮落でない。

此れ等機械の勢力と、機械の取扱は、國民に其れ相應の體力と氣力とを要求する。而して這般國民の間に投ずるものは、必ず一定量の氣力を蓄ひ居らねばならぬ。人は此所に存する生活の熱烈を見て、自ら處世方計を立て、言ふに至るであらう、兎に角此の國に在るに當つては、『一事最も明確である、此は決して氣弱者の爲に存する國ではない。優柔不斷的態度で、踰越踉蹌として居てはならぬ。自ら決心の臍を固めよ。自己自身の進路を取れ。さすれば尊敬され、引き立てられるに相違なし』と。

人多く曰ふ、スペインに旅行するには良好な體質を要すると。余は他の理由を以て、單に其の國民の氣力と筋力との爲めに英國に就ても同様のことを言ふものである。最も莊重嚴肅な事務と心得ざる限りは、假令朝餐の

雞卵、或は輕燒煎餅を注文する丈にしても、此強力者に力負けせざるを得ぬ。英人は其の全身を以て語る。其の音聲は胃から發する。——米人の音聲は唇から發するのに。英人は旅店或は道中の用度に於ては中々氣六かしく、又たキチョーメンである。何ぞ疎忽でもある時は、大聲に又た猛烈に其の怒を發する。其の元氣は各方面に現はれる、其の作法にも其の呼吸にも、又た其の嚙下の音にも、凡てが粗大な強力を示すのである。英人は勇氣を有す。彼は何ぞ出來事があれば先鞭を着ける。彼は精神及び肉體の適切な調節と一切諸力の意志に對する服従より生ずる所の垂直線を有す。恰も其の兩眼の軸線が其の脊骨に於て接合して、唯だ胴體と共にのみ動くやうである。

此の氣力は人々の各自に對しての無視と、石のやうな冷澁とて見られる。各の人が歩き、食ひ、飲み、髻を剃り、衣を着け、手眞似し身振りする、而して傍人に構ひなく各自の流儀で進退周旋する、唯だ傍人に干渉せぬやう、又た邪魔

せぬ様注意するのみである。此は彼が其の隣人の眼を無視するやう訓練されてあるといふ譯ではない。——彼は實に自己自身の事務に没頭して居つて、隣人のことを考へぬからのことである。此の練磨された國に於ける人々は、獨り自己の便宜如何を慮るのみであることは、恰もウイヌコンシンの無人の野に於ける第一先着者のやうである。如何なる奇癖でも此れほど自由に許されて、而も何人も之れに無頓着なる場所は何處にも聞いたことがない。英人の中には吹きすすむ雨の中に、其の蝙蝠傘を巻いて、ステッキのやうに之を揮りながら歩く者がある。假髪を着ける者もある、シヨールを着ける者もある、然し此れ等は何とも言はれない。而して英人は既に幾代も此の通りであつたのだから、今は其れが血肉となつて仕舞つて居る。一言に云へば、此所の島人の各々は、皆各安穩な、平靜な、音信往來もない一箇の島である。知らぬ者同志の仲間居る所を見れば、英人は聾者と外は見えぬであらう、其の眼は其テーブルと新聞から離れることはない。彼は

決して何等の好奇心にも、又た決して見苦しい感情にも誘惑されることはない。彼れ等は皆一様に嚴重な一流の禮式に訓練されて居る、而して決して此の羈絆を脱することはない。彼は握手せしむべく人に手を出さない。彼は他人に其の眼中を窺はせない。紹介なしに他人の面を見るは殆んど凌辱である。多數者の同席のとき、又は少數珍客の間でも、彼れ等は人々を紹介しない。それ故人を引き合せるといふことは契約ほども手堅い事である。紹介は宣誓である。英人は姓名を名のらない。宿屋で宿帳付けに其れを低語するさへ快からず思つて居る。もし英人が其の宿所を記して名刺を與へたなら、其は親交の表白と見て間違ない。而して假し彼が汝との昵懇を求めつゝあり、又た如何にして汝に盡し得べきかを考へつゝあるにしても、紹介された時、其の態度は冷澹なものである。

余は余が講演中に、貧弱な、無能な人類に就て余が書き慣れた、人を馬鹿にする様な幾多の字句を、其の不適當の爲め、讀むを憚つて全く削り取つて了

つたが、此れは此の著大な精力の奇態な證明であつた。此れ程迄に此の活潑な人種の美しい體格と勇氣とが余の想像力の上に影響したのであつた。余は商業上の大恐慌の折に英國に來合はせた。が、何人が破産するにせよ、英國は破産せぬといふ一事は有り有りと讀めた。英國國民は此所に既に一千年前も住んで居た、それ此所に何時迄も住むのである。彼等は其の隣國民のやうに、鼎の如く沸き起つて、上を下への革命を引き起すなどの氣遣は毫頭ない。何となれば、彼等は今も昔と同じやうに、多大の精力と多大の堅忍不拔性を有つからである。彼等を圍繞する權力と所有とは、方に彼れ等自身の製作である、而して彼れ等は今日只今も此れと同一の壯大な勤勉を行うて居る。

(2) 誠實——「チユートニック」種族は心情の單純といふ國民性を有つ、此は「ラチン」入種と反對な所である。元來「チユートニック」といふ獨逸語は、眞實及び正直といふ格言的意味を有つて居る。美術が其の證明を與へる。古い

彫刻や、奠祭經の表紙繪に見える所の僧侶や、俗人の顔面には熱誠ある信仰が見える。此の遺傳の端正に加へるに、商業が生じた正確とキチヨウメンな取引とを以てしたものが、即ち英人の眞實と信用である。政府は嚴格に其の約束を履行する。臣民は政府に少しの違反あるを許さない。特權の多かつた往古の時代でも、政府に違約でもあらうものなら、人民は堪ふべからざる失體として激怒したものである。それで現時に於て政治上の信用を害するやうな何等かの一小事件、或は財政上に何等かの私曲でもあらうものなら、全國民忽ち蹶起して調査會及び改良の委員を組織するやうになる。一私人も重大事件として其の約束を守る。消えて跡のない言葉も、一たび紙上に記されれば、土地臺帳(英國のドック)のやうに慥かなものである。英國國民の實行力は、其の誠實といふ國民性に基いて居る。元來眞實は其の天性から出るもので、體制の優勝な目印となるものである。自然は或る動物に體力を與へなかつた代償として狡猾性を賦與した。けれども狡猾

は他動物が恰も公害の復讐者のやうに感じて敵意を抱くものである。強力の揮ひ得られる優勝種族に於ては、其の種族は眞理に忠實である、眞理は社會生活の基礎であるからである。人類とは曾て休戦せぬ獸類も、其の相互の間では相詐はらぬ。他知れず某所に餌食を貯へ置いた狼が、其の朋輩を連れて其場所に行いて、掘つて見て其の餌食が無かつた時は、其の狼は即時に無抵抗に寸裂されて了ふといふ話である。英國國民の眞實は他國民よりも一層堅實な動物的體制上に其の基礎を有して居るらしい。彼れ等は其の考を發表するに當つて率直である、約束をするに慎重謹嚴である、而して他人からも率直な交際を要求する。吾人は假面を蒙つた人間と接するを好まぬ。吾人は赤裸々の事實を知りたく思ふ。たゞ直線を畫せ、何人に突き當らうとも、何處に行き着くとも構ふことはない。(といふのが英人の心術である。)英國國民が愛慕して國民の本尊として居るアルフレッド大王は、ノルマン征服時代の一記者によつて『正直者』と呼ばれた。モムマウスの

デヨフレイは、アーサー王の叔父王オウレリユースに就て、「一切諸王以上に彼は虚偽を惡めり」と云つた。ノース人グートルムはオラフ王に、「王らしき言葉を實行することを王らしき事業なれ」と言つた。英國名門の家訓的格言も多く正直と關連する。自己の言葉の王たることが彼れ等の誇である。彼れ等が誇語を弄して化身の皮の露はれた時は、「此の英語」(眞の意味)は此くくといふ。而して虚偽を語るとは無上の恥辱である。最下等の人民の文句に「晴れの名譽」といふがある、而して彼れ等の普通に稱賛する言葉に「彼の言葉は其の手形程に慥である」といふがある。彼れ等はゴマカンを惡む、曖昧を惡む、争訟の場合でも、何ぞゴマカシらしい分子の伴ふ方が輿論の上で負けてある。佛國教育を受けたチェスターフィールド卿さへ紳士を定義する一段となると、眞實が紳士の特色であると公言した。それで卿の言論の中で、前にも後にも此れほど國民から中心の同意を得た言葉はなからうと思はれる。此かることをいふ最上權利を有つて居るウエリントン

公は佛國の一大將官ケルラーマンに、英國將官の口約を信用して可なる旨を忠告した。英人は如何なる階級のもので、皆此の點で自ら貴しとして居る。英國では一般に佛人を眞實であるよりも寧ろ禮儀ありと信じて、自己の特色を誇つて居る。英人は控へ目に物言ふ、最上級の言葉を避ける、禮儀でも抑損して居る、佛語では虚偽なしに話すことは出來ぬと評して居る。彼れ等は富權力、歡待に於ても眞實を愛する、而して容易に體裁を繕ふことをせぬ、而して世間の成行きに任せておく。彼れ等は裝飾を好まぬ、而して若し裝飾をつけるなら、其れは必ず寶石でなければならぬ。彼れ等は喜んで老フローラーの著書で、エリザベス朝の貴婦人は「贗造寶石又は贗造眞珠の耳環を着ける程の忍耐を以て、虚偽を消化したつたらう」といふ一節を誦する。(虚偽を吐くことは贗造寶石や贗造眞珠の耳環を着ける程苦難のことであるといふ意)彼れ等はチユートン人種の特質と云はれる通り、土地に對する饑渴者である、無上に土地の所有を愛する者である。彼れ等は

石を以て築造する、公私の建物は壯大で又た耐久である、之をアメリカ邊の其れと比較する時は、米人が二圓を費す所に、彼れ等は十圓を投ずるといふ評判である。目だたない質の好い衣服、目だたない質の好い什器、目立たない質の好い壁の塗り方、一家中及び其の附屬物を通じて皆英國國民の誠實を表して居る。

英人は互に相信用する。英人は英人に信用を置く。佛人は此の忠信といふことで卓越して居ると思つて居る。英人は自己の稱賛を博さうとして小刀細工などは弄しない、唯だ正直に自己の本業に忠實にして居る斗りである。佛人は虚榮心がある。スタエル夫人は、英人は唯だ成功と正直とを併有する方法を工夫し出したばかりで、ナポレオンを怒らせたと言つた。彼女は外國讀者が此の言に如何に廣大な應用を試みたかをヨモ知らなんだ。ウエリントンには、彼れ自身、の正直心を以て、ボナパルトの事業の破滅を知つた。彼はフランス帝國が不正直で、戦争で衣食して居つた事を看破す

るや否や、帝國の凶兆を豫言した。もし戦争が其の結果として新商業や農業工業の改良を來さないで、たゞ遊戯や煙火や見世物などばかりを目論見ならば、如何に繁昌の國でも、戦争に堪へ切れるものでない。況してフランスのやうに、徵發に苦しめられるばかりか、又は自己の入費で戦ふものは勿論である。それ故ウエリントンは多年の間リスボンで軍役に齷齪して、此所を足場として遂に其の廣大な戦線をウオタローまで擴げた、全歐洲の大言壯語以上に、自國民と自國民の三段論法を信じたからである。

余が歸國の後、モントリールで聖ジョージ祭の時、余も賓客の一人となり合はせたのであるが、余は其時の座長が其愛國的同朋に挨拶して「彼れ等は如何なる處でも、英人に遭遇すれば好んで眞實を語る人を見るを信ずる」といふを聞いたのである。而しても、し世界到る所、四月の二十三日に、二人なり三人なりの英人が在る所では、必ず打集うて眞實といふ國民性を相互に督勵し、合ふ以上、何人も此の祭の無益なことを考へることは出來ぬので

ある。

赤裸々の眞實を語る力時としては獅子の口窩内にあつても眞實を語る力に於ては、何人も英人に立超えることは出来ぬ。王の誕生日で、各の僧正は黄金の巾着を王に捧げるべく期待された時、ラチャマは『遊冶郎や淫蕩者を神は裁判し玉ふべし』といふ文句に圈點を施して、ヘンリー八世に羅典譯の聖經一冊を献じた。而して王は其れを嘉納した。其れ程に英人は相互の正大を貴む。彼れ等は其の所信を固執する、而して容易に其の時の間に合はせるやう自己の意見を變じ得ぬ。彼れ等は輕快に操縦されぬ程前部に重く荷積まれた船に似て居る、安樂も艱難も其の平生の處世觀を動かすことを許さない。余がロンドンに居た時千八百四十八年二月、エム、ギゾーがパリから逃れて此所へ來た。知人が屢々彼を訪問した。間もなく彼れの名は文藝院の名譽會員たるべく發議された。エム、ギゾーは落選した。たしかに英人はエム、ギゾーの名の顯赫なるを知つて居た。けれども英人

はムラ氣でない。彼れ等は此に多年の間新聞紙を讀んでエム、ギゾーを惡み、又た輕蔑すべく豫め固く決心して居たのである。而して今名譽ある流浪人、自國に於ける賓客といふ其の人の位置の變化も彼に對する待遇の相異を來さないのである。

彼れ等は公人に於て始終變らぬ節操と十分な確信と眞實とを要求する。アイルランド議員の不名譽の本は其の品性の缺乏に歸する。英人は曰ふ『彼れ等(アイルランド議員)を見よ、一百二十七の頭顱は、皆凡て羊の如く投票し、嘗て何事をも發議しない、而して四人の外擧つて所得税に投票したてはないか』と。

彼れ等は議院の内に於ても、外に於ても、投機師に對する懼を有つ。今日に於て英人の朝夕忘るゝ能はざる感情は、詐欺師に對する懼である。此れ等を惡むと同じ度合に於て、彼れ等は正直剛強及び自己に對する忠實を貴む。彼れ等は自家の目的に没頭する人を愛する。彼れ等は輕浮だとして

フランス人を嫌ふ、放漫だとしてアイルランド人を嫌ふ、教授だとして獨逸人を嫌ふ、千八百四十八年二月、英人は曰うた『見よ、フランス王及び其の黨派は、一發の發銃が無かつた爲め敗れた。彼れ等は發銃すべき良心を有たなかつた、其れ程根本的に君主政體の骨髓が腐蝕して了つた』と。

彼れ等は同一の理由で、毎日投機師だと言つて政客を罵る。彼れ等は人が權利を主張すること、又た自己の讓歩となるやうな金錢位置を拒絶すること、人々の頑強なを愛する。コリングウッド卿は、もし千七百九十四年六月一日の戰勝の爲めメダルを貰へぬ位ならと云うて、千七百九十七年二月十四日の戰勝の爲め當然貰へるメダルをも受領するを承諾せぬ。ソロデ長い間沙汰止みとなつて居つた前のメダルも授與されるとなつた。カッスルリフがウエリントン卿に、當時不評判のシントラ事件の明りが立たない内は、王の閱兵式にも臨まぬやうと勸告した時、卿は答へた『汝は臨むべき理由を余に與へた。余は此度の閱兵式には臨む積りである、左もな

くば以後決して王の閱兵式に臨まぬ』と。オクスフォードの矯激な一揆が保守黨員エルドン卿を追ひかけて叫んだ『彼所に老エルドンが居る。彼れを歓迎しやう。彼れは今迄裏切したことはなかつた』と。彼れ等は英國國民の好まぬお懶巧者にはトリムマー(洞ヶ峠)といふ議會内で用ゐられる綽名をつけた。

ルイ、ナポレオンなども此の名を受けた一人であつた。

以上は即ちエマソンが英國國民性を描寫したものである。もし果して此れが事實であつたとしたならば、此やうな國民に向つて尙ほ吾人が優勝の位置にありと言ひ得るであらうか。此は吾人の武士道の精神に加ふるに更に或るものを以てしたものはあるまいか。公平冷靜に研究に値する所である。